

Contents

| | | |
|----|---|----|
| 1 | 研究科の目指すもの..... | 1 |
| 2 | 目的・特色 | 2 |
| 3 | 教員の紹介 | 3 |
| 4 | 研究プロジェクト..... | 12 |
| 5 | シンポジウム・講演会・公開講座・FD | 13 |
| 6 | 教員の出版物..... | 15 |
| 7 | 学位論文・制作コンテンツ一覧(2007年度).. | 17 |
| 8 | 博士学位取得者論文要旨(2007年度) | 20 |
| 9 | 言語文化フォーラム 2008 | |
| | 招待講演者発表要旨..... | 39 |
| | 名誉修了生発表要旨..... | 40 |
| 10 | 外部評価委員会報告..... | 44 |
| 11 | 年間スケジュール..... | 63 |
| 12 | データで見る研究科 | |
| | 各種アンケート..... | 64 |
| | 就職・進学状況..... | 69 |
| 13 | Graduate School of Languages and Cultures | |
| | General Information | 71 |
| | Subjects and Classes | 74 |

研究科の目指すもの

1

「名古屋大学学術憲章」は、「勇気ある知識人を育てる」ことを教育研究の基本目標としています。平成 10 年度に創設され、今年 10 年目を迎ようとしている国際言語文化研究科は、この名古屋大学の基本理念に基づいて、固定した既成の文化的「境界」を超えて新たな境域へと踏み出していく「勇気」ある「知識人」の育成を目指しています。一つの基準だけに価値を認めようとする、またその価値が唯一絶対のものであると信じ込むことは、ある種の危うさをもたない。このことは特に言語と文化についていえることであり、自国の言語と文化のみを価値あるものとして捉え、その基準だけに従って行動することがどのような結末を迎えるかは歴史の示しているところです。現在から未来の歴史を生き抜いていくためには、固定された文化的「境界」を踏み越えていく勇気が必要となります。

国際言語文化研究科の日本語文化専攻は、日本文化、日本語教育、日本語学の専門的素養を備え、日本という「境界」内に閉じこもるのではなく国際的な視野をもって世界で活躍できる日本語教員と日本文化学者を送り出しています。国際多元文化専攻は、ジェンダー、メディア、表象文化、言語文化などの諸領域において単一の価値という固定した「境界」を超

えて、多元的な諸文化に新しい価値を見出すことのできる専門家を養成しています。高度専門職業人コースは、高度の専門的資質を有する職業人を育成する社会人リカレント・プログラムであり、現職の高等学校教員などの再教育等に貢献しています。

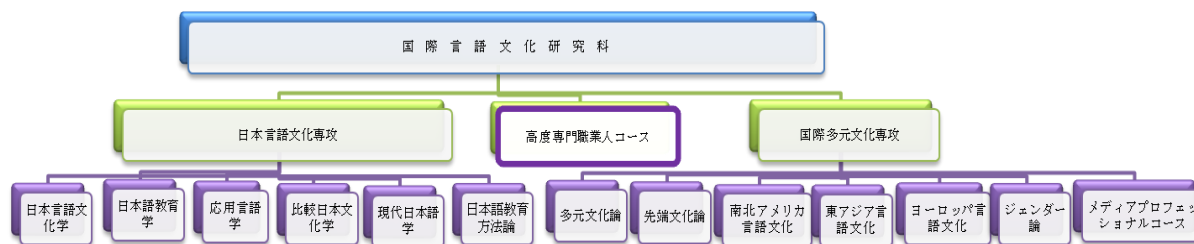
平成 18 年度には、情報と通信の融合が進む現代社会に即応できるコンテンツ制作者（新聞人、放送人、映像作品制作者など）の育成を目的として、国際多元文化専攻にメディアプロフェッショナルコースを設置しました。このコースは、中日新聞社、東海テレビ、電通中部支社、トヨタ自動車など東海地区のマスメディア関連企業の協力を受け、論文作成とコンテンツ制作のためのメディア実務指導を含む教育プログラムを設けています。これは、大学がアカデミズムという「境界」を越えてメディア産業と連携し、産学パートナーシップの開発を通して相互に有効な発展と活性化を目指すという斬新な試みであり、今後は国際言語文化研究科の大きな柱のひとつとなることでしょう。

吉村正和
国際言語文化研究科長

ミッション

国際言語文化研究科は「中期目標」として、次の5つのミッションを策定している。

- **(研究)** 国際言語文化の分野において国際的にトップクラスの位置を獲得し、それを不動のものとするために社会連携を視野において研究推進戦略を立て、この分野における研究拠点を目標とする。
- **(大学院教育)** 日本語文化研究者、日本語教育者、多元文化研究者、メディア研究者・制作者など現代社会に有用な人材の育成において、地域社会、国際社会から高い評価を得るために、それにふさわしい教育プログラムを確立する。
- **(国際交流)** 言語文化に関する国際的な学術連携を促進し、特に東アジアからの留学生の教育を充実することにより、国際交流を推進する。
- **(社会連携)** 国際言語文化研究科の保有する知的資産及び本研究科の産出する知的資源を広く社会に還元するとともに、地域社会、地域企業の保有する資産を本研究科の研究教育に有効に活用していく相互連携システムを構築する。
- **(言語文化教育)** 名古屋大学の言語文化教育に関わる実施上の責任を負う部局として、言語文化教育の質的向上に寄与する。



目的・特色

2

目的

国際言語文化研究科は、日本語文化専攻、国際多元文化専攻、および高度専門職業人コースから成る。国際多元文化専攻には、メディアプロフェッショナルコースが設置されている。各専攻および各コースの人材養成に関する目的は、以下の通りである。

- 日本語文化専攻は、日本文化、日本語教育、日本語学の研鑽を基礎とし、実践的語学力を身につけ、国際的な広い視野と深い洞察力を備えた日本文化の専門家および指導的日本語教育者の養成を目指すものである。
- 国際多元文化専攻は、既存のアカデミズムを横断する言語文化の諸問題と、世界の諸地域に新たに生成しつつある文化に関する研鑽を礎とし、実践的語学力を身につけ、国際理解と国際協調に貢献しうる高度専門職業人と研究者の養成を目指すものである。
- メディアプロフェッショナルコースは、急速に変化する世界規模のマルチメディア環境における消費者あるいは生産者の観点から、批判的かつ創造的なメディア・文化研究を目指すものである。学際的、比較論的、歴史的なアプローチによる文化研究およびコンテンツ制作実習を通し、多様なメディアの社会的役割とそのコミュニケーションの性質を究明し、メディアの理解を専門的水準にまで高めるとともに、情報発信の実践的スキルを養う。
- 高度専門職業人コースは、高度の専門的資質を有する職業人を養成するためのプログラムであり、異文化に精通し外国語に堪能であり、国際的視野に立って地域に貢献する人材を養成することを目指すものである。

特色

我が国の文化系大学院は、総じて西歐的学問の受容、あるいは理論の追求に重きを置き、実社会における理論の応用、あるいは実社会に役立つ実践的能力の開発を軽んじてきたきらいがある。文化系大学院が抱えるこのような弱点を克服するために、本研究科は理論と実践の両立を学是とし、以下に掲げる具体策を講じている。

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ➤ 外国人留学生の積極的受け入れ ➤ 外国人留学生に対する日本語表現演習(日本語文化専攻) ➤ 日本語教育実習の重視(日本語文化専攻) ➤ 実践的語学力養成のための表現演習(国際多元文化専攻) ➤ 外国語による修士論文(国際多元文化専攻) ➤ 翻訳・通訳技術演習(高度専門職業人コース) ➤ マルチメディア技術演習(高度専門職業人コース) | <ul style="list-style-type: none"> ➤ 学部3年次生に対する受験許可 ➤ 帰国子女の積極的受け入れ ➤ 中等・高等学校教員の受け入れ ➤ 官公庁・企業派遣の研修員の受け入れ ➤ 昼夜開講制の実施 ➤ 個人指導の徹底 ➤ 他研究科で取得した単位の認定 ➤ 外国語能力達成基準と必読文献制度の導入 ➤ TA、RA 制度の導入 |
|---|--|

教員の紹介

3

日本言語文化専攻

■ 日本文化学講座 ■

柴田庄一 (SHIBATA, Shoichi) 教授
日本とドイツの近・現代文学ならびに異文化間コミュニケーション論を専攻。とりわけ、ニーチェ、カフカ、トラークル、ヘルダーリン、鴉外、漱石、兆民、荷風等をはじめとする比較研究。また、近年は、国際関係論を中心として、地域間協力や文化交流にも関心を抱く一方、特に「暗黙知」と創造理論との相互関係、「読書の現象学」の系譜や「意味」生成分析とテキスト論を手がかりに、総合的な言語文化学に関する基礎理論の構築に取り組んでいる。その他の指導可能領域は、「近代主義」批判の源流と系譜、スポーツや職人技の習得理論と身体知、伝統芸能の特徴の分析と芸談、等々。

福田眞人 (FUKUDA, Mahito) 教授
主として医学と病気の観点から比較文化史研究を行っている。これまでの研究では、結核、梅毒という病を通して見た英国と日本の近代社会の分析・考察を中心に据えつつ、さらに明治期一般の疾病および衛生観念の発達過程を追ってきた。こうした研究の中で、文学を時代の貴重な資料として使用するという点から比較文学的研究の色合いをも含んでいると言える。現在は、徐々に結核の研究から枠を拡大して、その治療法としての水、温泉、その水の供給、処理(上下水道)といった点を、風呂・トイレまでも視野に入れながら行っている。

涌井 隆 (WAKUI, Takashi) 教授
日本語や英語の詩を解釈したり、書いたり、翻訳したりする。難解な詩は解釈されず放置されたままになっていることが多い。日本近現代文学に見られる星など天体の描写にも興味を持っており、本にまどめたい。アニメーションについての興味は詩からの延長で両者は短い芸術表現として多くの共通点を持っている。視覚芸術としても今日最も可能性を秘めた形式であると考えられるので研究する人も増えていくだろう。

■ 日本語教育学講座 ■

小坂光一 (KOSAKA, Koichi) 教授
言語教育学への応用、特にさまざまな言語の教育法への応用を目的とした対照言語学を行っている。対照の対象は主として口語における意味構造と統語構造であり、目的に合わせて恣意的に記述方法を選択し、簡略化を目指している。

鷺見幸美 (SUMI, Yukimi) 准教授
現代日本語を研究対象とし、意味・文法の分析に取り組んでいる。特に、移動動詞に注目し、その意味と文法的ふるまいの関わりや意味の拡張について研究している。今後は、意味・文法研究の成果の日本語教育への応用についても考えていきたい。

杉村 泰 (SUGIMURA, Yasushi) 准教授
「窓が開いている」と「窓が開けてある」、「10時に寝る」と「10時で寝る」など、日本語教育において問題となる文法項目を取り上げ、外国人が母国で日本語を教えるのに効果的な文法教育を開発している。現在は名古屋大学のコーパスプロジェクトで集めた日本語コーパス、学習者の作文コーパスを使い、学習者の誤用分析にも取り組んでいる。

池田佳子 (IKEDA, Keiko) 准教授
第二言語学習・習得場面を含む、あらゆるコミュニケーションの場における談話の研究を行っている。さまざまな談話分析のアプローチを応用して、教室指導、言語学習者のタスク・パフォーマンス、演説、講義、口頭発表、面接、討論など多岐のスピーチ・ジャンルにおける(学習者、母語話者を問わず)言語使用を見ている。

外池俊幸 (TONOIKE, Toshiyuki) 教授 (エコトピア科学研究所)
生成文法の基本的な考え方を踏まえた言語研究を行ってきた。また、日本語の電子辞書作りに関わったので、辞書を中心とした文法の構造化にも興味がある。ヒトの特質を考える認知科学全般に関心があるが、最近では、特に最適性理論の言語分析に興味を持っている。

教員の紹介

■ 応用言語学講座 ■

井上 公 (INOUE, Isao) 教授

これまでは、理論言語学の視点から言語習得を研究してきたが、今後は、言語習得モデルの妥当性をコンピュータ・シミュレーションによる評価によって検証していきたいと考えている。

奥田智樹 (OKUDA, Tomoki) 准教授

これまでは、日本語の助動詞、フランス語の叙法や法助動詞など日仏語のモダリティ表現について、発話理論などに依拠した意味論分析を行ってきた。今後は、より広く機能語全般を対象とすることにより、その背後にある両言語特有の主観性の捉え方の枠組みの、どこに接点が見出せるのかを明らかにしたいと考えている。また、それに関連して、特に日本語の記述に用いられるメタ言語が、英語やフランス語にどこまで翻訳可能かという問題にも関心を抱いている。

■ 比較日本文化学講座 ■

前野みち子 (MAENO, Michiko) 教授

近年はドイツ、ネーデルラント、そして北フランス、イギリスまでもを含めた北ヨーロッパの16・7世紀に焦点を当て、近世都市市民の恋愛観・結婚観の変容過程について研究している。一次資料として俗語、諺、民衆教化本、文学、そして図像(絵画、銅版画、木版画、寓意図像集 etc.)などを幅広く扱い、近世都市の経済構造の変化と絡んで中世末から次第に近代が生まれ出ようとする時代の恋愛・結婚現象を解明したいと考えている。またこの関連で、ヨーロッパの恋愛・結婚観に刺激を受けた明治期の小説、そして女子教育にも関心をもっている。

大庭正春 (OHBA, Masaharu) 教授

ヨーロッパの近代演劇史の延長上にありながらその流れからの脱却を試み、新しい演劇の方向を示したドイツの劇作家バルトルト・ブレヒトと彼の戯曲制作、特に「教育劇」に多大な影響を与えた日本の古典演劇(能、歌舞伎等)との接点をもとに、両者の比較並びに両者の異なった文化的背景を考察する。一方ではヨーロッパにおける演劇論の変遷、他方では日本の能に代表される禅の美学および芸術論(世阿弥の能楽論)を学び、両者を比較検討し、それらの類似点または相違点等がヨーロッパと日本文化の比較で普遍的なものか否かを考えていく。

渡辺美樹 (WATANABE, Miki) 准教授

児童文学のファンタジーの分野とマジック・リアリストと呼ばれている現代作家との関わりに現在は興味を抱いている。

胡 潔 (HU, Jie) 准教授

『源氏物語』の基礎研究の一つとして、その背景にある平安貴族の婚姻、居住、呼称などについて研究してきた。最近では、漢文学と平安文学の比較研究も行っている。

浮葉正親 (UKIBA, Masachika) 准教授 (留学生センター)

文化人類学的な視点から日本と韓国の民俗文化を研究し、その差異や共通点を検討している。

■ 現代日本語学講座 ■

鹿島 央 (KASHIMA, Tanomu) 教授 (留学生センター)

日本語学習者の発話にはさまざまな韻律的特徴が観察されるが、その中でも特にリズム現象に焦点をあてている。中心テーマは、学習者のリズムが日本語のモーラあるいは音節といった観点からどのように分析・記述でき、その結果がどのように音声教育に応用できるかということである。それにはまず、日本語そのもののリズムについて音声的・音韻的に分析する必要がある。この点について現在新しいリズム論をめざして多角的に検討している。

初山洋介 (MOMIYAMA, Yosuke) 教授 (留学生センター)

言語学の一分野である意味論を専攻し、主に現代日本語を研究対象としている。ここ数年は特に、比喩(メタファー、トニミーなど)、多義語(ネットワーク分析、プロトタイプの意味の認定など)、慣用句(比喩に基づく慣用的意味の成立など)といった意味の転用・拡張を伴う言語現象に取り組んでいる。言語研究の究極の対象は意味であり、まだまだ解明すべき課題が数多くあると思っている。

李 澤熊 (LEE, Tackung) 准教授 (留学生センター)

日本語を学習者の視点で研究している。具体的なテーマとしては、学習者が日本語を学ぶ際に難題とされる分野の一つである意味分析を行っている。現在は語彙・文法項目を題材にした類義表現の分析に取り組んでおり、日本語教育への効果的な応用、特に実用的な語彙・文法指導の方法を探っている。

教員の紹介

■日本語教育方法論講座■

村上京子(MURAKAMI, Kyoko) 教授 (留学生センター)

教育心理学の観点から日本語教育を考える。主に教育評価及び言語習得を研究している。教育現場におけるデータの蓄積から習得プロセスに関する研究を行っていきたい。そのためにも研究法、評価法が重要な課題となる。

衣川隆生(KINUGAWA, Takao) 准教授 (留学生センター)

学習者の自律学習能力、自己制御学習能力を養成するために、どのようなコース、シラバス、カリキュラムデザインが考えられるのか、そして、ファシリテーターとしての語学教師にはどのような学習支援ができるのかに興味を持ち研究を進めてきた。研究は主に教室場面をフィールドとしたアクションリサーチの手法をとり、先行研究から得られた知見をいかに教室場面で具現化していくかを探求している。日本語学習者の学習背景、学習動機、到達目標、学習形態が多様化している現在、このような個々の学習者

に対応した教育方法論を検討していくことは重要である。

石崎俊子 (ISHIZAKI, Toshiko) 准教授 (留学生センター)

コンピュータの特性を最大に生かした CALL 教材開発を聴解および漢字の分野で開発している。また、コンピュータ日本語教育における学習効果を分析し、更に優れた教材に発展および開発を目指している。

■助教■

川口直巳(KAWAGUCHI, Naomi) 助教

インターアクションの社会言語学の枠組みで日本語会話を分析している。特に親しい者同士が会話中にどのようにして親しさを表現しあっているのかに興味がある。今後は、接触場面にも注目し、日本語学習者のコミュニケーション問題にも取り組んでいきたい。



教員の紹介

国際多元文化専攻

■多元文化論講座■

松本伊瑛子 (MATSUMOTO, Isako) 教授
 様々な文化事象をフェミニズム・ジェンダー的観点から考察していますが、フェミニズム研究やジェンダー研究を始めたのは、男女の関係性への関心からでした。まず手始めに、エレヌ・シクスーの作品の解釈・紹介・批評に努めてきましたが、彼女の作品は西欧社会において性差がどのように形成されてきたかを考える上で、また西欧社会の負の側面を考える上で、色々示唆に富んでいて興味深いです。シクスーとの幸運な出会いのあと、日本や東洋への関心も芽生えました。今は、日仏の文化比較を、男女(ジェンダー)の関係性や、主体性を切り口に研究しています。

鈴木繁夫 (SUZUKI, Shigeo) 教授
 ミルトンに代表される西洋の近代宗教政治思想が現代日本のそれとどのように絡みあい、その絡みあいのなかから私たちの立ち位置を歴史的に相対化し再考している。16-17世紀のエンブレムが、西洋古典を媒介としながらルネッサンスの法律・倫理とどのように絡み合っていたのか探っている。一次資料を渉猟しながら文献実証主義を心がける一方で、象徴理論(カッシーラー)や差異理論(デリダ、ドゥルーズ)の知見も利用しながら、独自のルネッサンス文化観を構築しようと模索している。英語教育にも触手を伸ばし、他者との対話を失わない e-learning 方法を開発している。

田所光男 (TADOKORO, Mitsuo) 教授
 東欧や北阿からフランスに移住したユダヤ人のアイデンティティと、ショアー・イスラエル国家・植民地体制の終焉・共和制のライシテ、などとの関係を検討。68年世代の革命家、ショアー文学の作家、ユダヤ教の流れを汲む哲学者、バリのサンチエ地区の住民など広く視野に入れているが、現在はユダヤ系の歌手たちに焦点をあてている。反ユダヤ主義、ユーモア、非ユダヤのユダヤ人、同化と差異、アイデンティティの相対化、普遍、など、興味は尽きない。

飯野和夫 (IINO, Kazuo) 教授
 近代のフランス語圏の思想を研究している。研究の一つの中心は、コンディヤック、ボネラの18世紀感覚論哲学だが、こうした18世紀のフランス語圏の思想については、現代の多くのフランス系思想家たちが考察を加えているため、この点を手がかりに、フランス現代思想についても研究している。この分野ではデリダ、フーコーらに関心がある。時と所を異にする思考に触れることで、私たちが自己を反省してゆく手がかりにしたいと考えている。

■先端文化論講座■

越智和弘 (OCHI, Kazuhiro) 教授
 西欧が世界の支配文化となりえた真の原因が、秩序をつくるうえで障害をなす女性的な性格を敵視したことに見いだせること、そしてこの女性消去のシステムを地球上のいかなる文化にも先駆けて徹底して社会に浸透させられたことが、資本主義の爆発的な発展の原動力となったことを、性の解放と男女平等がもつ意味と、ドイツ的禁欲の発生経路という二つの観点から掘り下げていく。

藤井たぎる (FUJII, Tagiru) 教授
 20世紀初頭以来、「前衛」の概念は、なによりまず19世紀市民社会の芸術・文化に対するアンチテーゼとしてあった。西洋近代のブルジョワジーの美的判断に対するヴァルター・ベンヤミン、テオドル・W・アドルノらの批判的言説をふまえながら、「前衛」の意味を歴史・社会的な文脈のなかで明らかにし、またその活動が現代においていかなる機能を果たしているかを検討する。

山口庸子 (YAMAGUCHI, Yoko) 准教授
 20世紀初頭の舞踊と文学の相互的關係が、ここ10年ほどの研究テーマである。現在は、表現舞踊を中心としつつ、体操や服装改革なども含めた身体文化全般の研究へと視野を広げている。また、20世紀以降のユダヤ系ドイツ語詩人を中心に、女性性や他者性の問題にも関心がある。

布施 哲 (FUSE, Satoshi) 准教授
 政治社会という概念が象徴の体系を前提としたものである以上、“政治的なるもの”に関する諸理論は、言語学、哲学、精神分析学等、人文諸科学における各領域の成果を十分に踏まえたものでなければならぬ。そうした領域横断的な考察に加え、さらに経済システムや科学技術の発達といった外部的条件にも目配りをしつつ、ありべき民主主義理論の可能性と不可能性を探求してゆきたい。

■南北アメリカ言語文化講座■

加藤貞通 (Kato, Sadamichi) 教授
 環境問題は21世紀の大きな課題になってきました。難問山積の現状を打開するポジティブな論議の中心にあるのは社会・文化的拡がりを持ったエコロジーの発想です。宇宙=大自然の中の貴重な生態系

教員の紹介

に接近し、理解を深め、その過程で人間社会が、また自分自身がよりよく見えるように思索してみたいと思いませんか。

長畑明利(NAGAHATA, Akitoshi) 教授

20世紀のアメリカ詩人の作品読解を通じ、歴史的・社会的・政治的要因によって詩の形式がどのように変容するかを考察してきた。これに加え、アメリカ文学一般を主として人種・エスニシティの観点から考察する作業も続けている。現在は、同様の観点に基づく映画と音楽の分析にも着手している。

水戸博之(MITO, Hiroyuki) 教授

1) 広義のラテン世界の文化的・思想的伝統が、スペイン語・ポルトガル語世界で、如何に継承され変容と発展をしたかを、先住民をはじめ日系を含む様々な民族の複合からなる新大陸を中心に考察する。2) 経験則以上に認識されることの少なかった、西・葡2言語の対照研究を行う。また先住民の言語との関連も考察できればと思う。

水野由美子(MIZUNO, Yumiko) 准教授

現在の研究テーマは、合衆国における「領域変動」の歴史的意義の検討である。19世紀後半の併合地(現在の合衆国南西部)においては、かつての異国を自国化する作業はどのように進み、あるいは進まなかったのだろうか。またこのような国家側の働きかけに対し、先住民諸社会ではいかなる葛藤、変動、適応がみられたのだろうか。これらの課題について、経済・政治・国民統合が進んだ20世紀初頭の南西部先住民の事例に即して、土地制度、法的地位、学校教育の三つの分野に焦点を絞って分析を進めている。

■東アジア言語文化講座■

飯田秀敏(HIDA, Hidetoshi) 教授

言語類型論的に極めて近い日本語と韓国語を、音韻・形態・統語・意味のすべての面において比較対照させて分析し、その成果を、教授法研究あるいは教材開発という形で、日本人に対する韓国語教育に活かすことを目指している。両言語の相違点を明らかにするばかりでなく、英語という全く系統の異なる言語を参照枠として用いることにより、類似性の高さを浮き彫りにするという手法に特に関心がある。

柳沢民雄(YANAGISAWA, Tamio) 教授

北西カフカース諸語(特にアブハズ語の記述)を中心に言語の類型を研究している。これと平行して旧ソ連時代に独自の発展を遂げたロシアの言語類型理論も研究している。これは欧米の言語類型論とは異なる、思考と言語の関係についての研究から発達してきた内容的類型論である。また、バルト諸語とスラヴ諸語のアクセント法の歴史比較研究も行っている。

楊曉文(YANG, Xiaowen) 准教授

中国近現代の文学と芸術がどのように形成され、確立したのかを、文学者・画家・翻訳家である豊子愷(1898～1975)の研究を通して明らかにしようとしています。また、豊と周作人の関係という角度から1920年代の「文学研究会」などを研究し、豊がその代表的な作家の一人とみなされる30年代の「論語派」や豊に批判的態度をとる「左連」をも視野に入れます。同時に中華人民共和国成立後のサブカルチャー、とくに「文革」後のそれに関心があり、近年、非中国語環境下における、世界的な規模の「華文学」の研究に取り組んでいます。

丸尾 誠(MARUO, Makoto) 准教授

言語研究において、複雑な言語事象の解明に人間の認知のプロセスという観点からアプローチすることの有効性が現在では広く認められている。こうした方面での研究成果をも踏まえつつ、現代中国語にみられる各種表現・文法事項について、構造・意味・運用などの側面から複眼的に分析していくことを研究課題としている。とりわけ、人間の認知・発想との関連で興味深い事象が多くみられる移動動詞の用法および空間表現を中心に考察を行っているものの、広く中国語の動詞全般の用法についても、一貫して関心を抱いている。

勝川裕子(KATSUKAWA, Yuko) 准教授

言語の表現形式はその言語を使用する民族集団の事象、現象、心象に対する認識を反映している。現代中国語において、時間、空間、数量、領属などといった文法範疇がどのように認識され、どのように言語化されるかについて統語的、意味的側面から考察している。現在は特に中国語話者の領属に対するプロトタイプ効果を明らかにすることを研究課題としている。また、他言語と比較対照することにより、上記文法範疇における中国語表現の特徴を抽出してゆきたい。

■ヨーロッパ言語文化講座■

吉村正和(YOSHIMURA, Masakazu) 教授

近代西欧は、自然科学に象徴される合理的・理性的な思考法に基づいて形成されたとして一般に考えられているが、その成立過程においては、非合理的な思潮の典型ともいえる魔術・ヘルメス思想・錬金術・フリーメイソン思想などが深く関与していた。ロマン主義的想像力もそうした系譜の延長上にあるものとして捉えながら、新たなヨーロッパ像の構築を目指す。現在の研究テーマは、現代における翻訳理論の展開と翻訳の文化的機能の分析である。

村主幸一(MURANUSHI, Kohichi) 教授

Shaun Moores, Media/Theory: Thinking about Media and Communications (2005) を輪読していま

教員の紹介

す。本書は、現代生活におけるメディアとコミュニケーションに関する上級の入門書です。英語のテキストを読み、その段落ごとの要旨を受講者に述べてもらうという形で授業を進めます。興味深い論点やアプローチが登場するたびに、感想を述べ合ったり、私たちのメディアの日常経験への応用を考えたりします。

松岡光治(MATSUOKA, Mitsuharu) 教授
ディケンズ、ギャスケル、ギッシング、コリンズといった19世紀英国作家のテキストを主として心理的リアリズムの観点から分析している。現在は、特にヴィクトリア朝の都市文化における明と暗をイメージ化した言説、そして権力の実践に付随する屈折した心理が投影された言説について、歴史的・社会的コンテキストを踏まえて考察することに関心がある。インターネット上では、文学作品の電子化をはじめ、研究資料のハイパーテキスト化を率先して行っている。

上原早苗(UEHARA, Sanae) 教授
ヴィクトリア朝社会では性表現がグランディズムによって著しく規制されたと考えられているが、表現されるものと表現されえないものとの境界線はいかに画定されたのだろうか。また、作家はいかにこの境界線を侵犯したのだろうか。ハーディ、メレディスといったヴィクトリア朝後期の作家を取り上げながら、(自己)検閲およびエロスのコード化の問題を研究している。

西川智之(NISHIKAWA, Tomoyuki) 教授
19世紀後半、ウィーンは再開発が行われ、現在わたしたちが目にするような姿に生まれ変わったが、街の変貌は社会の変化をもたらし、さらにはウィーンの文化・芸術の変革運動にも連動していた。文化・芸術の背景にあるそうした社会的、歴史的な脈、あるいはヨーロッパ全体の当時の芸術変革運動を意識しながら、19世紀末から20世紀初頭のウィーンの文化・芸術の変革運動を研究している。

古田香織(FURUTA, Kaori) 准教授
私たちの周りには広告が溢れています。今日家を出てからここへ来るまでにたくさんの広告を目にしたはずですが、でもその中で覚えているのはほんの2~3かもしれません。広告をどのように受け取るかということは一人一人違います。広告には単に商業的な情報を伝えるための手段というだけではない、他の意味、機能があるからです。このような広告を、「記号論」という考え方をを用いて様々な角度から分析し、「文化」としての広告について考え、また他の文化現象にもそのような考え方を応用する可能性を探っていきます。

鶴巻泉子(TSURUMAKI, Motoko) 准教授
戦後フランスにおける地域・移民というマイノリティ問題を、現地調査を通じた地域とバリの比較という視点から研究している。独自の文化・アイデンティティを有する地域が、ヨーロッパ統合・拡大が進み移民問題が深刻化する現在どう変容しているのか、また

フランス社会はグローバル化の中での国内マイノリティ問題をどう捉えなおしていくかを探ることが目下の主な研究課題である。

■ジェンダー論講座■

谷本千雅子(TANIMOTO, Chikako) 准教授
クイア理論を出発点として、主にアメリカ文学から例をとりながら、ジェンダーの自己同一性や異性愛体制といった規範について考察し、肉体の性化がいかにしてなされるかを研究している。同性愛、異性愛という既存の定義を放棄するという立場にたつて、性的アイデンティティがいかにして確立されていくか、そのメカニズムを探っている。

星野幸代(HOSHINO, Yukiyo) 准教授
近現代中国において初めて近代的教育を受けた女性たちは、家父長制の父の圧制から脱却し、母と娘の関係を断ち切り、自由恋愛に身をゆだね、自己実現を目指し全うした者もいれば、仕事と家庭という問題に行き着いた者もいる。彼女たちの葛藤を描く当時の女流・男性作家の小説に対して、社会的・歴史的な背景と照らし合わせながら、フェミニズム的読み直しを試みている。

新井美佐子(ARAI, Misako) 准教授
経済学では、いわゆる主流派、非主流派の双方において、長らくジェンダー視点が欠落していたが、近年ようやく、このことを見直し、経済学やジェンダー研究の学問的発展につなげようとする動きが活性化してきた。こうした研究潮流の重要性を認識し、経済事象に対するジェンダー視点からの接近、あるいは経済事象に内在するジェンダー問題の捕捉を試みている。また、それらの成果をもとに、既存の経済諸学説を再検討したい。

■助教■

鄭芝淑(JEONG, Jisuk) 助教
日本と韓国のことわざを比較しその類似点と相違点を明らかにすることが主たる関心である。両国のことわざにとどまらず、どの文化のことわざも相互に客観的に比較できる方法論により「比較ことわざ学」の確立を模索している。その方法論として「ことわざベクトル」の概念を導入し、その性質を反映したことわざリストである「PSリスト」作成の提案を行っている。また、韓国語教育の現場も持っているため、韓国語学習者にどのレベルで何をどのように教えるかという韓国語教授法に関心を持っている。

教員の紹介

メディアプロフェSSIONALコース

春名幹男 (HARUNA, Mikio) 教授
 国連外交の現場から、米國務省、ホワイトハウス、米中央情報局 (CIA)、さらにネバダ核実験場と風下の放射能被害者たち、壁が崩壊したベルリンまで— 国際報道の現場を飛び回り、本も書きました。日米外交の「密約」も暴きました。共同通信の記者生活は38年間、そのうち12年間はアメリカで報道活動に携わりました。「核」と「インテリジェンス」が私の取材と研究の二大課題です。いま危機に立つジャーナリズムの現状を解剖して、その再生策を考えるとともに、学生諸君の取材の「目」と問題意識、技術を養い、一緒に議論したいと思ひます。

ヘイグ、エドワード (HAIG, Edward) 准教授
 応用言語学を研究分野とし、言説、特にメディアとのかかわりについての言説概念を研究テーマとしています。最近では英国におけるニュース報道が英国国会での出来事を報道する際のさまざまなメディアの要因に焦点を当て考察を試みました。また、英国における新聞の歴史についても研究テーマとして挙げています。このコースにおいては Critical Discourse Analysis (批判的言説分析) と呼ばれるアプローチを枠組みに、日本と英語圏諸国で報道された具体的なメディアテキストを考察しながらメディアリテラシーの実践と理論に取り組んでゆきます。

池側隆之 (IKEGAWA, Takayuki) 准教授
 フィルムやビデオまた写真などの映像メディアを活用したコンテンツや作品制作、また情報デザイン領域の研究を専門としています。特に近年、視覚伝達デザイン手法としての「インタープリテーション」を研究テーマの一つに据え、異分野間の相互理解において映像メディアが担う可能性を考察し、実際の制作をプロジェクト形式に展開しています。個々が設定するテーマは様々だと思ひますが、作品制作をする上でいかなる映像メディアを用いるべきなのか、またそれを誰に、いかなる手段で伝えるべきなのかを商業的・表現的側面から一緒に考えていきたいと思ひます。

八幡耕一 (YAWATA, Koichi) 准教授
 大学卒業後、放送や開発援助分野のパブリック・セクターに身を置き、その後研究者に転じました。こうした背景から、放送メディアの社会的意義や影響を公共政策との関連から考察・分析することを研究テーマとしています。例えば、社会的弱者のエンパワメントを目的としたメディアの政策的・手段的活用、社会システムにおけるメディアの位置付けといったことに関心があります。関連して先住民メディアやフィルム・ツーリズムに関する研究も進めています。今後も理論と実践の架橋を意識しつつ、多元的な現

代社会とマス・メディアの関係を見つめ、研究成果を政策提言につなげていければと考えています。

金 相美 (KIM, Sangmi) 准教授
 (博士: 社会情報学) 専門は、ニューメディア論。情報技術 (ICT) の普及による社会的影響 — 特に、ソーシャル・ネットワーク形成 (Human Communication) 及び投票行動などの政治過程 (Political Communication) — に関して社会心理学的観点からアプローチしています。近年は、1) インターネットを媒介とするブログや SNS などの個人発信型コミュニケーション・ツールの活用と社会関係資本 (Social Capital) の生成、2) インターネットによる政治的情報の流れの変化及び政治的討論が政治参加に及ぼす影響などについて、日韓中を対象に国際比較研究を進めておひしています。

田中京子 (TANAKA, Kyoko) 准教授 (留学生センター)
 多様な地域に暮らす人々、いろいろな世代の人々、障がいと共に生きる人々、世界各国から集う学生たちなど、様々な人々が織り成す文化を、対話を通して見つめ学ぶことをめざしています。国際交流の活動や留学生の相談に関わって30年になりますが、日々発見や葛藤があります。授業の中では、それらの経験を分かち合い、考察し理論化し、学びをまた実践に反映するというを試みています。対話相手の言語を学ぶことは必須であると考え、学生たちには多言語の習得を促していますし、自らも永く学習者です。

後藤明史 (GOTO, Akifumi) 准教授 (情報メディア教育センター)
 教育用コンテンツの開発を通して情報メディア環境の学習・教育への活用が研究テーマです。また「よい授業」とは何か。実際の授業に即してこれを分析する授業研究にも取り組んでいます。担当するメディアコンテンツ制作論では、ビデオ作品の制作を通し、撮影編集といった技術的な面ばかりでなく、構成、取材や演出といった面で頭と手と足をフルに使った授業を心がけます。

田島 暁 (TAJIMA, Satoru) 客員教授
 本職は中日新聞編集局顧問。取材、編集、論説などで記者歴40余年。多分野に挑む特別報道部、社会部畑などを歩いた。1面コラム「中日春秋」を7年間執筆。編集局長を経て論説主幹を7年余務めた。産学連携の本講座スタート時から新聞論を担当している。新聞人の魂、責任、使命感を伝え、ジャーナリストの仕事の重さと魅力を語って、学生たちをこの道へ引っ張り込む。経験にたち、現場を踏まえて、生々しい講義を続ける。

教員の紹介

水野雅夫(MIZUNO, Masao) 客員教授
第一次石油危機発生の1973年に中日新聞社に入社。伊勢市、金沢市で地域取材を経験した後、主に東京・名古屋で経済分野の取材を行ってきた。財務(旧大蔵)、経済産業(通産)、外務、総務(郵政)、外務の各省、日銀などを担当。1990年8月に勃発した湾岸危機・戦争を米コロンビア大学大学院東アジア研究所の客員研究員としてニューヨークで体験。欧州通貨統合、コソボ(ユーゴ)空爆などをNATO本部所在地のブリュッセル特派員として取材。折々のデジタル機器を使用して取材した経験をもとにデジタル技術の今後と報道のあり方を考察する。現在、中日新聞論説委員。

金川昇平(KANAGAWA, Shohei) 客員教授
広告はマーケティングの一手段であり、目的ではありません。しかし現代社会に対する影響力の大きさ(よい意味でも、悪い意味でも)は、メディアの環境から来るものです。ところで、広告という手段がなくなったら一体どうやって「素晴らしい新商品や新サー

ビス」を売ることが出来るでしょうか。つまり、見たことも話したこともないたくさんの他人に思いを伝える方法が「広告」といわれるものです。広告をビジネスと捉える視点よりコミュニケーションとして捉える視点のほうが、広告の未来を考える時重要であり、さらにはプロパガンダと似て非なるコミュニケーションは人間の永遠の課題ではないでしょうか。

長縄年延(NAGANAWA, Toshinobu) 客員教授
NHKで、ディレクター、プロデューサーとして主として報道番組を担当。スタジオ102、ニュースセンター9時、時の動き、新日本紀行、NHK特集、国会討論会、海外ウイークリーなどの番組を担当。その後、編成計画室、放送文化研究所に勤務、「20世紀放送史」の編纂に携わる。20世紀から21世紀へ、激動の歴史にメディアはどう対応したのか。ドキュメンタリー番組や映画を素材に検証したいと思います。

高度専門職業人コース

福田真人(FUKUDA, Mahito) 教授
併任、日本語文化講座所属。

渡辺美樹(WATANABE, Miki) 准教授
併任、比較日本文学講座所属。

松岡光治(MATSUOKA, Mitsuharu) 教授
併任、ヨーロッパ言語文化講座所属。

長畑明利(NAGAHATA, Akitoshi) 教授
併任、南北アメリカ言語文化講座所属

上原早苗(UEHARA, Sanae) 教授
併任、ヨーロッパ言語文化講座所属。

水野由美子(MIZUNO, Yumiko) 准教授
併任、南北アメリカ言語文化講座所属。

グローバル教員

ポッター、サイモン(POTTER, Simon) 教授
My scholarly discipline is geography, and I have taught many courses in Japan and the United States which were specifically “geography” or had geographical content. Besides teaching such courses, I have written many articles with themes in the history of geography and cartography, often with a cultural twist. Areas that I have explored in my research include Russia, historical Armenia, and Japan, and most of my recent writings on Japanese

cartography have been about contemporary illustrated maps. I am currently on the editorial board for the Association of Japanese Geographers and have served on the advisory board for an online encyclopedia about the history of non-Western science etc., as an editor for the Japanese Association for American Studies, and as a consultant about Japan for the international “History of Cartography” project. Besides having been active in geography and area studies, I have taught many courses in Japan to help university students use and

教員の紹介

improve their English skills, and among my publications are artistic and/or thought-provoking books for studying English that were authored alone, coauthored, or edited. Most recently, I have taught a yoga course for postgraduates and students from overseas; the focus was on the “raja” path, meditation, and how to apply such things to life.

モリタ、リャン・チュア (MORITA, Liang Chua) 准教授

I am a sociolinguist and I am better known as Liang Chua Morita to colleagues and friends and in my work. My main interest lies in the Thai Chinese community. I work on language shift and other linguistic aspects of the Thai Chinese. I now teach English Communication at various levels and Sociolinguistics to MA students. I have also taught Linguistics and Sociolinguistics at different levels in the past. I have strong views about injustices done to linguistic minorities and the abuse of minorities' linguistic rights. I try to play my part in the academic community by raising awareness to these issues.

デュクロ、ガランス (DUCROS, Garance) 准教授
過去には、持参金、結納金、衣類などの交換はよくあったが、現在では言葉さえ聞かないほどである。

しかし、それらは完全になくなったわけではない。名古屋の華やかな結婚式はそのいい例である。現代社会の性の平等、家制度の廃止を見れば、これは多少意外なことである。婚姻におけるモノの交換を通時的に研究することは、女性の地位と権利の変遷、家という物の重要性、婚姻の意義、相続の様態を考察する上で重要である。

ペーターズ、イェルク (PETERS, Joerg) 外国人教師
外国語としてのドイツ語 (教授および習得上の問題や文法規則) の方法論や教授法と言語学 (言語批判) に関心がある。習得するのが難しいといわれるドイツ語だが、どのような手段や方法、どのような教授法を用いればドイツ語の習得に最も成果が期待できるか、ということの研究している。もう一つの関心分野は言語批判であり、これは具体的な発話を言語学的に分析したり批判したりするために必要な社会にとって非常に重要な言語学の一分野であると思われる。

■ 留学生担当助教 ■

伊藤信博 (ITO, Nobuhiro) 助教
八世紀後半には、凶と吉を二項対立で考え、凶が穢を生むという観念が成立し始める。しかし、この穢観が「殺生」や「殺牛祭神」を禁じたとする論には、朝廷祭祀等に牛革を祭料として使うという矛盾点が存在する。また、この時期、牛革の生産高が伸びていること、「殺牛祭神」関連資料から朝廷が五畿内および対外の要地 (渤海交流) の越前、近江を重要視していたことなどから、これらの禁止令の政治的、思想的理由を探っている。

■ CALL担当助教 ■

小松雅宏 (KOMATSU, Masahiro) 助教
素粒子標準理論 (Standard Model) の枠組みを超えるニュートリノ質量に関する研究において、微小な質量の存在を確認する手法としてニュートリノ振動を用いた実験による検証を主たる研究課題とし、特にその手法においては原子核乾板技術を用いた振動によって生じるタウ粒子を検出することにより検証を行う。

研究プロジェクト

4

■科学研究費補助金■

| 研究代表者 | 研究課題 | 年度 |
|-------|--|-------------------|
| 西川智之 | 境界の消失と再生——19世紀後半から20世紀初頭の欧米文学 | 平成 20、21、22、23 年度 |
| 前野みち子 | 北ヨーロッパにおける〈愛〉の寓意の変容と衰退——中世末から近世へ | 平成 20、21、22、23 年度 |
| 松岡光治 | ヴィクトリア朝文学に見られるイジメの社会的および心理的文脈の研究 | 平成 20、21、22、23 年度 |
| 上原早苗 | 自己検閲の文法——ハーディ中期小説に施された改稿の分析 | 平成 20、21、22 年度 |
| 長畑明利 | エズラ・パウンドの儒教受容とファシズム——「表意文字的手法」の末路 | 平成 20、21、22 年度 |
| 鈴木繁夫 | 17世紀書籍観と人文主義修辞学とからみた『愛のエンブレム』における思索強制の研究 | 平成 20、21、22 年度 |
| 鶴巻泉子 | 少数文化地域と「内側のマイノリティ」 | 平成 20、21、22 年度 |
| 藤井たぎる | 20世紀ドイツ語圏の演劇と音楽に関する母型の概念 | 平成 19、20、21、22 年度 |
| 丸尾誠 | 現代中国語における空間認識に関する体系的研究 | 平成 19、20、21、22 年度 |
| 水野由美子 | 合衆国南西部における先住社会の再編過程の歴史的検討 | 平成 19、20、21、22 年度 |
| 杉村 泰 | 中国語話者のための日本語教育文法の開発と学習者中間言語コーパスの構築 | 平成 19、20、21 年度 |
| 吉村正和 | トランスレーション言説の解釈学的戦略に関する研究 | 平成 19、20 年度 |
| 小松雅宏 | NuMIにおける低エネルギーニュートリノ反応研究 | 平成 19、20 年度 |
| 山口庸子 | 女性のパフォーマンス空間としてのアスコーナ | 平成 18、19、20、21 年度 |
| 田所光男 | 20世紀における恐怖の言説 | 平成 18、19、20 年度 |
| 柳沢民雄 | アブハズ語のデータベース構築と辞書作成 | 平成 18、19、20 年度 |
| 渡辺美樹 | 文化の病としての拒食——拒食聖女からジェンダーの病へ | 平成 18、19、20 年度 |

■シンポジウム・講演会 (2004-2008年度) ■

| 主催 | 講師・題目 | 年月日 |
|-----------------------------------|--|----------------|
| 南北アメリカ言語文化講座 | Willard Spiegelman 氏 “Wallace Stevens: America's Most Original 20th Century Poet” | 2008年05月23日 |
| 先端文化論講座 日本独文学会東海支部 | 講演とパフォーマンスのタベ:ガブリエレ・ブランドシュテッター氏「グローバル化と、ダンス・演劇・パフォーマンス文化への影響——均質化か差異か?」、伏木啓+高木理恵「aqueduct II」 | 2008年3月31日 |
| 国際言語文化研究科 | International Symposium on the Topology of the Body | 2008年02月16~17日 |
| 国際言語文化研究科 (学術振興会 協賛) | 日仏二国間セミナー「グローバル化で変化する日仏の国家: アイデンティティ、ジェンダー関係、社会格差」 | 2007年11月3~4日 |
| 国際言語文化研究科 | 金平茂紀氏「テレビニュースは終わらない」 | 2007年10月13日 |
| ジェンダー論講座 | 河口和也氏「ゲイの文化研究に向けて——ダンスイベントを事例として」 | 2007年7月9日 |
| 「1890-1930年のドイツ語圏の文化・芸術の解体と融合」研究会 | 前田英樹氏「20世紀の到来と様式の解体」 | 2007年7月4日 |
| ジェンダー論講座 | Sebastien Lechevalier 氏 “Working Women in Japan during the Lost Decade: A Few Facts and a Comparison with France and Europe” | 2007年4月24日 |
| 南北アメリカ言語文化講座 | Dinah Roma 氏 “At Home in the Cordillera Wilds: The Letters of Maud Huntley Jenks, 1901-1903” | 2007年2月9日 |
| 「20世紀における恐怖の言説」研究会 | 岡 真理氏「恐怖(Terror)と恐れ(fear)のはざままで~パレスチナでパレスチナ人、ユダヤ人が生きるということ~」 | 2007年1月29日 |
| ヨーロッパ言語文化講座 | イブ・ドゥフランス氏「グローバル化の中の西欧マイノリティ文化ー音楽から見るフランス・ブルターニュ地方とケルト文化の再発見」 | 2006年12月22日 |
| 「1890-1930年のドイツ語圏の文化・芸術の解体と融合」研究会 | 平田達治氏「環状道路の建設からユーゲントシュティールのウィーンへ——汎ヨーロッパ的視点をも交えて」 | 2006年11月29日 |
| 多元文化論講座 | Jesús Vicens 氏 “The Influence of Religion to Ecological Consciousness” | 2006年11月10日 |
| 国際言語文化研究科 | David Cowart 氏 “Trailing Clouds: Immigrant Writing in America after 1970” | 2005年7月25日 |
| メディアプロフェッショナル論講座 第三回公開シンポジウム | 国際報道はいま——あなたの知らないもう一つの「戦場」 | 2005年6月30日 |
| 第二回国際シンポジウム | 第二言語習得過程における母語の影響 | 2005年3月28日 |
| 多元文化と未来社会第2回講演会 | 中沢新一氏「宗教の未来」 | 2005年2月08日 |
| 多元文化と未来社会第1回講演会 | 牧陽一氏「マシン化した身体を収縮させる——プロバガンダと中国現代アート」 | 2005年1月29日 |
| 第一回国際シンポジウム | 第二言語習得における母語の影響 | 2005年1月14日 |

シンポジウム・講演会・公開講座・FD

■公開講座■

| 年度 | テーマ | 開催期間 |
|-------------|-------------------------|-------------------|
| 2008 年度公開講座 | メディアを読み解き、創造・発信する力 | 6 月 11 日～7 月 4 日 |
| 2007 年度公開講座 | 日本語の魅力 | 6 月 13 日～7 月 20 日 |
| 2006 年度公開講座 | 恐怖を読み解く——日々の生活から国際政治まで | 6 月 14 日～7 月 14 日 |
| 2005 年度公開講座 | 日本像を探る——外から見た日本・内から見た日本 | 6 月 3 日～7 月 22 日 |
| 2004 年度公開講座 | 古典を読み直す | 6 月 14 日～7 月 14 日 |
| 2003 年度公開講座 | 都市と言語文化 | 6 月 14 日～7 月 12 日 |
| 2002 年度公開講座 | 美と文化 | 6 月 15 日～7 月 13 日 |
| 2001 年度公開講座 | イメージと文化 | 6 月 16 日～7 月 7 日 |
| 2000 年度公開講座 | 性と文化 | 6 月 24 日～7 月 29 日 |
| 1999 年度公開講座 | インターネットと英語学習 | 6 月 27 日～28 日 |

■ F D (Faculty Development) ■

| 担当 | 題目/内容 | 年月日 |
|-----------------|-----------------------------------|------------------|
| 吉村正和教授(研究科長) | 博士後期課程の研究指導の改善について | 2008 年 2 月 14 日 |
| 吉村正和教授(研究科長) | 国際言語文化研究科の今後のあり方について | 2007 年 12 月 19 日 |
| 吉村正和教授(研究科長) | 博士前期課程の現状と改善にむけて | 2007 年 9 月 21 日 |
| 全講座該当教員 | 「授業・プレゼンテーション」 | 2007 年 7 月 14 日 |
| 水野由美子准教授 | 日本学術振興会特別研究員制度について | 2007 年 3 月 7 日 |
| 涌井隆教授 | 私が担当している「言語文化交流論」について | 2007 年 1 月 17 日 |
| 有川貫太郎教授 | 「多元文化芸術論」について | 2006 年 12 月 13 日 |
| 羽山洋介教授 | 大学院生に対する諸々の段階でのより適切な対応に向けて | 2006 年 10 月 18 日 |
| 丸尾誠准教授 | 「現代中国語表現論」の授業内容、受講者状況、教材プリント、授業方針 | 2006 年 10 月 18 日 |
| 鷺見幸美准教授 | 日本語教育実習の現状と課題 | 2006 年 7 月 21 日 |
| 星野幸代准教授 | 「ジェンダーと文学」の授業内容、参加者状況、問題点、改善点 | 2006 年 6 月 21 日 |
| 福田真人教授 | 英国オックスフォード大学における医学史研究について | 2006 年 5 月 26 日 |
| 布施哲准教授 | 「現代民主主義特論」の授業内容とその方法 | 2006 年 4 月 19 日 |
| 奥田智樹准教授 | 対照言語学の授業と院生指導について | 2006 年 3 月 8 日 |
| 新井美佐子准教授 | 演習「ジェンダーと経済」の内容、評価方法、受講者の内訳 | 2006 年 2 月 16 日 |
| 勝川裕子准教授 | 「日中対照表現演習」における授業のねらい、構成、評価 | 2005 年 12 月 14 日 |
| 前野みち子教授 | 日言文入試改革について | 2005 年 11 月 9 日 |
| Edward Haig 准教授 | 「メディア言説論」の授業方法とそのねらい | 2005 年 10 月 19 日 |

FD の詳しい情報は次のサイトを参照。 ■URL: http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/menu7_folder/fd/fd.htm

■URL: <http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/tagen/FD/FD.html>

教員の出版物

6

| 【2008年】 | |
|---------------------------|---|
| 加藤貞通(訳) ウェンデル・ベリー(著) | 『ウェンデル・ベリーの環境思想 — 農的生活のすすめ』(昭和堂) |
| 布施哲(著) | 『希望の政治学 — テロルか偽善か』(角川学芸出版) |
| 【2007年】 | |
| 水野由美子(著) | 『〈インディアン〉と〈市民〉のはざままで — 合衆国南西部における先住社会の再編過程』(名古屋大学出版会) |
| 鈴木繁夫(著) | 『考える英語習得 — アクション・インクワイアリーからグローシアン英語へ』(英宝社) |
| 越智和弘(訳) ペーター・シュナイダー(著) | 『父よ!』(鳥影社) |
| 松岡光治(編著) | 『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化』(溪水社) |
| 松岡光治(共編) | 『ディケンズ鑑賞大事典』(南雲堂) |
| 長畑明利(共著) | 『語り明かすアメリカ古典文学』(南雲堂) |
| 松本伊瑳子・新井美佐子(共著) | 『ポジティブ・アクションの可能性 — 男女共同参画社会の制度デザインのために』(ナカニシヤ出版) |
| 新井美佐子(共著) | 『介護・家事労働者の国際移動 — エスニシティ・ジェンダー・ケア労働の交差』(日本評論社) |
| 新井美佐子(共訳) ロベール・ボワイエ(著) | 『ニュー・エコノミーの研究 — 21世紀型経済成長とは何か』(藤原書店) |
| 【2006年】 | |
| 山口庸子(著) | 『踊る身体 of 詩学 — モデルネの舞踊表象』(名古屋大学出版会) |
| 前野みち子(著) | 『恋愛結婚の成立 — 近世ヨーロッパにおける女性観の変容』(名古屋大学出版会) |
| 中井政喜(著) | 『魯迅探索』(汲古書院) |
| 粕山洋介(著) | 『日本語は人間をどう見ているか』(研究社) |
| 飯野和夫(訳) ジャック・デリダ(著) | 『たわいなさの考古学 — コンディヤックを読む』(人文書院) |
| 鈴木繁夫(共著) | <i>Milton, Rights and Liberties</i> (Peter Lang) |
| 長畑明利(共著) | 『異郷の身体 — テレサ・ハッキオン・チャをめぐる』(人文書院) |
| 長畑明利(共著) | 『二〇世紀アメリカ文学を学ぶ人のために』(世界思想社) |
| 長畑明利(共著) | 『アメリカ文化史入門 — 植民地時代から現代まで』(昭和堂) |
| 水野由美子(共著) | 『原典アメリカ史 — 社会史史料集』(岩波書店) |
| 水野由美子(共著) | 『グローバリゼーションと帝国 — シリーズ・アメリカ研究の越境5』(ミネルヴァ書房) |
| 谷本千雅子(共著) | 『アーネスト・ヘミングウェイの文学 — MINERVA 英米文学ライブラリー14』(ミネルヴァ書房) |

教員の出版物

| 【2005年】 | |
|-----------|--|
| 近藤健二(著) | 『言語類型の起源と系譜』(松柏社) |
| 中井政喜(著) | 『一九二〇年代中国文芸批評論』(汲古書院) |
| 丸尾 誠(著) | 『現代中国語の空間移動表現に関する研究』(白帝社) |
| 越智和弘(著) | 『女性を消去する文化』(鳥影社) |
| 鈴木繁夫(著) | 『フーコーの投機体験 — 「これはパイプではない」探求』(溪水社) |
| 福田真人(編著) | 『日本梅毒史の研究:医療・社会・国家』(思文閣出版) |
| 長畑明利(共著) | 『記憶の宿る場所 — エズラ・パウンドと20世紀の詩』(思潮社) |
| 水野由美子(共著) | 『講座 世界の先住民族 北米』(明石書店) |
| 中浜優子(共著) | 『言語学と日本語教育(4)』(くろしお出版) |
| 谷本千雅子(共著) | 『クエア批評』(世織書房) |
| 加藤貞道(共著) | <i>Encyclopedia of Religion and Nature</i> (Continuum) |

■実績報告■(2007年度)

| 専攻 | 講座 | 教員 | 著書(共著) | 論文(共著) | 発表(海外) |
|--------|------------------------|--------|--------|--------|--------|
| 日本語文化 | 日本語文化学 | 3 | 0 | 9(0) | 2(2) |
| | 日本語教育学 | 4 | 2(1) | 17(1) | 12(7) |
| | 応用言語学 | 2 | 0 | 2(0) | 0(0) |
| | 比較日本文化学 | 4 | 0 | 7(1) | 4(1) |
| | 現代日本語学(協力講座:留学生センター) | 3 | 0 | 6(0) | 1(0) |
| | 日本語教育方法論(協力講座:留学生センター) | 3 | 0 | 5(1) | 9(4) |
| | 計 | 19 | 2(1) | 46(3) | 28(14) |
| 国際多元文化 | 多元文化論 | 4 | 4(4) | 2(1) | 2(0) |
| | 先端文化論 | 4 | 1(0) | 6(0) | 5(0) |
| | 南北アメリカ言語文化 | 4 | 0(0) | 7(3) | 5(2) |
| | 東アジア言語文化 | 5 | 2(2) | 9(2) | 2(0) |
| | ヨーロッパ言語文化 | 7 | 4(3) | 10(0) | 2(0) |
| | ジェンダー論 | 3 | 1(1) | 4(0) | 3(1) |
| | メディアプロフェッショナル論 | 5 | 0(0) | 9(2) | 1(1) |
| 計 | 32 | 12(10) | 47(8) | 20(4) | |
| 共通 | 助教、任期付教授・准教授 | 11 | 8(2) | 19(10) | 4(3) |

➤ この実績には翻訳は含まれておりません。

学位論文・制作コンテンツ一覧（2007年度）

7

課程博士

| 専攻 | 名前 | 題目 | 講座 | 授与日 |
|--------|--|---|------------|------------|
| 日本語文化 | 山本幸一 | メニミーの認知言語学的研究 — 非自立型メニミーを中心にして | 現代日本語学 | 2008.03.25 |
| | 趙青 | 『新古今和歌集』と唐詩の比較修辞研究 | 比較日本文化学 | 2008.02.29 |
| | 松岡 みゆき | 現代日本語の終助詞「よ」「ね」「よね」 — 意味論と語用論の接点を求めて | 現代日本語学 | 2007.10.31 |
| | 加藤 利枝 | 柳宗悦における「朝鮮」の位相 — 日本近代美術史の「周縁」をめぐる | 日本言語文化学 | 2007.10.31 |
| | 田口 香奈恵 | 在日ブラジル人児童の日本語受身・使役表現の理解と産出に関する実証的研究 — 日本人幼児・児童との比較を通して | 日本語教育方法論 | 2007.06.29 |
| 国際多元文化 | 河尻 和也 | 張愛玲の文明観の〈変容〉についての考察 — 外国人作家の作品との関係を中心として | 東アジア言語文化 | 2008.03.25 |
| | 菅原 裕子 | 映画における超越の表象 — コミュニオンとしての映画 | ヨーロッパ言語文化 | 2008.03.23 |
| | 福原 みつ希 | 劉心武の小説の語りにもみる個人と社会 — ラベルとイメージの作用 | 東アジア言語文化 | 2007.02.20 |
| | 佐野 昌己 | 日本アニメにおける3DCGの適切な導入と人材の育成についての考察 | 先端文化論 | 2008.03.25 |
| | 服部 達哉 | デジタルシネマがもたらす新しい視覚表現 — 映画技術史の再考察 | 先端文化論 | 2008.03.25 |
| | 楊 紅雲 | 東映映画半世紀(1951-2001) — TVに対応した映画経営を中心に | 先端文化論 | 2008.03.25 |
| | VAN STADEN, Jacobus Frederik du Plessis | How This World Works: Capitalism, Anime and the Global Audience | 先端文化論 | 2008.03.25 |
| | 朴 英璇 | 日本統治期における韓紙の変容 — 朝鮮総督府の製紙改良事業を中心に | 東アジア言語文化 | 2008.03.25 |
| 山田 創平 | 都市と言説 — 都市域におけるHIV感染対策への言説研究の応用 | 先端文化論 | 2008.03.25 | |

学位論文・制作コンテンツ一覧（2007年度）

論文博士

| 名前 | 題目 | 所属先 | 授与日 |
|--------|--------------------------------|----------------|------------|
| 谷本 千雅子 | 物語の欲望 — 近代アメリカ小説のクエア・リーディング | 名古屋大学 | 2007.12.28 |
| 工藤 貴正 | 魯迅と西洋近代文芸思潮 | 愛知県立大学 | 2007.10.31 |
| 小林 貞弘 | 東京中心パラダイムを脱して—名古屋から見た初期日本映画史研究 | 相山女学園大学(非常勤講師) | 2007.10.31 |
| 山口庸子 | 踊る身体の詩学 — モデルネの舞踊表象 | 名古屋大学 | 2007.06.29 |

修士論文・制作コンテンツ

日本語文化専攻

| 名前 | 国籍 | 題目 |
|-----------------|---------|--|
| 李 賢珠 | 大韓民国 | テレビドラマに見られる日本人の非言語コミュニケーション — 対話場面における話し手の行動を中心に |
| 田中 典子 | 日本 | 「ハズダ」の内在的意味と表現効果 — 「ハズダ」の適切な指導の提案 |
| 韓 韓 | 中華人民共和国 | 少女小説に描かれた少女の「恋」の日中比較研究 — 『花物語』との比較を中心に |
| 康 先希 | 大韓民国 | 日本語の複合動詞の類義分析 — 「～ぬく」、「～とおす」、「～きる」、「～つくす」を中心に |
| 魏 志珍 | 台湾 | 日本語の学習レベルと談話における視点の習得との関連性 — 台湾人日本語学習者の場合 |
| 元 春英 | 中華人民共和国 | 日本語の話し言葉における「一タラ」「一バ」の終助詞的な用法 — 対人関係と発話行為の観点から |
| 古賀 恵美 | 日本 | アジア系留学生の人的ネットワーク形成 — ネットワークと日本語学習行動の相互作用 |
| 児玉 千晶 | 日本 | スウェーデンにおける俳句受容 |
| 呉 芷娟 | 台湾 | 連動を表す複合辞「につれて」、「にしたがって」、「に応じて」の類義分析 |
| 坂本 哲子 | 日本 | 対話能力の育成を目指した高等学校国語科の授業構想 |
| 章 玉琳 | 中華人民共和国 | 生起動詞の意味分析 — 「起きる」「起こる」を中心に |
| 全 鍾美 | 大韓民国 | 初対面の相手に対する自己開示の研究 — 日本語母語話者と韓国人日本語学習者の初対面会話を中心に |
| 張 迪 | 中華人民共和国 | 近代中国における日本書籍の翻訳と紹介 — 19世紀末から20世紀初頭の概況とその特徴 |
| 陳 曉貞 | 台湾 | 副詞の類義分析「やはり、さすが(に)」と「せっかく、わざわざ」 |
| TAYLOR, Rebecca | 英国 | 尾高型タイプのアクセント・パターン「名詞+『だ』」、「動詞+『から・ので』」の生成 — イギリス英語を母語とする日本語学習者を対象として |
| 野田 大志 | 愛知県 | 現代日本語における複合動詞の認知言語学的研究 |
| 李 碧娟 | 台湾 | 聴解テストの成績に影響を与える要因の研究 |
| 廖 本瑜 | 台湾 | 驚きを表す慣用表現の類義分析 |

学位論文・制作コンテンツ一覧 (2007 年度)

国際多元文化専攻

| | | |
|-----------|-------------|--|
| 小栗 ひとみ | 日本 | 韓国語母語話者の終助詞「よ」の習得に関する考察 — 教養日本語課程での学習者を中心に |
| 亀井 浩次 | 日本 | Aldo Leopold's Environmental Ethic and Its Influence on Educational Practice in the United States |
| 苅谷 真理子 | 日本 | American Hard Bodies vs. Japanese Hard Spirit: Similarities and Dissimilarities |
| 韓 英 | 中華人民 共和国 | 中国朝鮮族の帰属意識 |
| 葛西 裕仁 | 日本 | Narratives of War in Japanese Film |
| 多田 典子 | 日本 | How Far Has Diversification in Non-regular Employment Developed?: Labour Force Status, Occupations, and Female Workers |
| 荒井(黒崎) 慶子 | 日本 | 일본어 모어 화자인 한국어 학습자를 위한 기본 한자어 선정의 시도 |
| 笠原 健太 | 日本 | なぜその道を * |
| 小林 亜由美 | 日本 | An Analysis of Nancy Cunard's Route to an Anthology Negro |
| 全 孝暎 | 大韓民国 | 少子化対策に関する日・韓比較研究 — 1990 年代以降の政策を通じて |
| 鄒 旭 | 中華人民 共和国 | 望まれる女性像 — 1970 年から現代までの資生堂の化粧品広告に見られる女性像の変遷について |
| 大根 絹代 | 日本 | 住まいが語る日本女性の生き方モデル |
| 田 漢春 | 中華人民 共和国 | 韓国ブームが中国朝鮮族社会に与える影響 |
| 坂野 明美 | 日本 | 視覚障害者のためのメディア — 誰もが楽しめるメディアとは? * |
| 包 雲飛 | 中華人民 共和国 | 泣いても一日、笑っても一日 — 草深お父さんの夏の記録 * |
| 三輪 弥生 | 日本 | 最女性化的城市: 杭州 — 最女性化的城市: 杭州 — 以休閒産業為中心 |
| 李 穎麗 | 中華人民 共和国 | 現代中国語における副詞“就”のモダリティ機能 |
| 李 天一 | 中華人民 共和国 | xGM 型広報の特徴と可能性に関する考察 — メディアプランニングからコミュニケーションデザインへ |

* は制作コンテンツ



日本言語文化専攻

山本 幸一

メトニミーの認知言語学的研究—非自立型メトニミーを中心にして

本論は、人間が現実世界をどのように知覚・認知しているかという捉え方(construal)を基盤にして言語が成立していると捉える認知言語学(Cognitive Linguistics)の言語観に基づいた「メトニミー(metonymy)」の研究である。認知言語学では、言語は認知能力の発現であり、語彙も文法も「形式と意味との組み合わせ(form-meaning pairings)」であるとする「記号体系としての文法(the symbolic view of grammar)」という立場を取っている。この立場では、言語は人間が世界を概念化する仕方を反映しており、言語の意味は認知主体の概念化(conceptualization)であり、言語は意味的に動機づけられ(motivated)、大方において説明可能(accountable)であるとみなされている。この立場では、メタファー、メトニミー等の比喩は大変重要な分析対象である。

本論の議論は大きく2つから成っている。第1に、メトニミーが異なった振る舞いをする2つのタイプに下位区分されることを明らかにし、その一方のタイプを「自立型メトニミー(Independent Metonymy)」と名づけ、「関連性(relatedness)」という特徴をもつこと、他方のタイプを「非自立型メトニミー(Dependent Metonymy)」と名づけ、「意味の2層構造(Dual Construction of Meaning)」という特徴をもつことを明らかにした。また、両メトニミーの成立を過不足なく説明する成立条件を明らかにした。第2に、先行研究がいろいろな方法で説明を試みてきた「形式と意味の不一致」を示す5つの構文である、「ウナギ文」、「主要部内在型関係節構文」、「介在性表現」、「転移修飾現象」、「Tough構文」について、それらが「非自立型メトニミー」であることを明らかにし、それらについて統一的な説明が可能になることを明らかにした。以上が、本論の議論の概略である。各章の概要は以下の通りである。

第1章では、比喩についての認識の変遷を見た。Lakoff & Johnson (1980)の *Metaphors We Live By* の出現以来、メタファー、メトニミーをはじめとする比喩の研究が、言語のみならず人間の概念のありさまを探る重要な研究対象となったこと、また、「類似性(similarity)」、「隣接性(contiguity)」による意味拡張であるメタファー、メトニミーが言語活動や認知のありさまに大きな影響を与えていることを見た。そして、メトニミーとメタファーの特徴、文学作品と日常の言語表現におけるメトニミーの具体例を眺め、本論の構成について概観した。

第2章では、人間が外界をどのように知覚・認知しているかという捉え方を基盤にして言語が構成されていると主張する認知言語学、特にLangackerによる認知文法(Cognitive Grammar)に基づいて本論の分析がなされていることから、認知言語学の言語観及び基本的概念について見た。言語観と意味観については、認知言語学を生成文法と対比して、その特徴を浮き彫りにした。基本的概念については、「認知(cognition)」、「一般認知能力(general cognitive ability)」をはじめとして、本論で扱う概念を9項目にわたって説明した。

第3章では、メトニミーの先行研究について、メタファーと対比しながら、4つの分類に従って見た。佐藤(1992[1978])等の分析では、メトニミーを「隣接性による意味拡張」、Lakoff (1987)等では、「同一概念領域内での意味拡張」、Langacker (2000)では、「参照点構造」、西村(2002)等では、「焦点移動」と捉えていることを見た。これらの先行研究において、メトニミーは言葉の問題から概念や思考の問題へ、そして構文・文法の問題にまで広範に浸透している現象とみなされていることを見た。

第4章では、第5章でメトニミーを2つに区分することになる一方のタイプである(1)のような「自立型メトニミー」について詳細な分析をした。

(1) 赤ずきん(赤ずきんを着用した女の子)がやって来た。先行研究では、メトニミーの成立条件としての確な定義が提案されていないことを指摘した後、メトニミーの定義として「関連性」による定義を提案し、メトニミーを過不足なく説明する確な成立条件を明確に示した。「関連性」とは、ソースとターゲットが、「特徴」と「主体」という関係として捉えられることである。(1)については、「着用物」である「赤ずきん」という特徴で、それを着用している女の子を捉えている。この場合、他の人間から女の子を識別していると言うことができる。メトニミー成立の条件は、「ターゲットである対象を、同種の他の対象から識別できること」であり、それには、ソースがターゲットに対して識別可能な特徴(識別特徴)である必要がある。「識別特徴」であるためには、第1に、他と識別できる詳しい特徴が必要である。第2に、そのような識別を可能にするために、例えば(1)では、「村の人々」というように、対象を識別するための母体となる制限された集合が必要となる。この制限された集合を「識別母体」と名づけた。

(2)は「土地→機関」のメトニミーとして成立するが、ソースとターゲットを逆にして「機関→土地」とした(3)のメトニミーは成立しない。また、(4)は「土地→機関」のメトニミーを意図しても成立は難しい。

(2) ワシントン(米国政府)とモスクワ(ロシア政府)の交渉

(3) *私が訪れたいのは米国政府(ワシントン)だ。

(4) *訪米中の文部大臣は、1日目はメトロポリタン美術館を訪れ、

2日目にはワシントン(米国政府)を訪れる予定である。

「隣接性」に基づく分析では、メトニミーのソースとターゲットを逆にした(3)のメトニミーがなぜ成立しないのか説明ができない。また、「参照点構造」に基づく分析では、(3)は説明できても、「土地→機関」のメトニミーとして(4)が成立しないことが説明できない。しかしながら、本論の「関連性」の定義によれば、(3)は「識別特徴」、(4)は「識別母体」の条件が満たされないために成立しないと説明ができる。先行研究における「隣接性」という概念については曖昧な点が見られるため、第4章では、更に、「空間的隣接性」と「概念的隣接性」の関係を整理して明確にした。

博士学位取得者論文要旨 (2007年度)

第5章では、メトニーの振る舞いを検討し、メトニーが一枚岩ではなく、大きく2つのタイプに分かれることを明らかにした。

(5) 長髪がやって来る。

*それ(長髪)は長いね。

彼(青年)は背が高いね。

(6) 風車が回っている。

それ(風車)は、オランダ製だ。

*それ(羽根)は、4枚ある。

2つのタイプの振る舞いの違いの1つに、代名詞の照応がある。(5)のタイプはターゲット(拡張した意味)と照応し、(6)のタイプはソース(字義の意味)と照応している。(5)のようなタイプを「自立型メトニー」、(6)のようなタイプを「非自立型メトニー」と名づけた。

一方のタイプである「自立型メトニー」については、第4章で詳細に分析したが、もう一方のタイプである「非自立型メトニー」については、「ある概念と、他の概念を結びつける時に、そのある概念と直接関係する対象として、別の概念にアクセスする」認知能力であることを明らかにした。(6)については、「風車」と「回る」が結びつき、「風車全体としての稼働」という意味が生じるが、それとは別に、「回る」は、直接関係する対象として、「羽根」にアクセスしている。これが「非自立型メトニー」のメカニズムであり、この2層の意味を、「意味の2層構造」と呼んだ。1層目の意味は、「言語表現の伝達内容」である。そして2層目の意味は、「推論により1層目の意味を補完する意味内容」であり、「述語が直接関わる対象」が、言語表現の置かれた文脈から推論されるというメカニズムに基づいている。

第6章では、この「非自立型メトニー」について、詳細に議論した。「非自立型メトニー」には「全体→部分」の型が多く見られるが、(7)のような「容器→内容物」、(8)のような「主体→道具」等いくつかの型が見られる。

(7) やかんが沸いている。

(8) I am parked out back.

本論では、これら種々の型の中心に共通する特徴が存在することを「対象の拡張」という概念を導入することによって明らかにした。「対象の拡張」とは、「ある対象」が、「別の対象」を「部分」として包含し、一体化して「全体」として捉えられることを指す。「対象の拡張」によって、「非自立型メトニー」のすべてを、「全体→部分」の型として統一的に説明することが可能になった。「対象の拡張」の要因としては、2種類がある。1つは、「ある対象が別の対象に対して従属の状態にあり、両者が一組になって1つの機能を果たす」場合に捉えられる「総体としての認識」である。もう1つは、生態心理学が主張する「エコロジカル・セルフによる自己知覚」の関係する「生身の身体を超えて空間的に広がり得ると捉える認識」である。この2つが「対象の拡張」の要因であることを議論した。「対象の拡張」によって、様々な型が、「全体→部分」の型として、統一的に「非自立型メトニー」として分析されることを明らかにした。(7)では、「やかん」と「湯」が「総体として認識」されている。(8)では、「私」が「自動車」を道具のように取り込んで一体化している。

自立型メトニーと非自立型メトニーの定義を以下に対比してみよう。

A. 自立型メトニー(Independent Metonymy):

外界の2つの事物間、あるいは2つの概念間に「関連性」が捉えられる場合、一方の事物・概念を通して、他方の事物・概念を捉える認知能力を「自立型メトニー」と呼ぶ。

B. 非自立型メトニー(Dependent Metonymy):

外界の「ある対象A」とその「状態や動きB」を結びつける時、あるいは、「ある概念A」と、「他の概念B」を結びつける時に、その「状態や動きB」あるいは、その「概念B」と直接関係する「他の対象C」、ある

いは、「他の概念C」にアクセスする認知能力を「非自立型メトニー」と呼ぶ。自立型メトニーと、非自立型メトニーの意味構造を以下に対比してみよう。

A. 自立型メトニー:

例:長髪がやって来る。

指示対象

ソース → ターゲット

(長髪(地)) → (青年(図))

B. 非自立型メトニー:

例:風車が回っている。

1層目:指示対象

(風車(図)) / (羽根(地))

2層目:述語と直接関わる対象

ソース → ターゲット

(風車(地)) → (羽根(図))

非自立型メトニーの「意味の2層構造」は次のようにまとめることができる。

1層目の意味: 言語表現の伝達内容は、「(拡張された)全体」としての「対象」についての叙述である。

2層目の意味: 述語が直接関係するのは対象の「部分」である。

この「意味の2層構造」によって「非自立型メトニー」の成立条件も明らかになった。(9)(10)の成立の可否についての説明については、以下のように提案した。

(9) I am in the Whitney.

(10) I am in the second crate on the right.

「非自立型メトニー」として(9)が成立し、(10)が成立しない理由は、1層目の叙述が有意義なものであるかどうかという点から説明できる。2層目の意味については、(9)(10)のいずれも、述語がアクセスするのは、主語である人物の「作品」であると推論される。しかし、1層目については、(9)では、「美術館への作品の展示という名誉」という「主体」として有意義な叙述であるが、(10)では、「作品の木箱への保管」という「主体」として有意義な叙述ではないことが「非自立型メトニー」成立の可否の違いの原因である。「非自立型メトニー」が成立するには、1層目の意味が有意義であるという動機づけが必要であるが、(9)には動機づけがあっても、(10)にはない。

第7章から第11章では、6章で明らかにした「非自立型メトニー」によって、「形式と意味の不一致」という性質をもつ5つの構文についての説明を個別に検討した。

第7章では、「ウナギ文」として従来知られる(11)のような「名詞述語文」について分析した。

(11) ぼくはうなぎだ。

一見非論理的なこの構文については多くの先行研究があるが、基底文からの変形、省略としての分析については、変形や省略の結果生成されるウナギ文と基底文という意味の異なった2つの構文を結びつけることが問題であることを指摘した。本論では、変形、省略という分析を取らず、「非自立型メトニー」の「意味の2層構造」によってウナギ文の性質を明らかにした。先行研究では明らかにされていない言語現象に、「対比が想定される文脈で容認され易いこと」がある。(12)が示しているように、ウナギ文は対比が想定されない文脈では成立が難しい。

(12) ウェイター :ご注文はどういたしますか?

客 :私はうなぎを頂きます。/*私はうなぎです。

本論での「非自立型メトニー」の分析では、「意味の2層構造」のうち、ウナギ文の1層目の意味について、伝達内容が「対応関係」の叙述であると説明できるため、複数の対応が想定される文脈で容認され易い言語事実に自然な説明が可能である。

博士学位取得者論文要旨 (2007年度)

第8章では、(13)のような「主要部内在型関係節構文」について分析をした。

(13) [りんごがテーブルの上にあった]のを取って食べた。

形式上は、主節述語は関係節事態全体を項として取っているが、意味上は、関係節事態の一部を項として解釈している。この「主要部内在型関係節構文」の「2重性」をどのように説明するのか、という点が解決すべき問題である。また、関係節事態は、主節事態と関わりがあるが、このような意味的制約の根拠はどのように説明されるのか、という点も問題点である。これらの問題点に対して、本論の主張を次のように行った。「2重性」については、「主要部内在型関係節構文」は、「意味の2層構造」を持つ「非自立型メトニミー」であることによって説明が可能である。「関係節事態」と「主節事態」との関わりが生起することについては、「主要部内在型関係節構文」が「非自立型メトニミー」であれば、「意味の2層構造」の1層目の意味によって自然な説明が可能である。また、次の2点についても明らかにした。「主要部内在型関係節構文」の「関係節」と同じ形式を持つ「動詞補文」を含む文との違いは、焦点化する部分の違いであり、相対的なものである。「主要部を欠く主要部内在型関係節構文」は、「関係節」自体が「非自立型メトニミー」となっており、このターゲットが主節の「非自立型メトニミー」に継承されたものであると主張した。

第9章では、(14)のような「介在性表現」について分析した。

(14) 秀吉は大坂城を建てた。

「行為者(被使役者)」とその「行為」が脱焦点化され、主語が表す「使役者」と「事態」が焦点化されるという相関的な構造とこの表現の成立条件を明確にした。「エコロジカル・セルフとしての自己知覚」を要因とする「対象の拡張」によって、「支配者」が「被支配者」を、心理的に、まるで道具と捉えて、内部に取り込んで「対象の拡張」をするのが、「非自立型メトニミー」としての介在性表現であると分析した。先行研究では説明ができていない言語事実、主語に動物や無生物がくることがあるが、この説明として、「起因力」によって「事態」が引き起こされるという意味構造を明確にした。意志的に支配力を行使できない主体であっても、原因となって事態を引き起こす力を持つと捉えることは可能であり、これが「起因力」である。「介在性表現」の成立条件は次の2つであると主張した。

- 「使役・被使役のスキーマ」の該当する叙述対象が社会的に慣習化している程度が高い場合
- 「事態」の捉え方ができる場合(「被使役者」と「行為」が脱焦点化できる場合)

第10章では、(15)のような「転移修飾現象」について分析を行った。

(15) He lay all night on his sleepless pillow.

(15)の文は、言葉の表面を見る限りでは、“sleepless”が“pillow”を修飾する形を取っている。しかし、“sleepless”が“pillow”を説明しているとは通常解釈することはない。“sleepless”が説明しているのは、“pillow”に頭を乗せて、横たわっている“he”である、とするのが自然な解釈である。本論では従来転移修飾語と呼ばれてきた言語表現に限らず、修飾要素と被修飾要素が、形式と意味のずれ違いを引き起こしている言語現象を広く考察対象として、なぜそのような形式と意味のずれ違いが生起するのかについて、認知言語学的視点からその認知メカニズムを探った。そして、転移修飾現象を意味の2層構造をもった非自立型メトニミーであると捉えた。言語表現の伝達内容である「関与対象」についての修飾要素による説明と「修飾要素が直接関係するのは対象の「関連概念」としての「関与者」である」という「意味の2層構造」を明らかにした。また、「修飾要素」と「関与対象」の関係を分析し、両者の関係に少なくとも4タイプがあり、「原因型」、「表出型」、「投影型」、「容器型」と名づけ、その意味構造を明らかにした。

第11章では、(16)のような英語の「Tough 構文」について分析した。

(16) John is easy to please.

Langacker(1995)が提案している「参照点構造」、「アクティブゾーン・プロフィールの不一致」としての分析について2つの問題点を指摘し、その代替案として「非自立型メトニミー」による分析を行った。「主語の名詞句が、不定詞の目的語としての意味も兼ねているという2重性」、そして、「行為について叙述する意味を持っている形容詞が、モノである名詞句を主語として取る意味の不整合」という2つの問題点について、以下のように自然な説明が可能になった。「言語表現の伝達内容は、「(拡張された)全体」としての「行為対象」についての叙述である」という1層目の意味から、「対象」が叙述されるべき「文の主語」となる。また、「行為対象」と捉えられることから、「不定詞の目的語」を兼ねることになる。このように、2重性が説明できる。また、「述語形容詞が直接関係するのは対象の「部分」(関連概念)としての「行為」である」という2層目の意味から、意味の不整合は生じないと説明できる。

以上のように、本論では、メトニミーが異なったメカニズムに基づく2つのタイプである「自立型メトニミー」と「非自立型メトニミー」に下位区分されることを明らかにし、その後、両メトニミーについて詳細な分析を行った。そして、一方のタイプである「非自立型メトニミー」によれば、「形式と意味の不一致」をもつ5つの構文について自然な説明が可能になることを明らかにした。

趙青

『新古今和歌集』と唐詩の比較修辭研究

◆目的と視点

『新古今和歌集』を中心とする和歌の修辭技法や表現形式を、そこに見られる中国詩の影響とその日本的展開をたどり分析することによって、八代集の到達点としての『新古今集』歌の本質を探ると同時に、平安朝から中世初期の人々の美意識や外国文化受容の姿勢を明らかにする。これと同時に、和歌修辭という視点から漢詩を考察することによって、中国的な思考様式から生まれた独自の修辭や美意識及びその特徴

を分析する。このような修辭面での比較を通して、日中の古典的文学表現の共通性・差異性を明らかにすることを旨とする。

◆構成

全体の構成はより一般的かつ広範な修辭現象から説き起こし、より個別の細部現象へと分析を進めることとした。この意図にしたがって全体の構成は以下の六章となる。

博士学位取得者論文要旨 (2007年度)

①共感覚表現

レトリックとして「共感覚」(ある領域の感覚を表す語を用いて他の領域の感覚を示唆する技法)的な表現を用いる和歌を研究対象とする。初期の共感覚的表現には漢詩の受容がよく見られる。新古今時代になると、共感覚的表現の歌が増え、また特種な新しい表現が出てくる。そのなかの「梅が香」を詠み込んだ歌を、視覚と嗅覚の交錯する「にほふ」「かをる」との関連で、漢詩と比較しながら考察した。結果として、「梅が香」についての共感覚的表現歌は、漢詩から触発されつつ、日本で独自の展開を遂げている。また、「梅が香」を恋と結びつけるモチーフの生成にも注目し、その一つの到達点と見られる梅の香りを詠んだ定家の歌について、新しい解釈を試みた。

②内的視覚の修辭的操作

風景の切り取り・焦点の移動・平面化・ぼかし・残像効果など、和歌表現に用いられる五つの技巧について考察した。視覚的効果を上げるためのこのような工夫は、平安歌人の高度に修辭的な技法として時代を経てますます洗練され、新古今に至っている。また、視覚的操作による表現について和歌と漢詩を比較すると、共通する部分もあるが、明らかな相違点も見られる。それは日本と中国の生活様式・世界観・審美観などの相違と関係している。新古今時代の歌人は漢文化を確かに受容しながら、それを更に日本人的世界観、あるいは和歌の源流である万葉的世界と照合させて、独特の世界を築き上げたといえることができる。

③本歌取りと唐詩の「点化」

和歌の本歌取りと唐詩の「擬樂府」「点化」「集句」との異同について検討し、歌論・詩論から日本と中国の「引用」に対する考え方や評価の差異を考察した。「著作権」は和歌の世界でも唐詩の世界でも意識されているにもかかわらず、その本歌あるいは原詩を取る方法はまったく逆である。その原因としては、1詩型、2目的、3本歌・原詩に対する態度、の三点が考えられる。

また、自然の景色など世界すべてに人事的な要素が付与される伝統を持つ中国では、後にその人事的要素を意図的に取り除く努力が払われ、客観的な世界把握に傾いた。これに対して自然が自然として捉えられる日本では、その自然の景色の深みを増すために「本歌取り」を用いる傾向が見られる。

④掛詞と双関

先行研究の和歌「掛詞」の分類法を踏まえ、それを漢詩の修辭法と比較するために、歌例と詩例の「二つの想」(Aとaの二概念)にそって文脈や前後関係に応じた図式化を行った。その結果、和歌の場合、文の前後関係は並行にならず、Aとaの二概念が掛詞によって交錯して旋律美をもたらしていること、これに対し、漢詩では「二つの想」が並存し、A概念とa概念が各々自律して整えられ、和声美を構成していることを明らかにした。本章ではまた、中国の対句的発想が反映される修辭法を詩例によって説明し、掛詞を用いた和歌とこれに近似する修辭をもつ漢詩の言語遊戯的な作品を紹介した。

⑤歌枕「塩釜の浦」の新古今的展開

「古今集」の時代には舟・煙・海人などが連想され、さびしさや荒涼たる雰囲気をもっていた歌枕「塩釜の浦」は、「新古今」になると、月や霞などと結びつけて詠まれるようになり、古来の抽象的に固定した連想から叙景的な描写へ重心が移動した。「塩釜の浦」の景勝を園池に模して造られた平安京の河原院を手がかりにして、「塩釜の浦」をめぐる煙・月・霞の表現の推移・展開をそれぞれ時間軸に沿って考察した。河原院と源融の風流、安法サークル、漢詩・漢語の影響など、種々の要因から、歌枕「塩釜の浦」はその地名にまつわる古いイメージを留めながら、次第に付加された幾つものイメージを重層的に合わせもつ、新古今的な「塩釜の浦」に変身するのである。

⑥「政治的寓意」とその周辺

「寓意」とりわけ「政治的寓意」をめぐる、漢詩と和歌の修辭を比較・考察した。漢詩と比べて、和歌では「埋れ木」的な寓意表現が主流を占めており、政治批判あるいは社会的現実を反映した詠作が少ない。王朝が頻繁に交替し、儒学的政治イデオロギーの伝統が強い中国では、科挙制度によって様々な階層の人間が政治に参加することが可能であった。したがって、詩人たちもまた自ら参政願望をもつ人々であり、詩文も多分に政治的だった。これに対し、一系の天皇を頂点として藤原氏の摂関政治が続いた日本では、歌人たちの多くが政治的な場から疎外された人々(皇位継承権を持たない公家や政治的権力を持たない貴族層)であった。このような歌人と詩人の社会的位置が、和歌と漢詩における「政治的寓意」の質と内容の相異をもたらした原因だと考えられる。中国においては恋愛詩に託して政治的意図が語られるが、日本においては恋が恋の感情そのものとして歌われ、歌集に「恋」の部が不可欠であることも、この文脈において考える必要があることを示した。

◆結論

儒学的政治イデオロギーの伝統が強い中国の漢詩は政治的文学である。また秩序を重視する分析的な世界観を背景として理性的・合理的な作品が多く詠まれる。二元的対句的な発想法は詩行に並行的な文脈構造をもたらし、端正で荘厳な姿をとる。唐代における漢詩のこれらの特徴が修辭技法にも如実に反映されていることは、日本の和歌修辭との比較を通して、より一層明らかになった。

一方、王朝貴族の歌人たちは、漢詩の花鳥諷詠の技巧やトピックを修辭的着想として受け入れながら、自然と情念を重んじる文学伝統とやまと言葉に特徴的な想の流れを生かし、独特に審美的な和歌の世界を造り上げた。中国文化から大きな影響を受けたにもかかわらず、言語構造や世界観の差異が生んだ修辭技法の日本の展開は、新古今時代の歌人において洗練の極致に達し、連続しかつ交錯する、情緒的で優艶な姿の作品を数多く生み出したのである。

博士学位取得者論文要旨 (2007年度)

松岡 みゆき

現代日本語の終助詞「よ」「ね」「よね」一意味論と語用論の接点を求めて

本研究は、現代日本語の終助詞「よ」と「ね」、それらが形態的に複合した「よね」を考察対象とし、各形式が持つ抽象的な機能と、そこから具体的な語用論的機能が生じるメカニズムを明らかにしたものである。また、「よね」については、機能的にも「よ」と「ね」の複合かどうかという構成性の問題について考えた。

第1章では、「よ」も「ね」も、文末用法(終助詞としての用法)以外に、語頭・語中に現れる間投用法があることを確認し、そのうえで本研究の考察対象を終助詞に限定することを述べた。終助詞として使用される場合と、間投助詞として使用される場合の機能が、単純に同一のものとは考えにくい。終助詞としての使用例だけを見ても、その分布の仕方、機能は簡単に結論付けられるものではないためである。

第2章では、終助詞「よ」と「ね」に関して、これまでの研究で明らかにされたことを整理し、残された問題点を指摘した。これまでの研究については、「よ」または「ね」を、1)具体的な(複数の)用法と直接結び付けるもの、2)情報の帰属先、または情報の多寡を示す形式として考えるもの、3)知識管理・情報処理の仕方という観点で記述するもの、4)コミュニケーションを円滑にするための対人的態度であるとするもの等がある。いずれの研究も「よ」または「ね」の側面を捉えたものであり、その意味記述では説明できない用例が存在する。そこで本研究は「よ」「ね」を包括的に説明できる、より抽象的な意味記述を試みた。そして、その抽象的な機能から、先行研究で提案された意味・機能が生じるメカニズムについて考えた。

第3章では、「よ」「ね」がどのような情報をマークしているのかを、情報帰属理論(話し手帰属情報か聞き手帰属情報か)を土台にし、そこから外れる分布を検討するという方法で考察した。その結果、「ね」は話し手が聞き手と「話題」を共有している場合(言い換えれば、聞き手にもアクセス可能な「話題」が設定されている場合)に使用可能となることがわかった。つまり「話題」の共有が「ね」の前提条件となっているのである。そして結果的に、この「ね」の前提条件は、次の第4章の考察によって導いた「ね」の抽象的機能とも矛盾しないことがわかった。情報帰属理論をはじめとして、これまでの研究の中には、「よ」「ね」がマークする情報の共有性に注目したものがあつたが、本研究は、「ね」が使用可能な場合に、話し手と聞き手が共有しているのは、「ね」がマークする情報自体ではなく、その情報の言及先となる「話題」であることを示した。話し手と聞き手が共有している「話題」として考えられるのは、1)発話現場の発話時の外界情報、2)1)の一部として位置づけられる「聞き手」の存在、3)先行発話によって導入された情報の3つである。これらのいずれかが「話題」として設定され、その「話題」に言及する場合に「ね」の使用が可能となるのである。

第4章では、「話題」の共有という前提条件をクリアした「ね」が、どのような機能を果たすために使用されるのかを、「ね」の分布(義務化される場合、任意に使用される場合、使用できない場合)を検討することによって明らかにした。その結果、「ね」は、発話現場(談話場)で「話題」に対して言及する(「話題」に情報を導入する、情報を更新する)操作を示すマーカーであることがわかった。その操作が、談話場でおこなわれているため、そこにいる聞き手も当該の「話題」にアクセス(介入)できる。本研究は、この「ね」の抽象的機能を次のように記述した。

「ね」の抽象的機能

「ね」は当該の情報を「開いた情報」(「現場性を持つ情報」、「liveknowledge」として示す形式である。「開いた情報」とは、談話場内で「話題」としてとりあげられた情報に、新たに追加する情報であることを意味する。

そして、この「ね」の抽象的機能から次の3つの語用論的機能が生じることがわかった。

「ね」の語用論的機能

- 1)ダイクシスの機能
- 2)思考過程表示機能
- 3)聞き手の介入促進機能

「ダイクシス機能」とは、談話場に存在する言及対象(話題)を指し示す機能である。外界情報を指し示す現場指示的な場合と、先行発話を指し示す文脈指示的な場合が含まれる。「思考過程表示機能」は当該情報を「思索しながら」または「当該情報の内容を想起しながら」発話しているという解釈を与える機能である。この2つの語用論的機能が談話場で生じているため、その場にいる聞き手の介入を促す「聞き手の介入促進機能」が生じる。聞き手の注意喚起機能を持つ上昇調を用いると「聞き手の介入促進機能」が顕在化する。

疑問文では、「ね」はその語用論的機能(思考過程表示機能、聞き手の介入促進機能)を付与するために用いられる。働きかけ系の文の場合は「聞き手の介入促進機能」を付与することが「ね」を使用する動機付けとなる。これは働きかけ系の文に「ね」が付いた場合、上昇調が付随する傾向があることからも裏付けられる。

第5章では「よ」について考察した。その結果「よ」は「ね」とは対照的に次のような機能を持つことが分かった。

「よ」の抽象的機能

「よ」は情報を話し手の中で確定し、知識化した情報として示す形式である。これを「現場性を持たない情報(non-live knowledge)」、または「閉じた情報」と表現する。

「よ」は付随するイントネーションが上昇調か断定調(下降調)かによって、大きくその働きが異なる。上昇調の場合は、当該情報が不確定なものであると解釈されるのを阻止するために、「よ」を義務化して情報を「閉じる」。上昇調が付随する場合、次のような語用論的機能が生じるが、これは上昇調によるものであり、このとき「よ」が担っているのは当該情報を確定したもとして示す働きである。

「よ」が上昇調を伴う場合の語用論的機能

- 1)聞き手の注意を喚起しながら情報を提供する(報告機能)
- 2)当該情報を入手した上で適切な認識・行動をとるよう聞き手に指示する(指示機能)

一方、下降調の場合は、「よ」で情報を「閉じる」ことにより、次の2つの語用論的機能が生じる。

「よ」が下降調を伴う場合の語用論的機能

- 1)情報を発話する際の話し手の感情を顕在化させる(感情表出機能)
- 2)当該情報を、話し手が判断・判定したもとして示し、「事実」としての解釈を背景化する(判定機能)

また、疑問文において「よ」は下降調を義務化し、当該の疑問文を「詰問・反語」として提示する。働きかけ系の文で、下降調を伴う「よ」が用いられると、当該の働きかけがなされるべき状況にあることが示唆される。上昇調を伴う場合は、聞き手の注意喚起機能が付与され、「よ」は「閉じる」働きのみを果たすことになる。

博士学位取得者論文要旨 (2007年度)

第6章では、「よ」と「ね」を形態的に構成要素として持つ複合終助詞「よね」について考察した。「よね」については、これまで、機能的にも「よ」に「ね」を足したものと見る見方と、「よね」を個別の形式とする見方があったが、「よね」の構成性については、どのように考えるのが妥当であるのか、明確な答えは出されていなかった。そこで本研究では、「よ」の機能、「ね」の機能との共通点と相違点を明らかにし、「よね」の機能とその構成性に対して、次のように考えるのが妥当であると結論付けた。

「よね」=「よ」の抽象的機能+「ね」の語用論的機能

つまり、「閉じた」情報を、話し手の思考過程を示しながら聞き手に伝え、それにより聞き手の介入を促すのが「よね」の機能である。このように「よね」を捉えることにより、「よね」の間にポーズがあるかどうかで生

じる発話の容認度の違いや、「*ねよ」という承接関係が認められないことについて説明が可能となることを示した。以上のように、本研究は、発話の現場(談話場)を時系列的な領域であると捉えることによって、「よ」と「ね」の抽象的機能として妥当な記述が可能になり、各終助詞の包括的説明が可能になることを主張するものである。また、それを記述するのに、本研究では談話場を時系列的談話領域として概念化した Langacker(2000,2001)の Current DiscourseSpace (CDS)モデルを用いた。そして、「よ」「ね」の各抽象的機能が、ある条件下で具体的な解釈(語用論的機能)として実現するシステムを示した。このように本研究では「よ」「ね」「よね」の基本的な使用実態を包括的に捉えられる記述がおこなえたのではないかと思う。

加藤 利枝

柳宗悦における「朝鮮」の位相—日本近代美術史の「周縁」をめぐる

本論文の目的は、民芸運動の創始者、柳宗悦(1889~1961)と朝鮮の関係について、日本近代美術史の領域を背景に考察を行い、柳と朝鮮の関わりが、日本近代の美術の歴史の中でどのような意味を有し、さらに、「民芸」という新概念の誕生といかなる関連性を持っているのかを究明することにある。考察の手法としては、日本近代美術史において、中心的な位置でなく周縁的な立場に置かれてきた「工芸」「建築」の分野に注目し、「工芸」の分野に関わった柳と、建築史学者の伊東忠太及び関野貞ただしの朝鮮での活動を比較・対照することにより、柳における朝鮮の位相を明らかにするという方法をとった。柳と朝鮮の関係については、先行研究の中に、柳の朝鮮をめぐる体験が「民芸」の概念を生み出す契機となったとの指摘もあるが、それが朝鮮という特定の場所で起こったのは一体なぜか。柳が特に朝鮮芸術に惹かれたことや、朝鮮をめぐる政治問題が動機であるという説明は、一定の説得力を持つが、これら以外に、当時柳を取り巻いていた時代思潮の面にも、その契機があったのではないか。このような考えから、柳が朝鮮へと向かった要因を探ってみた結果、「美術」と「工芸」「建築」の概念が、その要因を説明し得る重要な鍵を握っている可能性が浮上したが、このような視点で柳と朝鮮との関係を論じた研究は、管見の限りではまだなされていない。そこで、本論文ではこの視点に立って考察を行った。

第1章(日本近代美術史と柳宗悦)では、柳の『白樺』時代から朝鮮での活動を開始す

るまでの時期について、日本近代美術史を背景に考察を行った。西洋由来の「美術」の概念は明治初期に日本へ移植されたが、「美術」をめぐる政策は、国民国家・大日本帝国の発達局面に合わせて変化した。明治前半期には、「美術」は「殖産興業」に資する役割を与えられたが、明治二十年代始めに、「美術」の役割は、国民国家の精神的基盤作りへと変化した、国粋主義的な風潮が起こる。この時代には、「美術」は「国家」の為のものとの観念が支配的であった。こうして、明治末期までには、上記のような精神的基盤作りは一先ず完遂され、「美術」はかつてのように「国家」と不可分の存在ではなくなる。『白樺』の創刊(明治四十三)は丁度この時期にあたり、柳ら白樺派は、「美術」と国家の政策が一定の距離を置き始めた時代に活動を開始したといえる。つまり、彼らは「美術」を「個人」との関わりにおいて捉え

ることのできた世代であった。次に、1900年のパリ万国博覧会を機に初の日本美術史が編纂された経緯と、それが国家による文化財の調査・保護の成果の一つとして成立したことを述べ、その過程の中で白樺派はどのような位置にあったかという問題を扱った。まず、明治初期の文化財政策は、神仏分離令(慶応四)に起因する文化財の海外流出に対する反省に立っており、文化財の保護と活用すべきものである博物館が文部省管轄下に設置されたが、その後、「殖産興業」の時代に、博物館の管轄は内務省→農商務省に移され、明治二十年代始めには宮内省に移管される。これと同時期に、臨時全国宝物取調局(1888)が発足し、全国の社寺の宝物調査を実施、この結果を基に古社寺保存法(1897)が成立、社寺の建造物と宝物が格付けされ登録される制度が誕生した。ところが、帝国博物館の帝室博物館への改称(1900)を機に、文化財が皇室の財産として秘匿すべきものとされ、皇国史観を柱とした国家の基盤を支える役割を担われるようになる。この流れの中で青年期を迎えた『白樺』同人たちは、上述のような天皇中心のナショナリズム生成・定着の過程を直接目撃することになった。さらに、日本美術史成立後の明治三十年代後半の美術界の動きについてであるが、日露戦後、日本の海外進出の活発化に伴い、大陸への注目度が高まりを見せる。こうした動きは美術界にも影響を及ぼすが、同様の現象は白樺派にも見られ、このことは1919(大正八)年の『白樺』初の東洋美術の挿絵掲載にも影響したと考えられる。ちょうどこの年、柳は朝鮮の三・一独立運動に衝撃を受け、「朝鮮人を想ふ」を発表、これが以後の朝鮮での活動の端緒となった。ここまでの考察から、柳が朝鮮へと向かった要因としてまず、上記の東洋美術への関心の高まりと、三・一独立運動の衝撃が挙げられる。

第2章(「工芸」と「建築」)では、明治末から大正期にかけて、日本近代の「美術」の領域内で地位を下落させていた「工芸」界と、「美術」の領域の後発的分野とされていた「建築」界の状況を概観した。「美術」の概念が移植された当初、「美術」と「工芸」の区別は曖昧であったが、明治半ばに「美術」の領域内で「絵画」「彫刻」がその中心の位置に就くと、相対的に「工芸」の地位が低下した。さらに、軽・重工業の大量生産体制の確立によって、それまで「工芸」との差異がなかった「工業」が現在の意味を獲得して「工芸」から分離し、「工芸」の地位は一層下がることになった。こうした状況の中で「工芸」界の関係

博士学位取得者論文要旨 (2007 年度)

者が示した動きを概観した結果としては、明治末より大正期にかけて、「工芸」界全体では事態を改善するための動きは少なかったが、大正中期～末期には、それ以前にはなかった「生活」という視点から「工芸」を見るという動きが生まれ、新しい工芸運動や理論が起こった。柳らの民芸運動の萌芽もこの時期に始まる。次に、日本建築史学の創始者、伊東忠太が、「建築」の分野を「美術」の中心に近づけることを企て、それによってナショナリズムの中核へと接近しようとする様相について考察を加えた。そして、この伊東の動きの延長線上に起こった、議院建築建設に際しての新しい国民的建築様式創出の模索が、結果的に成就することなく終わった経緯について考察を試みた。

第3章(朝鮮総督府の古蹟調査事業と博物館・美術館政策)では、朝鮮総督府が行った朝鮮半島の古蹟調査と博物館・美術館政策を概観、その中心人物であった関野と、これらの政策に対し批判的であった柳の関係について考察した。まず、柳による石窟庵の紹介文、「石佛寺の彫刻に就て」の中に、上述の古蹟調査への批判がみられることを指摘した。続いて、1900年代始めから朝鮮総督府が実施した上述の古蹟調査事業の概要を述べた。この調査では古代の埋蔵物に重点が置かれたが、このことは後に総督府によって展開される博物館・美術館政策とも連動していた。続いて、柳と関野がいずれも大正期に朝鮮での活動を行うことになった所以について考察した。その結論として、二人の間違った「工芸」「建築」が、「美術」の領域の「周縁」に位置することが、同様に日本帝国主義の「周縁」的位置にあった朝鮮へと、二人を押し出したためであるとの見解を示した。さらに、柳と関野の朝鮮美術史観を比較してみると、当時、朝鮮美術は中国美術と日本美術の仲介者として見られる傾向があったが、柳と関野の朝鮮美術史観においても、そうした時代思潮の影響が見られる。ただ、柳には、独自の美術を生んだ朝鮮民族への共感、当時「衰退の時代」とされた李朝末期への高評価という視点があり、その意味で関野と一線を画していた。さらに、総督府の開設した上記の三つの博物館・美術館の概要について述べ、これらの設立が植民地統治にいかん資するものであったかを考察した。これらの博物館・美術館の敷地は、本来立ち入りを許されない王宮であったが、それが一般公開されることにより、王朝の象徴性が奪われてしまった。また、展示の基本方針は、古代を「隆盛の時代」、李朝末期を「衰退の時代」と印象づけるものであった。これに対し、柳らが設立した朝鮮民族美術館(1924年4月開館)は、こうした政策が展開された景福宮内に開設され、総督

府が創出した植民地の象徴空間に異議を呈する存在であったといえよう。

第4章(王朝の都・漢ハソンと植民都市・京城)では、風水という伝統的な思想に基づいて造成された李朝の都、漢城を、王宮の破壊、西洋式庁舎・朝鮮神宮の造営などを通して、植民地都市、京城へと改編していった総督府の政策を概観し、その上で、朝鮮神宮の造営に関わった伊東忠太と、王宮の門・光化門の破壊反対を唱えた柳の立場を比較・検討した。14世紀末に李王朝の首都となった漢城は、風水上的好条件を備えた「山河襟帯」の地であり、その場所の選定には、朝鮮半島で盛んであった風水の流派、「形法」が大きく影響したと考えられる。「形法」は主に地形によってその土地の気や勢いを判断するものであり、首都・漢城は「形法」の判断基準に則って造営された都市空間という性格を持っていた。以後、500年間受け継がれたこの伝統的価値観が、日本による植民地化によって否定されることとなる。前章でふれた博物館・美術館の設立によって王宮の空間は大きく改編され、正宮・景福宮にはルネサンス様式の総督府新庁舎(1926年竣工)が建設された。さらに同年、伊東忠太がその鎮座地選定に関わった朝鮮神宮が鎮座祭を迎える。これら二つの建造物は、漢城を植民都市・京城へと改編する象徴的存在といえよう。柳はこれらの完成に先駆けた1922年、「失はれんとする一朝鮮建築の爲に」を発表し、景福宮の正門・光化門の破壊に反対を表明する。この柳の反対表明は、上述の古蹟調査事業、博物館・美術館政策を含めた総督府の植民地政策を根本的に批判する意味を持っていたといえよう。

終章において、以上の考察の締めくくりとして、柳が「民芸」の概念を創出する際にイメージの源となった「民衆」像について考察した。その結果として、「朝鮮」という、日本帝国主義の「周縁」的位置に置かれた場所においてこそ、柳は「民衆的工芸」を生み出す「民衆」像を見出し得たのだとの結論に至った。

田口 香奈恵

在日ブラジル人児童の日本語受身・使役表現の理解と産出に関する実証的研究——日本人幼児・児童との比較を通して

外国人年少者の日本語教育カリキュラムを考えていく上で、日常会話などで比較的早く自然習得していく文法項目となかなか身につかない文法項目を見極めていくことは非常に重要だと思われる。これまでの外国人年少者の習得研究では、受身・使役表現に焦点を当てているものはほとんどない。受身・使役表現は、日本語を第一言語とする日本人の子ども達にとっても、習得が遅れるとされる文法項目である。そのため、滞日期間が短い子どもを対象としてきたことによって、受身・使役表現の習得を確認するまでに至らなかったのではないかとと思われる。また、これらの表現は回避行動が多く、観察しにくい文法項目であるため、外国人年少者の習得研究では受身・使役表現が

取り上げられなかったとも考えられる。しかし、小学校での学校生活や学習科目の教科書等を見ても受身・使役はしばしば用いられており、その理解・産出は重要であると考えられる。

そこで、本稿は外国人年少者が、友達や先生との会話、教科指導等を通して、どのように日本語の受身・使役表現を理解・産出していか明らかなにする。さらに、日本語を第一言語とする子ども達の発達段階と比較し、その習得の類似点、相違点を明らかにすることを目的とする。

第1章では、問題の所在、研究の意義、研究目的について述べた。まず、近年の在日外国人年少者増加によって生じた問題や課題に触

博士学位取得者論文要旨 (2007 年度)

れ、研究の意義を示した。そして、予備調査として、自然場面での発話収集調査と条件下での発話収集調査を行い、本稿の調査方法の立場を決定するまでの過程を述べた。さらに、外国人年少者の周りでのどのような受身表現や使役表現が学習され、使われているかを探るため、子ども向けの日本語指導テキスト、小学校で使用されている教科書学習用教科書、教師や日本人の発話についてまとめた。最後に本稿の目的、構成を述べた。

第2章では、日本語の受身・使役表現の習得に関する先行研究を概観した。日本語の受身・使役表現の文法的側面について概観した後、受身・使役表現の習得研究を調査対象者別に、日本語を第一言語とする子ども、日本語を第二言語とする子ども、そして成人日本語学習者に関してまとめた。日本語を第二言語とする子どもについては、バイリンガルの言語習得と教育の視点から、子ども達の言語習得がどのように進むのか、教科書学習にどのような影響を与えるのかに関して論じた。

第3章では日本人の子ども達が受身表現、使役表現の理解・産出がどれくらいできているのかその実態を探るために、公立小学校に通う日本人児童と、その小学校に隣接する幼稚園児たちを対象に横断的調査を行った。調査方法は「提示された絵カードを見ながら、絵の内容についての質問に答える」という実験的手法である。その結果、日本人の子ども達は親子間や日常生活でよく使われている受身・使役表現から理解・産出されることが明らかになった。小学校3年生の子ども達は受身・使役表現の産出が可能であったのに対し、幼稚園児らは受身の理解、受身・使役表現の産出は不安定で未だ習得過程にあることが明らかになった。

第4章では、第3章の日本人児童と同じ公立小学校に通う2名のブラジル人児童を対象に、約2年にわたる縦断的調査研究を行った。第3章と同様の絵カードによる調査を行い、受身・使役表現の理解と産出がどのようなプロセスで進むのかを調査した。その結果、ブラジル人児童らは、受身・使役表現ができたりできなかったりという不安定な時期を経て、活用としてではなく表現のかたまりとして受身・使役表現を理解・産出していった。特に、子どもの日常会話に密着した表現が習得されやすいということがわかった。習得されやすい受身・使役表現は同じ課題を用いた第3章の日本人幼児・児童とほぼ同様の結果となった。

第5章では、より滞日期間の長いブラジル人児童らを含めた55人を対象に横断的調査を行った。調査方法は「提示された絵を見て、そ

の内容に合うよう文を完成させる」という課題文完成筆記テストを用いた。ブラジル人児童と比較するため、小学1年生から3年生までの日本人児童283人にもブラジル人児童と同様の調査を行った。その結果、滞日期間2年未満のブラジル人児童は筆記において受身・使役表現は産出されにくいことが明らかになった。滞日期間が長い子どもほど、要求される受身・使役表現を使った表現文が増えてはいるが、滞日2年以降でも産出の伸びは小さく、6年以上日本にいても出にくい表現があった。ブラジル人児童は、半数以上が小学4年生以上の高学年であるが、それにもかかわらず低学年(小学1年生から3年生)の日本人児童のレベルまで追いついていない。特に、教科書学習などで用いられるような使役表現の「非意志性」に分類されるものにおいて、ブラジル人児童が日本人児童のレベルに達していないことが明らかになった。

第6章では、これまでの調査結果を総括して、受身表現、使役表現の産出の難易差とその要因、教科書学習との関わりから総合的考察を行い、今後の課題をまとめた。本稿では自然発話場面では観察されにくい文法項目、受身・使役表現を、統制下で調査することによって引き出すことに成功した。それによって、どんな表現が産出されやすく、産出されにくいかが明らかになった。従来、受身・使役表現は観察データの中に出現しないため習得されていないと考えられがちであったが、本稿の調査によって、これらの表現が回避されることが多いことや、途中まで出現(産出)されていても全体として間違った反応になってしまうため見落とされがちになることも明らかになった。限られた条件の中での結果ではあるが、本調査方法は観察されにくい項目を調査するための一つの可能性が示唆できたとと思われる。

さらに、意図的な日本語教育を十分に受けられずに友達や先生との会話や教科書学習など自然な環境の中で日本語を習得していくブラジル人児童にとって、受身表現、使役表現は産出が難しい文法項目であることが明らかになった。それは、滞日期間が長くなっても進歩は捗々しくない。これは日本人児童と比べて絵の内容を正確に描写するだけの日本語力が十分に身につけていないことや、教科書学習の教科書などに登場するような受身・使役表現が理解できていないことを示唆するものである。また同時に、自然環境の中で日本語習得を任せるだけではブラジル人児童らの日本語、特に教科書学習についていけるような日本語を伸ばさせることに繋がらないということも示唆している。

国際多元文化専攻

河尻 和也

張愛玲の文明観の＜変容＞についての考察—外国人作家の作品との関係を中心として

張愛玲(1920-1995)は、1943年、戦時下の上海で本格的な創作活動を開始した。1920年に上海で生まれ、抗戦期、解放期を通して上海文壇で活躍をした張愛玲の思想とその変容とはいかなるものであるのか。本研究では、1940年から1954年の時期における彼女の創作活動と外国文学からの影響関係、そしてその受容の方法と変化を

中心として検討することにより、彼女がいかに文明を捉えていたのか、彼女の文明観がいかなるものであったのかを考察した。

張愛玲が創作活動を開始した1940年代の中国は、1世紀も前から続く、欧米および日本による植民地・帝国主義政策の真直中にあった。張愛玲が幼少期を暮らした上海、大学時代を暮らした香港は、そ

博士学位取得者論文要旨 (2007年度)

れぞれ租界と植民地という状況にあり、世界的規模で起こりつつあった戦争は、彼女の身边にも確実にその足音を響かせていた。このような時代状況のもと、張愛玲は随筆『伝奇』再版自序(1944)において、自らの生きる時代を「早く、早く、遅かったら間に合わなくなる、間に合わなくなる！個人がたとえ待つことができたとしても、時代は待ってくれない」と焦燥し、また随筆『自己的文章』において、未だ未来に希望の見えない世界を「人々はまだ、時代の悪夢から抜け出してはいない」と憂慮した。そのような中で、張愛玲が作中における自己の感情を最も適切に表すもの、自らの思想背景にあるものとして取り上げたのが、「もの寂しさ」を表す「荒涼」という言葉であった。

両親から中国古典・近代文学、西洋文学の影響を受け、文学への傾倒を強めた張愛玲は、大学時代より創作活動を開始し、上海にて作家としての地位を得た。そして、その時代精神の共通性を敏感に感じ取った彼女は、西洋文学の中でも A. ハックスレー(1894-1963)、G. B. ショー(1856-1950)、H. G. ウェルズ(1866-1946)、E. オニール(1866-1946)、サマセット・モーム(1874-1965)、ステラ・ベンソン(1892-1931)、マーガレット・ハルセイ(1910-1997)といった作家に共感し、或いは反駁を行った。

第1章では、張愛玲が随筆で取り上げる4人の外国人作家の作品と、彼女の前期作品を比較考察し、戦時期(1937-1945)の彼女の文明観がいかなるものであったのかを考察した。

第1章で取り上げた外国人作家は、A. ハックスレー、G. B. ショー、H. G. ウェルズ、E. オニールである。彼らの作品には、第一次世界大戦によって大きな崩壊を受けた文明社会に対する思想が描かれている。

張愛玲が随筆『談跳舞』で取り上げた、ショーの『トセラへ還れ』に見られるように、人間は物質的側面を重視し、精神的側面を軽視し、権力を手に入れた。しかしながら、そのようにして発達した文明がもたらしたものとは、終わりの無い争いであった。また、張愛玲の随筆『談女人』を、ハックスレーの長篇小説『恋愛対位法』と対照的に分析した結果、彼女が西洋の文明社会を男性が作り上げたものであると捉えていることがわかった。そして張愛玲は、その男性が作り上げた、非合理で矛盾に満ちた現実社会に対して、人間(男性)の理性に懐疑的な思いを抱いた。

このように張愛玲は、男性によって作られた文明社会、既存宗教に対して懐疑的思考を示した。そして、彼女は争いが終わることの無い現代文明社会に対して、自らが信仰を獲得することができるものとして、オニールの『偉大なる神ブラウン』の地母神シベルを取り上げる。オニールの描いた地母神とは、全てを内包・外包し、超越する絶対的安息の世界である。張愛玲が、非合理が支配し、争いの終わることの無い文明社会に対して唯一の目標としたのは、このような新たな宗教としての地母神、つまりは女性性であった。

張愛玲はこのように、世界的規模で起こりつつある文明の破壊を、近代西洋における文明の発達から現在にいたる過程によるものとして、また中国で起こる文明の破壊と戦争とを、その人間の「進化」の結果であると捉えた。そして張愛玲は、無意識の内に時代の波に呑み込まれる個々人の姿を、悲しみを持った「荒涼観」という視線で捉えたのである。

第2章と、第3章では、張愛玲の文明観の中で、特に彼女の外国人に対する思いを分析し、張愛玲の人種観について考察を行った。特にここでは、張愛玲が西洋人全てを支配者として批判的に描いているのか、という点に注目した。

第2章第1節における短篇小説『沈香屑 第二炉香』(1943)の分析では、張愛玲が外枠物語の語り手「私」を中国人として配置し、内枠物語の香港イギリス人社会で起こったスキャンダルを、外枠物語の

「私」がアイロニカルに批判するという構造に注目して分析を行った。ここでわかることは、張愛玲が中国人である語り手「私」の視線を借りて、香港のイギリス人社会に存在する人種の問題を、張愛玲が外枠物語からアイロニカルに提示していることであった。

また、第2章第2節では、上海に住む白系ロシア人が描かれた短篇小説『年青的時候』(1944)を取り上げて考察を行った。「年青的時候」の分析では、西洋を無批判に憧憬する中国人主人公潘汝良の、上海で難民として暮らす白系ロシア人シンシアに対する恋心と、その変化を読み取った。潘汝良ははじめ「全てが万能である西洋」を夢見て、それをシンシアに投影して彼女に恋をしていた。しかしながら、彼が実際に触れた白系ロシア人社会、シンシアの境遇とは、彼が思うような万能さを有してはいなかった。論文では潘汝良の改心を読みとることにより、張愛玲が潘汝良を批判的に、白系ロシア人シンシアを同情的に描いていることを分析することができた。

オリエンタリズムやポスト・コロニアリズムなどの理論を用いた先行研究では、「白人＝支配者」、「中国人＝被支配者」という2元的な分割方法を以て張愛玲作品の分析を行っている。張愛玲の小説の中に、以上のような要素が存在するのは間違いのないことである。しかしながら、第2章における考察でわかることは、張愛玲は必ずしも以上のような対立を以てのみ作品を描いていないことである。その理由は張愛玲が、人間の行動を、一個人の意志だけではなく、その周囲の環境の影響を受けて形成されるものとして、個人が成立しており、その「人間」の行為の善悪を、一個人の意志によるものだけでなく、時代環境にその原因を求めていることによる。

第3章では、張愛玲が随筆で取り上げた外国人作家モーム、ベンソン、ハルセイを、張愛玲の作品と対照させることにより、彼女の作品と3作家の作品との関係、そして彼女がそれぞれの作家から受けた影響を中心として考察を行った。

張愛玲の作品とサマセット・モームの作品を比較考察した結果、張愛玲の作品にはモームの作品が持つ、植民地におけるイギリス人の被支配者に対する傲慢さ、差別的態度、排他的態度への批判というテーマの点で、同様の要素を見出すことができた。しかしながら、モームが中国人を初めとする現地人を、自らの欲望を満足させるための観察の対象としてのみ捉えているのに対して、張愛玲の作品には抑圧される中国人や混血児が持つ抗議の〈声／視点〉が、描かれていることが理解された。

また、モームとの対照研究の結果を踏まえ、張愛玲の作品を、ステラ・ベンソンの作品と比較対照し、考察を行った。その結果、ステラ・ベンソンの作品では、張愛玲が作中で描く、抑圧される者の抗議の〈声／視線〉が描かれていることがわかった。張愛玲の創作における視線は、ベンソンの視線と共通している部分が多い。そして彼女らの作品には共通して、文化と文明に対する〈悲哀〉を読みとることができる。

最後に、3章におけるそれまでの分析を参照して、張愛玲が習作期に摘訳したマーガレット・ハルセイの随筆『With Malice toward Some』を、後に張愛玲が描いた作品群と関連させて分析を行った。張愛玲が摘訳したハルセイの随筆は、異文化間に存在する無理解が描かれている。後に張愛玲は中国人や外国人に向けて、おのおのの文化を紹介する作品を描いている。本章における分析の結果、それらの作品を張愛玲が描いた理由には、文化間に存在する溝、抑圧と被抑圧の間に存在する無理解という文化的溝を、仲介させる意図が存在したのではないかと、いう結論を得ることができた。

1945年に太平洋戦争が終わると、張愛玲の作家としての立場は、それまでの流行作家から一転し、「文化漢奸」として批判を受けるようになる。その理由は、彼女が抗戦期の上海で汪精衛政権のもと宣伝部

博士学位取得者論文要旨 (2007 年度)

政務次長を務めていた、胡蘭成と婚姻関係を結んでいたこと、また、関連して彼女が第3回大東亜文学者大会(1944)に出席したと嫌疑をかけられていたことによる。

第4章では、張愛玲が中華人民共和国成立後の中国で、上海の新聞『亦報』にペンネーム梁京を用い、1950年3月25日から翌年2月11日までの、およそ1年間にわたり連載し、共産主義を称賛した長篇小説、『十八春』(1951)の考察を行った。そして、当時期における張愛玲の創作方法の変化を分析し、第3章までに見た彼女の態度、(荒涼観)が、この時期にいかに変容したのかを分析した。

第4章第1節では、『十八春』の改稿の理由を探るために、張愛玲が1950年から1951年の間に連載した、新聞版『十八春』と、翌年単行本化された『十八春』との比較研究を行った。また、併せて後に張愛玲自身が、『十八春』執筆の際に参考にしたと述べている、J.P.マーカンド(1893-1960)の長篇小説『H.M.プラム』(1941)をその考察の範囲に入れて分析を行った。その結果、張愛玲が単行本版において変更をした理由の中で、最も大きな原因となったのが、新聞に『十八春』を連載していた際に、張愛玲がマーカンドの『H.M.プラム』を参考に小説を執筆、連載していたため、新聞版『十八春』の物語の中に矛盾が生じたということがわかった。

第4章第2節では、『十八春』と『H.M.プラム』をさらに詳しく比較対照し、分析を行った。その結果、『十八春』の物語の構成、そしてプロ

ットの多くが、マーカンドの『H.M.プラム』をそのまま流用し用いていることがわかった。『十八春』において、張愛玲が完全なオリジナル・プロットとして創作・導入したのは、後に共産主義を奨励する原因となる中間部分におけるヒロインの悲劇のプロット、そしてそのプロットを起因として、後半部分を革命物語として描き変えた、という部分である。第4章における考察からみても、このような他作家の作品からの直接的な影響関係を持つ創作方法とは、それ以前の抗戦期における張愛玲の小説の創作方法とは大きく異なっていることがわかる。

このように、張愛玲は共産主義政権のもと長篇小説『十八春』を梁京というペンネームを用いて描いた。このことから考えるならば、彼女が描いた『十八春』という小説は、1950年という新中国成立時の上海において、張愛玲が彼女自身の個性と社会環境との関係の中で、梁京という「仮面」を身につけて描くほかなかった作品であるといえる。そしてそれはまた、作品集『伝奇』、随筆集『流言』において、太平洋戦争下の中国を、(荒涼観)として捉え作品に描き出した張愛玲が、新中国の成立という社会環境の中で、自身の思想を(変容)させざるを得なかった時期であるともいえる。

また、第5章附論では、1950年代以降の張愛玲の動向、および張愛玲作品の評価の変遷について簡単に言及した。

菅原 裕子

映画における超越の表象—コミュニオンとしての映画

本論文は、映画において「神秘的なるもの」がどのように表象されているかを明らかにすることを目的とする。20世紀初頭に出現した映画という新しい媒体は、写真と共に最も客観性を備えた芸術表現の形式となるが、その決定的な特性は、写真のように「一瞬」ではなく「時間の幅」という持続性をとりこむことを可能にした点にある。フィルムに収められた過去の時間を切り取り貼りつけ、時間軸を自在に行き来することで現実の時空間の超越を可能にする映画の特性は、今という物理的な現実の時間に映写されることでしか成立しない。したがって、映写されている現実の時間と映画の中に流れている時間は、どちらも確固として存在しながらも、共に不可思議な時間を形成することになる。そして映画を見る行為は、現実とそうでないものが交差し、融合する特別な時間と空間に身を置くことを意味する。

ここでは主に、映画における超越の表象を二つの側面から追究する。一つは、映画が上に挙げた理由により、神秘的な装置であるという認識である。映画が時空間を超越し、持続的な時間を再現し得る媒体であることを根底に、映画は映画作家によってフレーム枠を超えることに専心する。換言すれば、それは記録装置から記憶装置への変容であり、そのような有機的運動への転換を、映画そのものがどのような形式で、あるいはどのような方法で行っているかを分析することが主眼となる。もう一つは、映画を観ることでもたらされる観客の側の「経験」としての映画受容についてである。映画の有機的運動の最たるものとは、精神が高みへと昇る運動であり、その瞬間は常に観客の受容と共にあるはずである。記録装置として誕生した映画という媒体を記憶装置へと変容させる作業は、映画監督の労力だけで完遂されることはない。観た者がスクリーンに映し出されるものに感応し、暗闇の中で映画という特別な時間に身を委ね、意識あるいは魂が、一瞬別

の時空間へと超越する経験を経ることによって、初めてこの作業は完成するのである。

つまり、精神的なやりとりを重視するという点において、映画はまさに宗教儀礼的な「操作者」と「被操作者」による「やりとり」すなわちコミュニオンを形成するといえる。そのとき映画館は神殿となり、作り手と観客は時空を超えた儀式を通じ、別世界への飛翔を可能にする。映画を観ることはこれらの行為に酷似している。観る者として肉体を固定されながらも意識が「ポエジー」の極限まで昇華される映画の瞬間—すなわち真の「コミュニオン」—をもたらす映画はむしろ、多くない。ビクトル・エリセの「世界に映画は量的に飽和しており、その中の95%が映画ではない」という言葉は、そのような点で説得力をもつ。おそらく大半の映画に欠落し、残りのわずか5%に備わっているのは、「精神」に関わる主題とその実践であろう。本論文でとりあげる作品の多くが製作国も、時代も、具体的に表象しているものの内容も異にしているが、共通するのは、映画が精神を高みへと昇らせる芸術として存在するものであるという主張である。

本論文は、具体的な作品分析による検証を主として構成される。現実を超えた神秘なるもの、「ありえない」表象がどのように、映画ならではの形式によって表現されているか、また、日常の中に潜む神秘を映画がどのように露呈しているかを検討し、それらがもたらす経験としての映画体験の受容を分析する。それは同時に、昇華された映像詩と呼ぶべき一瞬が生まれる時はいつなのか、それらはどのように誕生するのかを追及する試みにもなるだろう。

第1章では、「現実と幻の狭間」をテーマに、映画の中に突然出現する日常と非日常の狭間の時空間の発生について考察する。「白日夢」「死者との邂逅」という、映画の神秘性そのものを表現するともい

博士学位取得者論文要旨 (2007年度)

えるエピソード、あるいは構造そのものを、アンドレイ・タルコフスキー、クシュートフ・キェシロフスキ、ジム・ジャームッシュの作品群から抽出し、分析する。いつかどこかで見たような既視感を含む風景や、真昼に見た夢のようなまどろみのひとときが、一瞬、現実の時間軸の中に忍び込む。それは生活を変えてしまうほどとりたてて大きな出来事でもなく、なにより短い時間の出来事であるが、不意に訪れ、しばし意識を旅立たせる。本章の中心となるタルコフスキーの『鏡』では、過去と現在がモザイクのように複雑に行き交い、母と妻、息子と主人公たちが融合し、通常の時間の流れを完全にかき乱す。そこにあるのは「記録」ではなく「記憶」である。そしてそれは、主人公のものであるはずの「記憶」を観客が共有することさえ可能にする。スクリーンという枠を越境することに専心する映画はわれわれの一つの「体験」へと昇華しうる「詩」へと変貌する。このような仮説を各作品の分析において実証していく。

第2章「魔術的リアリズム」では、本来ならば「ありえない」、現実からは遠く隔てられた表象をとりあげ、現象としてスクリーンに現前している圧倒的な力が「精神的リアリズム」とでもいうべきものに変容していることについて論じる。「空中浮揚」の節では主にタルコフスキー三作品を扱い、複数のパリエーションを含む時空の超越の概念が潜んでいることを指摘する。次に、「奇跡」の表象としてカール・ドライヤーの『奇跡』における死者の蘇生を扱う。イエスの再来と自身が信じた青年の「言葉」によって、使者が棺から体を起こし甦る場面が本作のクライマックスであるが、これは観る者にとって受容されるだろうか。蘇生は起こったのか、そうであれば、死者を蘇らせたのは何なのかを問う。そしてフランス史上最大のヒロイン、奇跡の少女ジャンヌ・ダルクを描く四作品をとりあげ、彼女が14歳で神からお告げを受けたという神秘体験を経た人物であることを大前提に、果たして彼女は聖女なのか、あるいは狂人なのか、それぞれ異なる見地から描く作品の系譜をたどる。さらに、魔女狩りを扱ったドライヤーの『怒りの日』をとりあげ、本章全体にも関連する、「精神的リアリズム」とは何かを追究する。そ

して最後に『デッドマン』と『サクリファイス』という、共にある種の「異端的魂」を扱った二作を読み解く。前者では、主人公がアメリカ先住民によって「魂がいた場所」へと導かれることの意味を問うと共に、アメリカ大陸における先住民と白人の関係についても考察する。タルコフスキーの遺作である後者では、神秘主義者を明言する人物の登場を中心として、一般に、タルコフスキー作品らしくないと評される本作の不可思議な物語に潜む独特の詩学を焙り出す。人類の救済、永遠の魂の表象を描く二作において、命の「再生」がどのように描かれているかを考察する。

第3章「エピソード——ビクトル・エリセ、繊細なスペクタクル」では、ビクトル・エリセの三作品を採り上げ、日常の中に潜む神秘のテーマを探る。寡作な作家エリセの長編映画の代表作『ミツバチのささやき』、『エル・スール』、『マルメロの陽光』において、彼がいかにか「映画的時間」に対して意識的な作家であるかが表現されているかを明らかにする。ここでは、死者が蘇ったり身体が浮遊することはない。しかし、ごく普通の日常の中にも、神秘はヴェールに覆われて隠されているのではないかという示唆が満ちている。エリセの作風は密やかで慎ましく、隠された神秘を探るにいかにも相応しい。映画が時間芸術であるというタルコフスキーの信念を受け継いだかのように、彼もまた映画の枠、あるいは額縁を超える作業に専念する。三作いずれにも映画内映画、あるいは絵画が登場するのは、それらを超える行為が映画にとって大きな意味を持つことを監督が知っている証である。映画の中の映画、映画の中の絵画、それを見つめる登場人物たちの視線、キャンバスに筆を走らせる画家、そして彼ら全体を見つめる観客、そして映画監督エリセの存在。そのどれもが混ざり合い、映画は生き物のようにスクリーンを走り、映画を観る行為が官能的な創造活動へと変貌する。映画という媒体が、「記録」装置から「記憶」装置へと変容し、いかにか有機的な運動を行っているかどうか、エリセがそれらをかきこみ繊細に表象しているかを明らかにする。

福原みつ希

劉心武の小説の語りにもみる個人と社会——ラベルとイメージの作用

本論文は、劉心武(1942年～)の1959年の小小説「多麼好的陽光」(何て素晴らしい陽光)「妹妹」(妹)「阿姨」(お姉さん)と短編小説『班主任』(担任教師)(1977年)及び長編小説『鐘鼓樓』(1984年)の中の語りから登場人物におけるラベルとイメージの作用の分析を、エスノメソドロジ的な視点を目指しながら行なったものである。語りにおいて、ラベルによって権力作用が生じるその場面を小説中の(いまここ)とした。大躍進(1958年～1960年)から無産階級文化大革命(1966年～1976年)とその終結以後の中国社会の移り変わりの激しい時代の中で、劉心武が見つめた中国における個人と社会の姿を見ることができる。個人は社会の中で、ある役割を与えられ、レッテルを貼ったり貼られたりする。あるラベルを貼り、カテゴリーに分類する作業は、時には無意識的に既存の解釈図式に基づいて成されている。そのような作業が当たり前のこととされ、自明性の中でラベルから判断が単純化されることで、役割の間では期待が生じ、レッテルによって拒絶が生じる。

第一章では、子供と大人或いは目上の者との間に生じる小さなせめぎあいにおける権力作用を分析した。「多麼好的陽光」では、大人

達は協力するために、迷子になった小英のもとに来る。小英が事務室へ連れ去られることはその場からの一時的な排除であり、子供である小英という個人と、大人達によって構成された社会の協力には、拒絶とみられる面があることを指摘した。「妹妹」では、妹に対する兄の皮肉な発言は、妹のことを表わしているのではなく、兄である私が受け入れることのできない兄自身の側面を投影したものであると述べた。小英や妹は、母親を自分で探すことのできない「迷子」や「臆病者」というラベルを見上の者によって貼られる。しかし、彼女達はその劣位のカテゴリーを示すラベルとは関係なく振舞い、彼女達自身が求める自己イメージに近づこうと自発的に努力し、目的を果たす結果になっている。個人の自発性を失うことなく個人と社会が協力し合うことが、十七歳の時に劉心武の求めた個人と社会との関係であり希望であった。そしてそのような描写は『鐘鼓樓』の路喜純の描写に更に深く受け継がれる。「阿姨」では、小紅は両親によって暗黙のうちに、「騒ぐ子供」というラベルに基づいて語られる。しかし小紅は、両親の意向に合わせて行動することで、劇場に連れて行ってもらうという目的を果たす。小紅は、劇場における暗黙のルールを知らず、騒ぐべきときでな

博士学位取得者論文要旨 (2007年度)

いときに騒ぐことで母との約束を破ったことになり、母と離れて休息室に連れ去られる。暗黙のルールを守れない場合は、その場から排除される社会を表わしている。劇場にいる大人と、休息室でお姉さんが話す同じ話を何度もしきりが小紅の対比は、どちらにしてもその社会状況におけるルールに縛られる人々と社会に流される個人の危うさを表現している。「妹妹」における兄は、兄であるために、妹に対して水泳ができないと告白することができない。それは兄という面目があるために、ときには真実を述べないことが許容されていることを示している。個人は、社会によって与えられたラベルのもとに役割やルールに基づいて行動する。しかし、『鐘鼓楼』での薛大娘の描写に見られるように、役割というラベルによる単純化は、社会における様々な役割を十分に機能させているとは言えないのである。

第二章、第三章では、『班主任』における宋宝琦と謝惠敏の問題と、それを取り巻く人々の潜在する問題について考察した。宋宝琦は不良少年にカテゴリー化され、そのようなレッテルを貼られたために、まだ直接会ってもいない者達から編入を拒絶され、不良少年のイメージからまた「新文盲」など様々にレッテルを貼られる。しかし、不良少年と知識がないことは直接的な関係はない。彼が盗んだ所持品である小説『牛虻』は、男女の恋愛の挿絵があるというだけで、クラスの者達から読まれる前に悪書とされる。『班主任』において提起された問題の一つは、レッテルを貼ることによってそれ以上関係せずに、解らないまま批判するという態度である。これは、文化大革命の時代に、「四人組」の愚民政策や社会状況によって現れた弊害である。謝惠敏は、同級生によって「杓子定規」などのレッテルを貼られる。青年团支部書記の謝惠敏は、担任教師である張俊石と物事の判断にずれが生じ、組織活動の教えを信じるか教師を信じるか葛藤する。謝惠敏の問題は、移り変わりが激しい社会の中で弊害のある組織活動を妄信し、本当に何を信じるべきか解らない所にある。宋宝琦も謝惠敏もその社会状況の中で訓化され過ぎたことで、周囲の人々に盲従せざるを得なかった。宋宝琦と謝惠敏は救うべき対象とされるが、喩え方や構成の仕方を見ると、語り手や張俊石の、二人の対象への対応には差異があることがわかる。宋宝琦の登場があることで、人々が当時極端にレッテルを貼っていた問題が明らかにされ、さらに謝惠敏や彼女を取り巻く人々が当時最も悲劇的な者、最も批判される者とされることを避けることができたのである。『班主任』は、文学という分野から人々がその状況において求めている団結の場を与え、文化大革命の傷から立ち直ろうとする人々に希望を与えたのである。

第四章では、『鐘鼓楼』の登場人物の一人である薛大娘が、姑の役割があることから、嫁に対しては不愉快さを表現し文句を言うが、その役割が作用しない場合は不安になることを示した。縁起に反することを忌む薛大娘は、縁起が良いことを通そうとするために、詹麗穎の親切を拒むことで、結婚式の順調な進行を逆に妨げる。思い通りにいかないという思いによって、思い通りにいかない現実を薛大娘は引き寄せているように描かれる。嫁姑問題は顕在化しているものであるが、語り手によって妻としての薛大娘とその夫、母としての薛大娘と息子

の関係が詳細に描かれなかったのは、その問題が潜在化しているためである。問題として認知されている関係は語るができるが、認知されず語るることのできない状況にある関係は語られることがないのである。

第五章では、レッテルによって困難にあう個人とその社会でのあり方が、路喜純の描写によってより詳細に描かれていることを示した。路喜純は、隣人達によって、彼の両親の職業に基づいて一方的に判断され、不良少年にカテゴリー化されるが、不遇でありながらもそのように振舞わないことで、ラベルに囚われずよりよい自己イメージを保つ。両親の身分に対するレッテルが子供である路喜純においても、隣人達や教師によって受け継がれている。路喜純は、二人の師の協力を得ながら、過去よりも未来をどうしたいかに基づき、今を大切にしている。薛家の結婚式において料理人を務め、薛家の人々と料理人という役割を超えた良い関係を持つ。

第六章では、姚向東が周囲の人々からのラベルを内面化し、そのラベルに合った出来事を現実化してしまうことを明らかにした。姚向東は、路喜純とは逆に、周囲の人々が彼に対して貼るラベルに囚われ、それに合わせた振る舞いをする。それによって、学校でも家でも居場所がないと感じ、父親に叱られて家を飛び出す。しかし、父親の姚向東に対する発言と暴力的な態度は、父親自身の不満感から出たものであり、そのような自己像を息子である姚向東に投影して発せられたものである。姚向東は彼を拒絶しない友人に借りて着ているジャケットを汚してしまい、弁償しようとして薛家の金品を盗んでしまう。友人を大切にしたいという思いが裏目に出る。姚向東は盗んだことを見つかるのが不安になり、奪うという行為によって、より居場所をなくし孤独になる。

本論では、語り手による小説内のあるカテゴリーに属する人物のラベルをめぐる語り方・語られ方の分析を中心に行なった。1959年から1984年にかけて社会的変化があるにもかかわらず、劉心武のこれらの小説においては、変わらない問題——自明性の中で生き、解釈の枠に依存するという問題——が提起されている。また一方で社会によって解釈の図式はそれぞれであり、何が肯定され否定されるかは時代の流れによって変動するものである。本論で分析した人物の多くは、その社会における集団や優位に立つ者によって、劣位のカテゴリーでイメージされレッテルを貼られる。また人々は役割というラベルによって単純化し、既存の解釈図式に基づいて判断し、物事を「順調」に進ませようとする。しかし、単純化によって、役割をめぐる関係に亀裂が生じ、「順調」さが失われる面も見られる。マジョリティが常識的知識によってマイノリティを支配しようとする時、解釈の図式のずれが現れてくる。エスノメソドロジー的な視点の文学での有効性は、カテゴリー化が、ある役割の正当化やレッテルに基づく拒絶のために、どのように当たり前にされているかを見ることのできる所にある。本論は、現実にはその社会状況において常識として片付ける人々の方法に、文学から接近を試みたものである。

佐野 昌己

日本アニメにおける3DCGの適切な導入と人材の育成についての考察

本研究は、3次元コンピュータグラフィックス(3DCG: Three-dimensional Computer Graphics)技術を用いた作品の台頭という商業アニメーション作品制作における世界的潮流を、コンピュータ技術の

著しい発展により生み出されたひとつの運動(ムーブメント)として捉えることから、依然として従来のセルアニメーション手法に基づく2次元(2D: Two-dimension)グラフィックス技術を用いた作品制作を主と

博士学位取得者論文要旨 (2007年度)

する日本製アニメーション(以下アニメ)への適切な3DCG技術導入方法の検討と、必要とされる3DCG制作者育成について考察するものである。

アニメは、日本国内はもとより海外でも大きな人気を博し、テレビ用作品を中心に諸外国に輸出され圧倒的な支持を得ている。その人気は、英語圏においても国内と同様にアニメと呼称されており、日本風の2Dアニメーションの意味で、animeという単語が一般名詞として使用されている程である。そして、現在のアニメ市場は、作品の放映、販売だけでなく、作品に登場するキャラクターや乗り物、道具などの使用許諾に基づく著作権ビジネス、原作マンガとの相乗効果など周辺ビジネスを含めると数兆円規模と考えられる巨大な市場を形成している。これらのことから、コンテンツ産業の動向調査や基盤強化に関する研究が経済産業省や日本貿易振興機構を中心として多数おこなわれている。

しかし、アニメに対する学術的な研究や教育は十分に行われているとは言えない。近年、金子満らによる3DCG手法を利用する映像と従来型手法の比較研究や、岡本直樹によるテレビアニメ制作手法に関する研究など、制作工程のデジタル化等の技術的研究が注目されている。しかし、教育面に関しては、西尾吉男による学習システム構築や小澤謙二郎らによる教育のためのカリキュラムの設計など、映像制作全般に対する研究が試みられているが、アニメ制作者に焦点を当てた学術的検討などはなされていないのが現状である。国外では、Susan J Napierをはじめ、アニメ文化の研究が数多くなされており、アニメ制作の主な発注先である韓国でさえ、マンガ・アニメーションを学ぶ学部・学科が40以上あることを考慮すると、海外と日本におけるアニメーションへの学術的取り組みの差は歴然としている。

さらに、世界の商業アニメーション制作が、これまでのセルアニメーション手法に基づく2D作品から、3DCG技術を大幅に導入した作品へと大きな転換をはかっている途上にあることを考慮しなければならない。アニメーション誕生期から常に世界を牽引してきたディズニー社が、自社の2Dスタジオを閉鎖したうえで、3DCG制作で世界的に有名なPIXARを買収したのをはじめ、ハリウッドの大手スタジオが相次ぎ2D作品から全編を3DCG技術により作成するフル3DCG作品の制作へ転換する波が、欧州、アジアにも伝播している。

しかし、日本ではフル3DCG作品の制作は実験的試みに留まり、依然として、従来のセルアニメーション手法のデジタル化にとどまるのが現状である。ところが、アニメが制作工程の大半を海外のプロダクションに依存していることから、今後、海外における3DCG化の波による影響を受けることは必至な状況にあるといえる。

そこで、本論文では、世界規模で急速に変化するアニメーション制作事情を、制作現場の実際の状況から分析すると共に、人材不足の現状から産業構造の改革が急務である日本のアニメ産業において、3DCG技術の導入が有効であることを述べた上で、アニメ映像への適切な3DCG技術導入方法の検討と、今後ますます不足することが予想される3DCG制作者について、その人材確保の為の3DCGに対する興味喚起、および、教育法について考察する。

第1章では、アニメ制作の特徴を述べるとともに、本研究におけるアニメを定義する。本研究では、アニメをセルアニメーション風作品の中で、1963年に日本初の本格的テレビ用アニメ番組として制作されただけでなく、日本製テレビアニメ初の米国進出を成功と見做した『鉄腕アトム』以後に、テレビ放送のための制作手法の中から生まれたアニメ固有の映像表現を持つことを特徴とし、主に物語を重視した作品であると定義する。さらに、アニメ制作の特徴と国際分業化の現状を述べた上で、アニメの制作現場が抱えている問題という内部要因と、世界のアニメーション産業がフル3DCG化へ急速に転換して

いる外部要因の両面から、アニメが世界的なアニメーション制作環境の変化の渦中にあることを指摘する。

第2章では、世界の潮流を確認するため、世界の商業アニメーション制作の現状を述べたうえで、日本の現状と比較する。アニメーションの3DCG化のムーブメントの源である米国、教育に力を入れている欧州、日本の下請け基地からの脱却を目指すアジアの実情を論じる。さらに、中国天津におけるアニメーションスタジオの実地調査を報告する。中国では、現在発展中の巨大な国内市場と豊富な人材を背景に、日本アニメの下請けからの脱却を目指しているだけでなく、政府、産業界、学校の強力な連携が図られている。これら海外のアニメーション制作事情と比べ、日本では、3DCGを制作工程に導入することの重要性は低い位置づけにあると考えられる。しかし、アニメが海外のプロダクションの生産能力に大きく依存している現状では、導入の重要性如何にかかわらず、アニメーション制作の3DCG化という世界の潮流を無視し続けることはできないのである。

第3章では、日本における3DCGの発展の経緯を論じる。アニメへの積極的な3DCGの導入を促すためには、技術的課題の克服だけでなく、人材の育成も重要である。そこで、若年者が3DCGに対する興味を抱く要因を明らかにするため、1980年代後半から商業アート分野にコンピュータの導入をいち早くおこない、当時から活躍が注目されていた個人制作者を中心にインタビューを実施した。その結果、自分の憧れを実現させる道具が3DCGであることを発見することが3DCG習得意欲の強い動機付けとなり、幼少期における意欲刺激が、3DCG技術修得に対して大きな影響を与えることが明らかになった。

第4章では、アニメ制作者育成に関して、日本のアニメ制作における技術の進歩とそれに伴う制作現場の変化を論じる。国内におけるアニメ制作の現場は、人材に関連する深刻な問題を多く抱えていることから人員の拡大は難しい状況にある。アニメ制作の抱える問題の内部要因、外部要因から、今後ますます3DCG手法導入の必要性は高まるであろう。そのため、2Dアニメーションの代表的表現手法であるアニメに3DCG制作手法を取り入れる為のさまざまな方法が検討されている。しかし、現在の3DCG手法導入は、必ずしも適切とは言えないものがあるのが現状なのである。

第5章では、アニメ制作者育成に影響する要因、および、アニメへの3DCGの適切な導入について調査を基に考察する。技術習得意欲に対する内的要因を明らかにすることを目的とした「現代の若者における意識調査」、アニメに3DCG手法を導入する際に発生している違和感の原因を明らかにすることを目的として「3DCG使用法の差に起因するアニメと非アニメの境界線調査」、さらに詳細な分析を目的として「3DCGの適切な導入に関する調査」等を実施した。これらの結果から、人々はアニメへの3DCGの導入に対してたいへん寛容であるという結果が導かれた。しかし、場面により2Dと3Dを合成した部分の差異が変化する場合には違和感を覚え、場合によっては3DCG導入に否定的となる傾向があるのである。

第6章では、アニメ制作者育成を目的とする効果的な教育法について考察する。若年者に対する3DCG教育に関する研究はいくつか報告されている。しかし、アニメ制作者育成を考慮した研究はなされていない。アニメ制作のための効果的な3DCG教育法を検証するため、実際に3DCG制作アプリケーションソフトを用いて、実験による調査を実施した。そこから、3DCG制作に対する興味を萌芽を植えつけることを目的とするならば、初めに3次元形状の作成を行うことが効果的であるという結論が導かれた。

第7章では、本論文の結論と将来の展望を論じる。今や、アニメは国際的に広く親しまれる存在となっている。そして、現在も、日本がアニメ生産大国であることは間違いがない。しかし、国外に目を向けると、

博士学位取得者論文要旨 (2007年度)

日本風 2D 作品とは異なる表現を特徴とする、アニメーションの 3DCG 化が世界規模で急速に進行している。そして、日本のアニメ産業が、海外プロダクションの制作能力に大きく依存している現状から、

世界的な 3DCG 化のムーブメントを無視することはできない。これらのことから、アニメにおける 3DCG の適切な導入と、それに伴い必要となる人材の育成はますます重要になるのである。

服部 達哉

デジタルシネマがもたらす新しい視覚表現—映画技術史の再考察

21 世紀に入り、映画技術の分野では、「デジタルシネマ」という言葉が使われるようになった。今日の映画学では、映画の本質であった「フィルム」を駆逐しつつある「デジタルシネマ」の明確な定義付けや「フィルム映画」との関連性について、映画技術史的観点からの考察がなされていない。そこで、第 1 章では、「デジタルシネマ」のシステムについて補足的な説明を加え、「デジタルシネマ」の定義について再検討を行っている。

第 2 章では、専門的技術の領域では十分に語ることでできない社会的、文化的側面から「デジタルシネマ」を分析するために、系譜学的探求によって「デジタルシネマの原型」を浮かび上がらせる作業に取り組んでいる。映画技術史の転換期となったフィルムを用いないデジタルシネマカメラによる撮影は、誰のどのような動機と背景から起きたのか。また、なぜデジタル撮影が急速に普及したのだろうか。第 2 章で明らかになるのは、「デジタルシネマ」によって可能になる新しい視覚表現が、映画の前身となった写真技術の再現であり、デジタル技術の映像処理性能を前提とした撮影技法が「フィルム映画」の起源にまで遡っていたということである。

デジタル撮影という映画制作における新しい生産体系に重心を置くことで、「垂直志向」の「デジタルシネマ」と「水平志向」の「デジタルシネマ」の間で二つの力が働いていることが分かってくる。「映画のデジタル化」という現象は、フィルム映画の画質性能を超えてしまうような技術的可能性を模索し、「デジタルシネマ・システム」の完成を目指して頂点の「完全なデジタルシネマ」へと上昇しようとする力と、その技術を応用して制作が効率化される過程で生まれた様々な発見や反省から、汎用性と安全性を高めた民生機の普及によって技術が更に広範囲に伝播する力の 2 つの作用の働きとして理解することができる。

第 3 章では、「デジタルシネマ」の登場によって、ヴァルター・ベンヤミンが『複製技術時代の芸術作品』の中で見出した映画の可能性が実現しつつあるのではないかと仮説について論じている。ベンヤミンが目指した映画の諸特性と「デジタルシネマ」を照合することで、『複製技術時代の芸術作品』で論じられている映画の可能性に、「デジタルシネマ」の技術的特性を求めている。「デジタルシネマの原型」

となった映像の技術的特性がどのように形成されたのか。さらには、現在の状況において映像の技術的特性がどのような影響を社会に与えているのかを論じた上で、「デジタルシネマ」という新しい技術または現象は、人間と映画技術の関係と人間の知覚をどのように変容させたのかについて総括している。

初期の写真技術に加えられた改良点と写真技術の産業化の過程に、映像メディアに「偏在性」を与えた技術的特性と発展要因があると考えれば、「デジタルシネマの原型」にも繋がる映画の原点は、写真技術の「技術的」欠陥と不完全な生産形態の中に求めることができる。写真術が複製技術へと発展する段階において我々に提示してくれる映像の技術的原理は二つある。映像は転写される媒体をより「遍在性」の高い媒体へと移し変えることである。そして、このことは必然的に、物質的媒体から非物質的媒体への移行を決定付けることになる。物質的媒体から非物質的媒体への移行はまた、人間の感覚受容の変容を促した。映像媒体の移行は、人間の知覚機能と同調性を備えることで、徐々に映画に必要な技術的要素を選択形成して行く。ここに我々は、「デジタルシネマの原型」にも引き継がれる映画の原型が写真技術に起きた技術革新によって形成されたことを確認することができる。

結論では、2 章で提示した「デジタルシネマ」に関する 4 つの問いへの答えを導き出している。文化現象の上部には、あらゆる価値体系に内在する「垂直志向」の運動がある。それは「模倣」や「複製」による偽りの継承かもしれないが、伝統的なものとの繋がりを保持して、秩序や規範として現実に反映させようとする。下部には、流動的で、境界と限界を越えて拡張し続ける「水平志向」の運動がある。それは、あらゆるイメージと価値を、生産と消費の領域に呑み込み「垂直志向」の運動の働きをも吸収することで、新しい人間の知覚と新しい技術の生まれる領域を創出する。我々の時代には、フィルム映画とデジタルシネマの相克のなかにある 2 つの「志向性」が同時に存在している。我々は、「デジタルシネマ」の考察によって、映画技術が、2 つの「志向性」を共存可能にする優れた技術であることを再認識することになる。

朴 英璇

日本統治期における韓紙の変容—朝鮮総督府の製紙改良事業を中心に

中国から伝わった製紙術は、韓国において主に楮を原料とした、地域性のあるものに発達した。韓紙は楮の持つ独特な風合いと丈夫さによって高い評価を受け、高麗時代にはアジア全域にその名をとど

ろかせた。韓紙はその強靱さゆえに紙の一般的な用途である書写用の領域を超え、工芸や日用品にまでその用途を広げることが出来た。

博士学位取得者論文要旨 (2007 年度)

しかし製紙業も朝鮮末期には社会変動の波の中で衰退していき、韓国が日本の支配下に入ると日本人により粗悪紙の烙印を押されるまでになった。品質改善を目指すはずの製紙改良施策は、功を奏するどころかかえって韓紙の質の低下を加速化させた。しかも改良策は伝統的な韓紙の抄紙法を和紙抄紙法に挿げ替えるという形で行われたので、解放(終戦)後、韓紙の製法はすたれ韓紙は実質的にはほとんど姿を消してしまったのである。

長い韓紙の歴史の中で日本統治期はかつてないほどの激動の時代であった。この時期を境として韓紙は大きく変貌した。韓紙の様態が様変わりしてしまっただけでなく、当時の製紙改良策は、その後和紙抄紙法が韓紙の製紙法として一般化することによっていまなお影響を及ぼし続けている。

本稿では、このように日本統治期を境に変貌してしまっただけでなく、当時の製紙改良策は、その後和紙抄紙法が韓紙の製紙法として一般化することによっていまなお影響を及ぼし続けている。

本稿では、このように日本統治期を境に変貌してしまっただけでなく、当時の製紙改良策は、その後和紙抄紙法が韓紙の製紙法として一般化することによっていまなお影響を及ぼし続けている。

1. 韓紙と和紙の消費と生産

韓紙は書写用以外に工芸、日用品など、様々な用途があるにもかかわらず、日本統治期、特に初期の生産量は微々たるものだった。消費量は、年間高い紙で一人当たり2枚から安い紙で10枚程度と紙は絶対量が不足していた。このような少量の紙を多様に使うために韓国人が工夫したのは、再生紙を使うことだった。再生紙を使う習慣は古くからの伝統だった。

日本統治期を通して韓紙の生産が最も盛んだったのは古くからの主産地でもある慶尚北道、慶尚南道、全羅北道の3地域であった。慶尚北道の代表的産地は慶州、金泉、盈徳、慶山などであり、貢物紙、白紙の種類を主に生産した。

慶尚南道の代表産地は宜寧、陝川などであり、中国向け輸出紙のおよそ8割を宜寧で生産していた。生産紙種は窓戸紙、油杉紙、見様紙、貢物紙、壮紙、張板紙などであった。

全羅北道の産地は全州、任実などであったが、紙は主に白紙を生産した。和紙は、日本統治期以前にも少量ではあるが韓国に流入していた。韓国が日本の統治下に入ると日本からの移住者も増え、それにしたがって和紙の流入量も増加した。その量は韓紙生産量の約3分の1から2分の1のほどであった。和紙はほとんどが日本人により消費されると言われていたが、それでも韓国人の和紙消費量は増加し、結局書写用の用途を和紙に譲ってしまった。

日本には、韓国向け輸出紙を生産する産地は多かつたが、中でも鳥取県、福岡県、山口県、高知県は有名で、主に美濃紙や半紙などが多く入った。

2. 韓紙の特徴と改良製紙教育

韓紙は伝統的に楮を原料にして製造されてきた。楮の繊維は他の原料の繊維より長く、絡む性質があるため強靱な紙を製造することが出来た。また、韓紙が強靱であるのは製造過程にもその原因があった。楮のパルプ化段階で繊維を切断せず叩くことで繊維の長さの特徴を生かし、繊維の配列をクロスさせる抄紙法を使うことで紙は縦横どちらからも破れにくい紙に仕上がった。また、漉きあがった紙を2枚以上重ねて乾燥させ、最後に出来上がった紙を叩いて繊維の密度を高めることでさらに強靱性を上げた。

しかし、このように漉きあがった紙は高価なため輸出に支障があることや原料不足を理由に朝鮮総督府は強靱性と純良性を特徴とする韓紙に、生産単価を下げるため副原料混入を全国的に行った。製造工程でも機械化、原料の薬品処理化を進め、韓紙の強靱性の特徴を著しく損傷し、特徴のない粗悪紙にしてしまった。

3. 製紙改良のための教育機関

朝鮮総督府は、韓国における工業関係の試験、分析、鑑定事務を行う目的で中央試験所を設立した。試験所は大きく化学工業部、染色部、窯業部、分析係に分かれ、製紙試験及び実地指導は、一般化学工業試験やゴム工業試験などを担当する化学工業部で行われた。

付設工業伝習所は工業関係技術の教育機関で、中央試験所の研究結果をすぐに全国に波及するための技術師や教師を養成した。工業伝習所では主に、韓紙の改良抄紙教育と和紙の抄紙法を教育した。韓紙の改良抄紙教育は韓紙の品質向上を目的とするものでなく、むしろ韓紙の品質向上の努力の代わりに和紙抄紙法を教える韓紙に代替しようとした。

また、地方にも改良韓紙と和紙の製紙法を伝習するための教育機関である伝習所、製紙場などが置かれ、中央の製紙方針が素早く全国に届く体制が整っていた。

全国で最も活発に製紙改良教育が行われたのは慶尚北道や全羅北道、慶尚南道といった韓紙の主産地であったが、特に慶尚北道の慶州は和紙の生産で有名だった。

4. 結論

このように朝鮮総督府は製紙改良によって韓紙を改良していったが、実際製紙改良は、品質の改善というよりは安い紙を量産するための教育に過ぎなかった。また、良質の韓紙を製造するための努力をする代わりに和紙の抄紙法を教育することで韓紙は良質の和紙の下位に組み込まれ、2等紙に転落してしまう結果となったのである。

Jacobus Fredrik van Staden

How This World Works: Capitalism, Anime and the Global Audience

文化的グローバル化という過程はよくアメリカ化と同様な過程と思われている。しかし実際にはより複雑な状態であると言える。例えば、西アフリカではハリウッド映画は人気があるが、インドで作られたミュージカル映画も非常に人気がある。私の国の南アフリカの場合でも、インドの映画や日本のアニメは、以前にも増して観客にアピールするようになった。最近、日本アニメ専門テレビチャンネルも登場し、24時間アニメライフスタイルが南アフリカで可能になった。しかし、アニメ作品を鑑賞する海外の観客はどうやってその作品に含まれている日本の

文化を理解するのか、さらに、アニメ作家と監督はどうやって自分達が今まで行ったことがない国の観客に、自分達の作品をアピールするのか、という疑問が生じる。この疑問は日本アニメだけではなく、映画やテレビ番組を輸出する他の国についても同様である。インターネットやDVD産業のおかげで、観客が「ある国」についての知識がないまま「ある国」の文化製品を消費する状態になった。

こうした状態——つまり、自分とは文化的なつながりがない国で作られた知的生産物を消費するという状態——は、文化的なグローバ

博士学位取得者論文要旨 (2007年度)

ル化と呼ぶことができる。そうであれば、日本アニメは「日本の文化」としてだけでなく、「グローバル化された文化」として分析することが可能である。

本研究の目的は、観客が自分の文化圏の外で作られた映画やテレビを理解する過程を理論化し、さらには、様々なレベルの文化的に固有の知識を持ち合わせた観客を一度に引きつけるため、作品がどのように事前に設計されているかを検討することにある。観客の理解は必ず文化と繋がりとあると論じる。しかし、製作環境になった国家における知識を持たず楽しめるなら、その文化はいったい何であろうか？この研究は現代資本主義自身がその観客の理解をサポートできる文化的なシステムになったという主張である。

第一章では、資本主義というのは何かというテーマになる。二つの問題点 — 資本主義とアメリカ化との関係、そして、資本主義とヨーロッパ中心主義との関係 — について着目した。結論として、「日常的な資本主義」という概念を定義し、つまり、国家的や政治的なアイデンティティより最低レベルな資本主義であると論じる。「子供の貯金箱のレベルで欲しいものが買える」、その欲求と消費行動は、貧富の差がなく誰でも参加している資本主義である。日常的な資本主義が様々な姿で全世界に見ることができ、観客にも監督にも影響を及ぼすと考え、文化的グローバル化における分析法の元になることができると論じる。

第二章では観客とスクリーンとの関係について考察する。かつて、映画を理解するために観客はどういった精神的な行動が必要であり、映画にどのイデオロギー的な影響を受けるのかという論争がなされた。ミュンスターバーグからカルチュラル・スタディーズまでの様々な理論を比較し、観客の行動という概念はどう進化したかについて調べてみた。結論として本研究の元になる観客と映画における考え方を定義する。映画は観る者が(まるで慌ただしくコスチューム・プレイを繰り返すかのように)異なるアイデンティティを試すことができる安全な空間を作り出す。そのストーリー空間の中で精神的にナビゲートするのは観客の行動であるとも言える。日常的な資本主義との体験はそのストーリー空間のルールを理解しやすくと論じる。

第三章では、日常的な資本主義に受けた体験をどうやって分析法にするのかというポイントを考える。第一は、マックス・ウェバーが提唱

したピューリタンな資本主義を問題にし、保守的な資本主義から現在に見られる性的な資本主義までというのはどういった進化であったかを考える。したがって、「欲望」も必ず資本主義における体験の一部であると論じる。しかし、個人は欲望の主體的なだけではなく、相対的にもなりうる。映画俳優の立場を考えると、ファンたちの欲望的的として労働する。個人的な働きかけと、欲望も労働も関係がある。その働きかけはアイデンティティとも関係しており、映画を同一化になるために登場人物の「ナラティブ的な個人的な働きかけ」は大事であると主張する。しかし、資本主義では個人的な力は必ずお金と関係がある。さらに、商品はシネマチックな時間にも空間にも分かりやすくし、資本主義を元にした分析法は「お金と商品」も扱う必要がある。「欲望」、「ナラティブ的な個人的な働きかけ」、さらに、「お金と商品」を考えながら三つの日本国外でヒットしたアニメケーススタディーにたどり着く。そして、作品ごとの文化について考える。

第四章では、『アルプスの少女ハイジ』におけるヨーロッパのイメージを分析する。各国で観られたこのシリーズは、後にそれぞれの国において微妙に違う意味合いを持つようになった。それを明らかにするため、日本と南アフリカの場合を比較する。前に論じたとおり、知識より日常的な体験が同一化しやすくなることについて証明する。『アルプスの少女ハイジ』が「自然」を中心とし、まったく資本主義を表わさない作品はどうやって分析されるべきかとも考える。

第五章では、『機動戦士ガンダム』の「戦争文化」を分析する。主人公のアムロ・レイとガンダムモビルスーツとの関係に着目し、個人的な働きかけと商品の複雑な関係を読み取り、その関係はどのようにグループ・アイデンティティと結び付くであろうかと考える。さらに、戦争を背景にした作品は資本主義とどういった関係があるかというテーマになる。

第六章では、ケーススタディーのなかに最も日常的な資本主義が現れる『クレヨンしんちゃん』に着目する。この作品には、日本の固有な情報が豊富にあり、日本らしい冗談も非常に多い。しかし、翻訳しにくい『しんちゃん』は海外でもヒットした。日本を描きながら日常的な資本主義も描くと論じ、海外に吹き替え作品は結局ハイブリッドなものとして考えることができる。日常的な資本主義な意味が含まれているからこそ、ハイブリッドしやすくなる。

山田 創平

現都市と言説—都市域におけるHIV感染対策への言説研究の応用

本論では、HIV感染対策への都市論の応用可能性を検討する。

Iにて論文の全体的構成を確認し、IIでは、地域研究の新たな手法が検討される。用いられる方法論は地域における言説分析である。ここで「言説」には「建築」が含まれる。建築は言説そのものであり、また言説は建築そのものである。本論では、言説と建築は再生産の関係にあると考える。建築をはじめとした諸言説によって構築された空間は、身体を構築する。そしてその身体は他の言説や社会的諸関係の中で再構築される。その再構築された身体は、さらに建築をはじめとした空間そのものを再構築する。このような言説と建築の再生産の関係の中で、身体はまさにその時々の言説の「織物」、いわば「言説の編成」とでも言うべき隙間のない権力関係の中で、“あるヴァージョン”へと帰結するし、空間もまた“あるヴァージョン”へと帰結する。その連鎖は、閉じることなく続く。そしてその連鎖の様子は、その時々

差異の表象として立ち現れるところの言説を読み解き、分析することで明らかにすることができる。以上が、本論の核心的なアイデアである。

IIIでは、IIで展開されたアイデアが具体的なフィールドワークによって検証される。ここではいわゆるゲイタウンとして知られる東京都新宿区新宿二丁目、1990年以降セクシュアル・マイノリティをめぐる諸言説、即ち小説や映画、評論、広告といった言説のありようや歩調を合わせるかのようにその都市の形態を変容させてゆく様子が確認される。それはクイア理論の進展に伴う、新宿二丁目から他地域への商業施設の分散でありクローズなコミュニティからオープンなコミュニティへの変化であった。ここに見られるのは、身体を中心とした言説と建築の再生産の関係そのものである。本章で新宿二丁目をフィールドとして取り上げ、セクシュアル・マイノリティを検討の対象とするのは、

博士学位取得者論文要旨 (2007年度)

日本におけるHIV感染の大半が男性同性間の性的接触によるものであるからである。

IVでは、IIIと同様の方法論が、主に歴史的テキストを用いつつ大阪府大阪市北区堂山町において検討される。ここでは、堂山町という地域の系譜が「抑圧の系譜」であり、そのような抑圧の系譜の上に、ゲイタウンとしての堂山町が成立していることが確認される。このことは、現在のセクシュアル・マイノリティの社会的配置を端的に表している。IIIで確認されたようなクローズなコミュニティからオープンなコミュニティへという、リベレーションの流れがある一方で、ゲイタウンは大阪でも東京でも、現在まで抑圧の系譜の上に存在し続けてきたし、今も存在している。このことは、社会のセクシュアル・マイノリティに対する、抑圧の根深さを示している。

都市におけるセクシュアル・マイノリティの状況をめぐってIIIとIVで示された二面性(リベレーションと抑圧)は、都市におけるセクシュアル・マイノリティの多様性と複雑性をあらわすものであり、以下においてHIV感染対策を考える時重要な観点となる。本論のテーマは、HIV感染対策への都市論の応用可能性の検討であるが、Vでは詳細な検討に入る前に、世界と日本でのHIV/エイズの状況を確認する。国連エイズ合同計画(UNAIDS)が指摘するように、現在エイズは単なる一つの疾病という枠を超え人類の直面する最大の課題となりつつある。また先進各国で新規HIV感染者の増加に歯止めがかかりつつある中、日本国内では急速な増加傾向が現在も継続している。そして厚生労働省は、その感染の大半が男性同性間の性的接触が原因で起こっていると報告している。男性同性間の性的接触によるHIV感染は1999年頃から急増している。また感染は東京、大阪、名古屋をはじめとした大都市圏で多く報告されている。

都市は人口が集積する場所であり、そこでは当然にソーシャルネットワーク(社会的紐帯)やセクシュアルネットワーク(性的紐帯)が密になる。そのような緊密なネットワークの中、結核のような空気感染や、HIVやクラミジア、淋病、梅毒といった性感染は当然起こりやすくなる。従って、HIV感染対策に限らず、広く公衆衛生の領域では「都市」は重要な要素として考えられてきた。しかしながら、そこにおける都市の扱いは非常に硬直したものであり、都市の複雑性や、都市住民の多様性は視野に入ってこなかった。

だが、HIV感染症という都市の抱く大きな課題に取り組もうとした時、そのような複雑性や多様性に対する考察は、重要である。なぜなら、HIV感染症は地域の持つ「政治性」「差別や抑圧」「マイノリティのありよう」などと深く結びついているので、為政者や官吏が強権によって感染症を管理するような、社会を一枚岩であると捉えた上での方法論は通用しないからである。そしてそのような「政治性」「差別や抑圧」「多様性」「マイノリティのありよう」などを核心的なテーマと捉えてきたのが、ポストモダニズムに端を発する新しい都市論であった。そのような新しい都市論においては、「都市は言説そのものである」と捉えられる。その理論的背景は、II, III, IVにおいて確認したとおりである。

VIでは、そのような新しい都市論のHIV感染対策への具体的な応用を検討する。都市においてHIV感染症という課題を考える時、セクシュアル・マイノリティを取り巻く諸言説であるところの「セクシュアリティ」や「スティグマ」、「差別や抑圧」によって身体がどのように構築されているのかということは、HIV感染症に対してゲイ/バイセクシュアル男性をはじめとするセクシュアル・マイノリティがとりわけ脆弱な状況に

あることを考える時、検討の必要がある。ある都市におけるセクシュアル・マイノリティの状況は、その都市における社会的諸関係の凝縮であるところの、その都市空間に独自の事例であるはずである。そして、そうであるとするならばその都市でHIV感染対策を実施し、予防事業や予防プログラムを実施しようとするとき、その都市の社会的諸関係の凝縮である「その都市におけるセクシュアル・マイノリティに対する抑圧や偏見」という言説が織り込まれた、その都市に独自の言説の編成によって規定された身体のヴァージョンを知る必要があると言える。そして、実際に感染対策を実行するとき、セクシュアル・マイノリティの文化的配置や抑圧のありようを熟知したCBO(地域住民や当事者が中心となって組織するグループ、Community Based Organization)の役割は大きい。なぜなら、CBOは上述のような、「その都市に独自の言説の編成によって規定された身体のヴァージョン」を、まさに肌感覚で知っているからである。

本論で紹介される大阪でのCBOの活動事例は、その「肌感覚」の重要性を明確に示している。これらの肌感覚は、本論で検討されたような地域研究の視点を得ることによって、今後、明確にエビデンスベースで標準化され、他地域でも応用可能な研究知見となりうる。

そしてVIIにおいては、都市におけるHIV感染対策への言説研究のもう一つの応用事例として、「ゲイ/バイセクシュアル男性向け商業施設の集積エリアに流入する人口の推定に関する研究」についても検討する。この研究は、まさに都市と言説の再生産の關係に着目したものである。つまり再生産の關係におけるさらにその先、即ち「そのエリアに独自の言説の編成によって規定された身体のヴァージョン」が、「そのエリアの現実の都市構造であるところの建築」という言説を変える」という段階を一旦迎えるだろうという、その理論上の帰結を前提とした上で、「身体も建築もどちらも同様の言説に依拠し、まさに同様の言説により規定され再生産されるがゆえに、身体と建築は、その物理量においても相互に対応し、同様の量的な比を取りうるだろう」というのが、この研究の基本的なアイデアである。

この研究では、以上の観点から地域の全建物延床面積に占めるゲイ/バイセクシュアル男性向け商業施設の建物延床面積の比率によってセクシュアル・マイノリティの人口規模を推定する。この方法は今後社会がHIV感染対策に取り組もうとするとき、その対象、クライアント、とりわけ個別施策層と称されるHard to Reach Populationがどれほど存在するのかわかる上で有用である。

本論の核心的なアイデア、即ち「身体を中心とした言説と建築の再生産の關係」は、換言すれば、社会は全体としてあらかじめあるものではなく、ひとつの身体としての個人のありようによって、構成し直されるというものである。このことは、個人が一人の市民として社会の中に在ることの意味の大きさを端的に表してもいる。

都市という、様々な紐帯や関係性の錯綜する現場で、HIV/エイズという大きな問題は当然その解決の糸口が見えないように思われる。だが、個人が一人の市民として社会の中に在ることの意味の大きさを考えるとき、そして、まさにHIV/エイズという課題の中心的なテーマである「規範」や「排除」、「差別」という事柄のその源に、それぞれの市民のありようそのものが関わっているということを考えるとき、この困難な課題に対して、今後社会の中で一人ひとりの市民がなすようなアプローチの可能性が見えてくるだろう。

博士学位取得者論文要旨 (2007年度)

楊 紅雲

東映映画半世紀(1951-2001)—TVに対応した映画経営を中心に

中国において、テレビの初放送は1958年9月2日に北京テレビ局(BTV)によって行われた。しかしテレビが産業として発展していくには、文化大革命の終焉を待たなければならなかった。1978年、改革開放政策が実施され、テレビ局も増設される中、全国のテレビドラマ本数は1986年までに1500本にのぼり、テレビ普及率は1999年6月に89.01%に達した。テレビの普及に伴い、映画産業には逆に「斜陽化」現象が現れ、映画会社の経営状況が悪化する一方であった。大手会社は概ね20社近くあるが、経営のバランスをうまくとれている会社は殆んどない。

映画界は再生の対応策が期待される中で、政府が様々な施策を講じてきたにもかかわらず、映画産業は急速に低迷していった。そこで、映画会社は製作体制上の更なる改革を進め、公益効果を唱える統制経済から投入資金の回収を重視する市場経済へと転換していった。即ち従来の国営企業としての映画会社は次々と株式会社になり、映画経営の新しいメカニズムや理念が積極的に導入されるようになった。しかし、統制体制に慣れていた映画会社の経営者は自由競争の市場に放り出され、如何にしてその経営基盤を築いていくべきなのか、戸惑うばかりである。それに加え、WTOへの加入によって、中国映画は今後どのようにして世界市場において優位に立つかを考えなければならなくなった。いまや、中国映画は企画、製作から配給、興行まで変わりつつあり、新たな動きが期待される。その際、ハリウッドや日本の映画界が経験したことは貴重な参考になるであろう。とくに巨大資本に頼るハリウッド映画よりも、複数の映画会社それぞれの自力による自由競争の展開、苦戦していた日本映画界の経験、その成功例、試行錯誤などが、市場経済に押し出されたばかりの多くの中国映画会社にとっては、現実的な模範となるように思われる。

かつての日本映画界も似たような不景気があった。1953年のテレビ初放送以降、1950年代後半、特に1960年代からは、テレビ産業の急成長と映画産業のめざましい斜陽化へとつながった。テレビによる打撃を受け、映画会社は存亡の危機に陥り、再生の対策を探求することが最も重要な課題となった。大手映画会社の中、新東宝は早くも1961年に倒産した。日活と大映は経営状況が崩れ、1971年末にそれぞれ半倒産、倒産を余儀なくされた。松竹のホーム・ドラマ路線と東宝のサラリーマン路線は、同じようなドラマを無料でブラウン管に送り出すテレビに大きく影響された。その中、テレビの全国初放送より2年ほど早く設立した東映だけは、テレビの動きに敏感であった。テレビの出現とほぼ同時にテレビ提携策を考案し、テレビとの一元的経営を図った。その後もほとんど10年ごとに自己否定的に時代との接点を見出し、その製作路線を変えていった。これらの自己否定は一つの原点を離れることはなかった、即ち東映は一貫してTVに対応した映画経営を営んできたのである。実際、今になって、旧来からの製作、配給、興行システム、撮影所組織を維持し、旧態の製作会社としてその自社系列を守ることが出来たのは、東映一社のみとなった。故に東映は自作映画によって産業的に勝ち抜いた唯一の映画会社と言える。

しかし、これまでに東映や各映画に関する書籍はたくさんあるが、東映という映画会社は一貫してテレビに対応した映画方策を講じ、それによって独自の活路を探り当てたことに関する実証研究がほとんどなかった。

本研究は東映の半世紀(1951-2001)にわたる映画製作路線、或いは映画産業斜陽化におけるこれまでの東映映画経営史を対象とし、東映の提供資料と筆者による多くのインタビューを含む大量の一次資料に基づき、歴史的な観点から東映の映画経営を実証的に考察する。そこに作品の企画、製作、配給、興行といった基本要素がどのように配置、組み合わせられていたかを解明し、東映の半世紀を通じた戦後の日本映画史を分析した上で、現在の中国映画産業活性化のための示唆を提示する。

本論文では、日本映画市場において支配的な位置を保ち続けた東映のTV対応策を、1950年代の提携策(時代劇時代)、1960年代の対抗策前期(任侠映画時代)、1970年代の対抗策後期(実録映画時代)、1980年代の共存策及び1990年代以後の混迷時代と五つの時期に分けて論述を進めていく。具体的には8つの章から構成され、以下のような内容となっている。

第1章の序では、本研究の背景、目的、方法及び構成について概説する。

第2章においては1953年まで、即ちTV出現する前の東映を考察する。この作業はその後の東映という映画会社の全体図及び社風、特徴を解明する上でも必須であり、本研究全体の下地に等しい。先ず、旧満映から帰ってきた映画人に仕事を与えるために創られた会社—東映の前身—東横映画、即ち東映前史について考察し、東映は映画製作からスタートした会社という史実の重要性を示す。次に、東映映画経営の立脚点、つまり初期の映画企画、製作、配給、興行の実態を把握し、東映の性格形成について認識する。それから、テレビの出現及び映画界の反応、東映の態度を述べ、TV出現前の東映映画経営を纏める。これらはその後の東映TV対応策の背景となる。

第3章は1953年から1962年までの日本映画界、テレビ産業の状況を踏まえた上で、東映のTV提携策を具体的に検討する。即ち後の男性向け娯楽映画路線の源流となる東映時代劇、及びテレビを利用した児童向け「新娯楽版」映画、東映動画(株)の設立及びテレビ事業への資本参加などといった東映TV提携策とその成功実績を考察し、映画とテレビの「一元的経営」を考えた東映経営陣の方針について分析する。並びに、同じ時期の他社のTVに対する認識を概観し、東映の他社にない経営理念を明らかにする。そしてTV産業の急成長に注目し、映画産業斜陽化の兆しを明示する。最後に東映TV提携策の本質を纏める。

第4章においては、1962年から1973年までの東映TV対抗策(前期)について考察し、ほぼ10年間続けた任侠映画路線の企画方針、製作システム、配給系統、興行特徴及び経営者の考えなどを具体的に分析、実証する。まず、東映はそれまでに推し進めていたTV提携の維持困難と転換期の問題点を提示し、任侠映画路線が定着するまでの試行錯誤を再検討する。次に任侠映画の隆盛期の東映映画実態を分析し、それが成り立つシステムの、人的な原因を解明する。更にこの時期における松竹、東宝、日活、大映の製作路線と比較し、東映は他社との相違点を明らかにする。最後に任侠映画路線の本質と産業性を論証する。

第5章では、1973年から1979年までの東映TV対抗策(後期)について考察し、映画産業斜陽化が進む中、東映は実録映画路線によって10年近く隆盛を保った原因を究明する。任侠映画路線の維持困難と試行錯誤に触れた上で、実録映画路線の定着まで辿る。そし

博士学位取得者論文要旨 (2007 年度)

て実録映画の隆盛期の東映映画実態を分析し、それが成り立つシステムの、人的な原因を解明する。また、この時期における東映と他社との相違点を明らかにする。ここで松竹、東宝、日活、大映のそれぞれの製作路線を考察する。章末に東映実録映画路線の本質と産業性を論証する。

第6章においては、1980年代に入ってからTV共存策を模索する東映映画を客観視し、新たな東映スタイルを考える。前半では主流映画製作路線化の困難を言及し、その要因を分析する。これを前提に、エロ・グロ映画を中心に製作してきた東映が「善良性感度」映画へ復帰し、様々な試行錯誤を行った実績について考察する。具体的には文芸大作、軍事映画、アニメーション作品及びやくざ映画への“末練”から作られた作品を考察する。後半では多彩な時代を迎えた1990年代の製作体制を踏まえて、東映の困難を提示する。主にTV共存策の根幹であるアニメーションの製作実態を分析し、パラメーターが要求される新しい時代における東映映像関連事業の繁栄ぶりを纏める。

第7章は、東映の弱点と責任を指摘し、改善策への助言を提示する。これまでの論述に基づき、1990年代の日本映画全体図を構成する上で、東映の反省点、例えば経営陣の問題点、人材の空洞化などを具体的に指摘する。その改善策として経営陣の刷新、人材の育成、企画の精選、動画部門の強化などを提案する。

第8章「結び」においては、各章の考察に基づき、半世紀にわたる東映映画経営史を概論し、その全体図を構成する。主に東映が文化的、産業的な領域で成功を取めた軌跡を辿る上で、多メディアが共存する新しい映像時代における東映(映画会社として)のあるべき姿勢を検討し、今後への期待を寄せる。

最後に、筆者が本研究のために行われてきた多くのインタビューから抜粋したものを纏め、「インタビュー資料」として巻末に付録し、これら貴重な情報を他の研究者に公表することによって映画研究に貢献することが、本研究のもう一つの目的であることを付け加えたい。



■日時:2008年10月18日午前9時45分~12時15分
 ■会場:文系総合館カンファレンスホール・オープンホール

招待講演者発表要旨

環境と自然そして人——日中比較の角度から

王 敏(法政大学教授)

遣唐留学生・阿倍仲麻呂が長安で詠った。

「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも」(『古今集』)

これは自然情景の描写である。まず、森に覆われた当時の三笠山を想像したい。そして神奈^{かむな}備^びの深山に神々しい月のかかっているという思いを感じ取ってあげたい。ふるさとから連想されたのは人々の談笑や言葉の記憶でなく、自然の情景であるところに、仲麻呂は日本人たる面目が現れたと思っている。

それはどういうことか。日本人のふるさと像は自然志向と関係していると考えられる。日本の歌は自然の情景を歌ったものが多い。唱歌「ふるさと」の歌詞を見てみよう。

- 一、兔追いし彼の山 小鮒釣りし彼の川
夢は今も廻りて 忘れ難き故郷(ふるさと)
- 二、いかにいます父母 つつが無しや友がき
雨に風につけても 思いいずる故郷
- 三、志を果たして 何時の日にか帰らん
山は青き故郷 水は清き故郷

この唱歌は日本人に共有される「自然志向」を教えているようである。「ふるさと」から連想されてくる自然の情景が描かれている。子どものころ、両親、兄弟姉妹と一緒に歩いた思い出も、友と遊んだ思い出もすべて自然情景と重なっている。自然情景に包まれて懐かしさが胸に迫ってくる。この歌詞を歌ううちに、思い出を超えて「彼の山」「彼の川」に実際に踏み込んでいっているような一体感が躊躇なく生まれることは疑いえない。多くの日本人がこの歌を覚えて愛唱歌としているのは日本人の心情に合致しているからに違いない。望郷のこころを満足させる基本的な要素があるからであろう。この歌ほど「自然志向」の共有を文化にしている実態を物語るものはない。

宮沢賢治の作品も理屈でない自然との一体感が基調になっている。そこからは特に科学的思考による環境意識を読み取ることができると思われる。人間関係以外の「関係性」の存在を気遣わせてくれるはずだ。賢治も含めて日本文化の根底にある自然融合感を中国古典にある「自然無為」の考え方と比較し、日中の現在におけるにおける環境意識の相違を考えてみたい。

略歴:1954年(中国・河北省)生。大連外国語大学卒、四川外国語学院大学院修了。国費留学生として来日、お茶の水大学人文科学博士号取得。日本ペンクラブ国際委員等歴任。

著書:『宮沢賢治・中国に翔ける思い』(岩波書店)、『花が語る中国の心』(中公新書)、『日本と中国 相互誤解の構造』(中公新書) 他多数。



言語文化フォーラム 2008

名誉(平成19年度博論提出優良)修了生発表要

山本 幸一 (愛知教育大学教育学部附属高等学校教諭)

メトニミーと成立条件

本発表の目的は、従来の研究によるメトニミーの定義が、成立条件となっていないことを指摘し、メトニミーの成立を過不足なく説明する定義を提案することである。

一般によく知られているメトニミーの定義は(1)のようなものである。

(1) 定義: 「隣接性 (contiguity) による意味拡張」

「文字通りの意味」をソース、「意図された意味」をターゲットと呼べば、メトニミーの意味拡張を「ソース → ターゲット」と示すことができ、(2)のように例を示すことができる。

(2) 例 : 赤頭巾がやって来た。[赤頭巾(着用物)→女の子(主体)]

先行研究を見てみよう。従来の分析は、次の A, B に大別することができる。

A. 「隣接性による意味拡張」とする分析

佐藤(1992[=1978])、瀬戸(1997a, 1997b)等の分析では、「あるもの A を、別のもの B の名前で表す比喻」として「隣接性 (contiguity) による意味拡張」と定義している。ソースとターゲットの関係である「隣接性」は「外界における近さ」または「概念的近さ」を指している。そして、この「近さ」については、「部分→全体」、「着用物→主体」、「道具→使用者」というように、代表的な型に分類し、実例を添えて示されている。

B. 「同一概念領域内での意味拡張」とする分析

Group μ (1970)、Lakoff (1987)等の分析では、概ね「同一概念領域内での意味拡張」と定義している。ソースとターゲットが占める位置としての「概念領域」を問題にしており、この「概念領域」内にある2要素は「概念的近さ」の条件を満たすことになる。代表的な型に分類するのではなく、「同一概念領域内」とすることで、「概念的近さ」についての規定がなされている。

以上見た、「隣接性による意味拡張」と「同一概念領域内での意味拡張」の分析のいずれも、メトニミーの成立を過不足なく説明できるわけではないと本発表では主張する。

まず、「隣接性による意味拡張」について見てみよう。

(3) *服{ズボン/靴下/靴}がやって来た。

[着用物→主体]

(4) 赤ずきんがやって来た。

[着用物→主体]

(5) その靴下、こちらに來なさい。

[着用物→主体]

(ある素足の集団の中で靴下をはいている1人を指し示して)

(3)-(5)から、同じ[着用物→主体]という「隣接性」を満たすだけでは、成立条件とはなり得ないことが分かる。

次に「同一概念領域内での意味拡張」について見てみよう。確かに、メトニミー(6)(7)の概念領域は[]内のように示すことができ、「同一概念領域内」であるため、メトニミーが成立していると言える。

(6) カツドンが食い逃げした。

[概念領域: 食堂での料理の注文]

(7) 胆嚢が手術だ。

[概念領域: 病院での病気の治療]

しかし、(8)(9)が示しているように、「同一概念領域」にあるからと言って成立条件になるわけではない。

(8) *ノート→鉛筆、*鉛筆→消しゴム、*消しゴム→下敷き

[概念領域: 文房具]

(9) *東京→横浜、*大阪→神戸、*京都→奈良

[概念領域: 日本の都市]

最後に、(10)-(12)を見てみよう。(10)のメトニミーが成立するにもかかわらず、(11)(12)は成立しない。

(11)ではソースとターゲットが逆になっている。(12)ではソースとターゲットは全く同じである。

(10) ワシントン(米国政府)とモスクワ(ロシア政府)の交渉

(11) *私が訪れたいのは米国政府(ワシントン)だ。

(12) *訪米中の文部大臣は、1日目はメトロポリタン美術館を訪れ、2日目にはワシントン(米国政府)を訪れる予定である。

(11)(12)が成立しない理由は、先行研究では説明できない。本発表では、メトニミーの定義を、「識別特徴」と「識別特徴」という概念を用いて説明を試みる。

在校生へのメッセージ

このたび、名誉修了生を賜り、有り難く存じております。博士論文作成に向けて懇切丁寧なご指導を下さった留学生センター及び大学院国際言語文化研究科教授の初山洋介先生、そして、博論審査をして頂いた鹿島央先生、李熊澤先生、町田健先生、ご教示や励ましを頂いた鷺見幸美先生、先生方に心より御礼申し上げます。また、名古屋大学大学院生の皆さん、及び、名古屋大学でお世話になった皆様に、心より御礼申し上げます。

言語文化フォーラム 2008

山田 創平 (厚生労働省所管公益法人(財)エイズ予防財団研究員)

東アジア地域における HIV 感染対策の現状と課題

国際連合エイズ合同計画(UNAIDS: Joint United Nations Programme on HIV/AIDS)は2008年3月に“Redefining Aids in Asia: Crafting an Effective Response”(Commissions on AIDS in Asia, Oxford University Press)と題するレポートを発表した。そこでは、近年アジア全域では新規感染例に占めるMSM(Men who have Sex with Men)の割合は10%~20%程度にとどまっているが、2020年にはその割合が50%を大きく超えるであろうと予測した上で、そのようなアジアにおけるHIV感染の深刻な状況を導く大きな原因がMSM・IDU(Injection Drug Users:薬物使用者)・セックスワーカーなどHIV感染に脆弱な人々に対する社会の差別や偏見であると指摘している。その上で、そのような文化的状況を踏まえた施策の執行や、それを導く政治的リーダーシップ、また地域社会を構成する「行政」「専門職者」「コミュニティ」といった各セクター間での緻密な合意形成が必要であると指摘している。本講演では、このようなUNAIDSの指摘を、具体例を通して検討したい。紹介される事例は、日本での厚生労働科学研究費を基盤としたHIV感染対策と、中華人民共和国衛生部が日本の支援により実施しているHIV感染予防事業である。

私は4年前より、厚生労働科学研究費補助金を活用しつつ地域を基盤としたHIV感染対策研究(エイズ対策研究事業)に従事している。現在、研究班は仙台・東京・名古屋・大阪・福岡・那覇においてHIV感染対策を展開し、その効果を評価すべく研究を実施している。当該研究班においては、UNAIDSが指摘するところの「地域を基盤とし、地域社会全体を包摂した施策の重要性」が早い段階から意識され、その実践が模索されてきた。講演では、現在までに研究班が執行してきたHIV感染対策事業の研究成果と今後の課題を整理したい。日本では、HIV感染が未だ収束をみておらず、新規HIV陽性報告数は毎年過去最高を更新し続けている。今後、今まで以上にHIV感染対策を加速させ、課題解決型の合意形成や、実効性のある施策が執行されなければならない。だがこれらの実現には時間が必要であり、そのためにも現在のような有期研究費による感染対策から、行政府の事業費を主体とした感染対策へと予算主体を移行させることで、HIV感染対策の持続可能性を担保する必要がある。

一方で私は昨年、中華人民共和国政府衛生部からの招聘により甘肅省蘭州市・天水市、北京市、上海市を訪れ、HIV感染対策に関する技術協力を行った。この内、甘肅省蘭州市・天水市では現在、日本の支援によりHIV感染対策事業が実施されている。当事業では、現在までに蓄積されてきた日本のHIV感染対策研究による研究成果が用いられている。そこでは、MSMに特化した健康教育や予防介入事業が行われ、またコミュニティを基盤とした施策の執行が目指されるなど、先進的な試みがなされている。中華人民共和国においては、HIV感染が広まりはじめた当初、セックスワーカーやIDUへの対策が課題となったが、UNAIDSが指摘するように今後はMSMがHIV感染に対して最も脆弱な立場になると予測されている。だが中華人民共和国でのMSMに対するHIV感染対策は、日本の支援による甘肅省での事例を嚆矢として緒に就いたばかりであり、今後速やかな体制の整備が必要である。だが中華人民共和国においては、MSMに対するHIV感染対策に対して政府が独自に予算を執行する段階には未だ至っていない。

以上、日本と中華人民共和国でのHIV感染対策を通して見えてくる共通の課題は、社会がMSMをはじめとした、HIV感染に脆弱な人々に対して持つ偏見をどのように乗り越えるかということである。この場合の「偏見を乗り越える」ということは「社会が、MSMをはじめとしたHIV感染に脆弱な人々に特化した施策に対して予算を割り、集中的に事業を執行する」ということと同義である。

日本では現在、1日あたり4人の新規HIV陽性報告があり、そのほとんど全てがMSMの感染事例である。MSMに特化した十分な施策の執行が必要であるが、様々な社会的、文化的状況や偏見がその実現を阻むことも予測される。“MSM”は行動に対する名付けであってアイデンティティではないため人口層として顕在化しにくいのが、厚生労働省研究班により成人男性人口の3%~5%であると推定されている。MSMに対するHIV感染対策は本来この人口規模に見合ったものでなければならないが、現状はそのような理想から大きく乖離している。HIV感染対策に対する広く市民社会全体を巻き込んだ合意の形成が急がれる。

在校生へのメッセージ

私は今、大阪の繁華街で公的研究費によるAIDS予防研究に携っています。日々クライアントと接し研究を進める中で、本当に様々な事が起こります。研究や学問の限界も感じます。しかしそんな時、先達の研究が状況を打開し私を励まします。「常に現場にあること」それが私の研究スタイルです。研究には様々なスタイルがあります。在校生の皆さんがそれぞれの生き方に根ざした研究スタイルを見出され追求されることを願っています。

言語文化フォーラム 2008

名誉(平成19年度業績優良)修士生発表要旨

大津 友美氏 (東京外国語大学講師)

親しさと会話行動との関わりについて

1. はじめに

人は親しい対人関係を必要とする。そのため、初対面の相手と話すときには、次のコミュニケーションの機会に繋がるように、相手から好意的な評価を受けようとして、すでに親しい関係を築いている友人と話するときには、その親しさを維持し、発展させようとする。人はそのための手段として、さまざまな言語・非言語手段を用いる。筆者は、博士後期課程在学中から一貫して、このような、親しさと会話行動との関わりについて興味を持ち続けてきた。その流れで、2007年度には、次の二種類の研究を行った。一つ目は、日本人学生と留学生の異文化間初対面会話において、両者の親密化を促進・阻害する要因の解明を目指した研究である。二つ目は、すでに親しい関係にある友人同士の会話の特徴、とりわけ冗談で話すスタイルを変える現象に注目した研究である。本講演では、これら二つの研究を紹介したい。

また、上述の研究の流れからは外れるが、2007年度には、日本語教師としての授業能力向上を目指し、作文クラスでの Collaborative Writing の試みも行ったので、それについても簡単に紹介する。

2. 初対面状況での会話について—日本人学生と留学生の親密化に関わる要因

親密な関係は実際のコミュニケーションの積み重ねによって形成されるものであり、初対面の会話の中で相手から好意的な評価を受ければ次のコミュニケーションの機会に繋がるであろうし、非好意的に評価されればそれきりとなってしまいかもしれない。筆者は、留学生と日本人学生の会話において、両者の親密化を促進・阻害する要因を明らかにすることを目指しており、そのためには、初対面会話において好意・非好意に関わる要因を検討する必要があると考えた。そこで、留学生(オーストラリア人留学生)と日本人学生の実際の初対面会話の録音の後で、会話参加者自身に録音を聞いてもらい、会話時の意識を調べた。

会話参加者のコメントの中から好意的評価と非好意的評価を含むものを選び、それらをいくつかの類型に分け、親密化の促進要因と阻害要因を抽出した。その結果、促進要因については、留学生の側にも日本人学生の側にも「会話進行のための協力」と「会話相手への関心表示」の2つが共通して見られることが分かった。阻害要因については、留学生と日本人では異なる結果が得られ、日本人側の要因は「会話進行に非協力的な態度」、「会話相手への無関心」、「避けたい話題の選択」の3つで、留学生側の要因は「会話進行上の問題を解決する際の、日本人とは異なるふるまい」と「ほめの欠如」の2つであった。

在校生へのメッセージ

3. 親しい友人同士の会話の特徴について—冗談としてのスタイルシフトの場合

友人同士の会話には、親しい関係を維持し、発展させるための会話行動が見られる。そのような行動の一つに、冗談を言うことがある。冗談には様々な種類のものがあるが、その中で筆者が注目したのはスピーチスタイルのシフトによる冗談である。例えば、若い女性である会話参加者が、突然老人のような言葉遣いをしたり、男性ことばを使ったりして、相手の笑いを誘う。このようなスタイルシフトに注目して会話を分析した結果、第一に、会話において借り物スタイルへのシフトと丁寧体へのシフトの両方が冗談として行われるということが分かった。どちらのタイプのスタイルシフトも、話し手が当該の会話場面にはない要素(別人・他場面)を開き手にイメージさせることによって、発話にユーモラスな意味を付与する。第二に、このような冗談を相互作用中に実現するための、会話参加者間の協力の仕方が明らかになった。話し手は韻律操作や発話のタイミングによって聞き手の注意を引き、一方、相手の冗談に気付いた聞き手は、(1)笑いやコメント(2)模倣(3)共演(4)遊びとしての対立などで同調し、相手と面白みを共有していることを示す。

4. 日本語教師としての授業能力向上のための研究—Collaborative Writing の実践

Collaborative Writing とは、学習者がペアあるいはグループになり、一つのテキストを協働で完成させる学習法である。筆者は、上級作文クラスにおいて Collaborative Writing を実践し、活動中、どのような学びが起こっているのかを調査した。学習者間の話し合いを分析した結果、文章の様々な面について学習者同士で検討していることが分かった。学習者は「構成・内容をめぐる話し合い」を通して談話レベルの要素についてお互いの方法を見せ合い、さらに「アイデアの提示」と「文法・語彙をめぐる話し合い」を通して、互いを知識のリソースとして利用しあい、文法・語彙的な改善・洗練を行っていた。また学習者のコメントには「仲間と一緒に一つの文章を書くのは楽しかった」など肯定的なものも多く、情意面から見た利点もあると考えられるため、今後日本語教育において行う価値のある活動であると考えられる。

以上、2007年度の研究について簡単に紹介した。今後も引き続き、親しさと会話行動との関わりについて追究していきたい。また、日本語教師としての教育能力向上にも努めていきたい。

私にとって博士前期課程の2年間はとても楽しいものでした。仲間と気軽に研究の話ができたし、いろいろな研究分野の人がいたから、様々な観点からの意見がもらえることも貴重でした。後期課程に入ってからからは忙しくて、仲間とも簡単には会えなくなりましたが、多少無理してでも、仲間が集まる機会を定期的に持てばよかったと、今は思います。在学生の皆さん、仲間との会話を大切にしてください。

言語文化フォーラム 2008

山辺 省太（広島経済大学准教授）

修士論文から現在の研究へ

私は、20世紀アメリカ文学研究を大学院の修士課程の時から変わらず行ってきましたが、現在は主に、二つのトピックを中心に研究を進めています。一つは、博士論文で扱った20世紀アメリカ文学におけるアポカリプスの諸相であり、もう一つは、20世紀中葉の南部作家、フラナリー・オコナーの作家研究です。しかし、修士課程に入学した当初からこのような研究をしていた訳ではなく、大学院生活においていくつかの紆余曲折を経て、このような研究に落ち着きました。そのあたりの変容を振り返りながら、現在の私の研究を紹介させていただきたいと思います。おそらく、国際言語文化研究科の大学院生、特に修士課程の方は、当時の私と同じように研究対象がなかなか決まらず思い悩んでいる人も多いと思いますので。

現在の研究の出発点は、修士論文にあると思います。当時、大きな枠組みでしたが、アメリカ文学における「モダンとポストモダンの狭間のセンシビリティ」という仮題のもと、20世紀の主体の変容が文学においてどのように表わされているか、を考えようと思いました。メジャーなアメリカ作家をそこに当てはめようとしたのですが、当時のアメリカ文学の知識は乏しく、結局そのとき好きであったJ. D. サリンジャーという作家から、その問題を考えることにしました。元々、学部時代は哲学を専修していたこともあり、現代人の主体の様相ということに興味を持っていました。博士論文を除けば、一つの論文に最も多くの時間を割いたのが修士論文で、論文の書き方を身につけたのもやはり修士論文であったと思います。特に、モダンからポストモダンへの変化の中で主体の変容を考えると、そもそも主体を定義づけるものは何かということを考えました。そして、主体を定義づけるものの一つとして「死」に着目し、それを補助線にして論文を書き上げました。今回の発表の内容は「現在の研究」についてなので、あまり修士論文の話ばかりしてもよくないと思いますが、このトピックは今でも私の中に生き、現在の研究に何らかの形で反映されていると思います。というのは、20世紀アメリカ文学を研究対象とする研究者にとって、モダンからポストモダンへの時代的、思潮的変容というのは、避けて通れないトピックだと思うからです。

修士課程に進学してからも、私は主体の問題をポストモダンの作品から選んで考察しようと思いました。当初はポール・オースターという

作家を研究していましたが、修士論文の時のように、主体を規定するのは何かということ考えたとき、人間ではなく「神」の問題にも少し深く触れてみたいと思いました。これも、学部時代から、神の問題に触れる文学が好きであったからだと思います。結局、以前から愛着を持っていた、フラナリー・オコナーというアメリカ南部のカソリック作家を研究することになりました。研究の出発点として、「神は死んだ」といわれる20世紀、文学においてどのように神は表象されるのか、という問題を考えてみたいという素朴な思いがありました。カソリック作家と聞けば、おそらくこの世は神の祝福に満ちているとか、そういう説教臭い文学を連想されるかもしれませんが全く逆で、彼女はグロテスクで血も涙もない暴力的な世界を描きます。たとえば、とある一家が車で出かけたとき3人の脱獄囚に会い、赤ん坊を含めた家族全員が何事もなかったように撃ち殺されてしまう話といった、非常に血なまぐさいものが多いです。しかし、これがオコナー文学の魅力ですが、不思議とそれらの暴力的なストーリーを読んだあとに感じるの、魂の浄化と神の恩寵です。オコナーの小説を文学研究として扱おうとすると、いくつかの主題に注目しなければならないのですが、私が研究として論じようと思ったものの一つが暴力性です。オコナー本人は、神の啓示における暴力の必要性において、「(神の恩寵という) 真実は、かなりの犠牲を払ってでもわれわれが立ち戻るべき何か」であると言い、「登場人物たちの非常に硬い頭に神の恩寵の瞬間を受け入れさせるという点で、暴力は不思議な効力を持つ」と言います。少なくとも文学の世界において、オコナーはときには人を死に至らしめるような暴力を神の恩寵として描き、その恩寵による人間の救済を考えています。そして、神と暴力というトピックは、オコナーの文学世界の中心に位置していますが、これは同時にアメリカ文学の中心に位置するトピックでもあります。このことをもう少し広いパースペクティブで考えたとき、神の審判という暴力性を内在するアポカリプスの視点から、20世紀アメリカ文学における神性の問題を考えようと思いました。そこから博士論文の構想を練り上げ、それを現在も引き続き研究しています。当日の発表ではもう少しその内容についても触れたいと思います。

在校生へのメッセージ

恐らく、大学院生活は楽しいときもあり、またとても辛いときもあると思いますが、それぞれの目標に向かって頑張ってください。研究のことでいろいろ悩まれると思いますが、あまり考えすぎも体に良くないので気をつけてください。また、就職してから実感したのですが、大学院時代ほど勉強できる時間もないと思いますので、充実した大学院生活をおくられることを祈念いたします。

外部評価委員会報告

10

外部評価員

金崎春幸 (大阪大学言語文化研究科長)

(外部評価委員会委員長)

水谷修 (名古屋外国語大学学長)

坂井克彦 (中日新聞社常務取締役)

山内公明 (東海テレビ放送常務取締役)



外部評価委員会委員

前野みち子・飯野和夫・鈴木繁夫

飯田秀敏・大庭正春・村主幸一

小坂光一・長畑明利

司会 吉村正和 (国際言語文化研究科長)

■日時:2008年3月17日(月)

午後2:00~5:00

■会場:オープンホール(7階)

司会 本日は、国際言語文化研究科の外部評価にご参集いただきまして誠にありがとうございます。私は、国際言語文化研究科長の吉村と申します。

本日の予定でございますが、まず資料をご確認ください。すでに8種類の資料、「名古屋大学国際言語文化研究科研究科学生便覧」(平成19年度)、「未来へのプロフィール 第4号」、「名古屋大学国際言語文化研究科 プロフィール 2007」(椅子のデザインが入ったものです)、「国際言語文化研究科全学向け授業案内」(4月号、10月号)、各種指導要綱、平成19年度学生アンケート結果、全学教育関係資料を、外部評価委員の先生方にお送りしてあります。

委員の先生方にはあらかじめ眼を通していただいていますので、本日はおおむね国際言語文化研究科の(1)研究、(2)教育、(3)社会連携と国際交流、(4)全学教育の順でお話を伺っていききたいと思います。この議題に沿って進めていくつもりではありますが、お話の推移に従って4番目の議題が1番目に来たり2番目が5番目に来たりと、そういうことがあるかと思いますが、ご容赦願いたいと思います。

実は前回、国際言語文化研究科が外部評価委員会を開きましたのは7年前の2000年のことです。そのときはまだ言語文化部が存続しており、国際言語文化研究科が発足して間もない時期でありました。外部評価委員としましては、今回と同じく大阪大学言語文化部長の今井光規先生、日本ガイシの柴田昌治社長、中日新聞社の白井文吾社長、名古屋国際センターの堀内厚生理事長、この4人の方をお願いした経緯がございます。そのときも非常に参考になるご意見をいただきまして、それを基に私どもも研究教育の改善に取り組んだという記憶がございます。

本日も大変厳しい意見を承ることになると覚悟しておりますが、よろしく願いいたします。本日の進め方としましては、言ってみればご自由に各話題についてご意見をいただきつつ座談会的なかたちで話を進めていきたいと、このように思っております。よろしく願いいたします。

議題に入ります前に、先ほど申しましたようにこの研究科の沿革を簡単にご紹介いたします。国際言語文化研究科の出自といえますと、もともとは教養部外国語系列の教員たちが集結いたしまして総合言語センター、次に言語文化部になりました。大きく変わりましたのは、1998年

外部評価委員会報告

(平成10年)、ちょうど今から10年前に、独立研究科として国際言語文化研究科が立ち上がったときです。ですから本研究科は、主として外国語教育、および日本語教育を中心とする研究科でございまして、2003年度以降、高度専門職業人コースとメディアプロフェッショナルコースも新設されまして、現在に至っています。

その後、さらに大きな変化は2004年(平成16年)ですが、このときに名古屋大学は国立大学法人として発足いたしました。法人化以降の一番大きな変化は法人としてつねに評価が求められるようになったということです。それまでは文科省に設置申請をして、それで認可されると大体ことが済んでいたのですが、法人化以降は自己説明責任というかたちで、評価、評価ということで平成16年以降は毎年、評価に相当時間が取られておまして、どの大学も同じ状況だとは思いますが、本日の外部評価もその一環として行われているということでございます。

①

最初の話は国際言語文化研究科の研究ということですが、教員の研究状況、出版状況、論文数、科学研究費補助金などの採択状況等などのデータが、例えば「プロフィール 2007」というのをご覧いただけますでしょうか、こちらにリストが掲載されております。多くの出版物を我々は研究成果物として上げてはいるのですが、客観的資料といえますか、その評価ということでは、客観的な裏付けがないと研究の水準を維持していると判断されないというような厳しいことが言われておまして、必ずしもリストアップをすることだけで、こと足りるということではないわけです。

どの大学も評価という作業を前にして、本当に呻吟なさっていらっしゃると思っておりますが、まず委員長長の金崎先生からよろしく願います。

金崎委員長 いつもは評価されるほうなので難しいところですが、論文集や著書の数に関しては、特に増えているわけではありませんが、着実に成果を上げられている感じがいたします。しかし、さっきおっしゃったように評価という、客観的な評価というか受賞とかそういうものがないとあまり高く評価されないという状況です。

それから、外部資金に関してですが、科学研究費補助金についても非常に頑張ってやっているように思います。今にして思ったら、COEとかそういったかたちの外部資金というのが本来は求められるはずなのですが、そういった取り組みを何かやっていたらいいかなと思います。

司会 こちらの科学研究費補助金に関しましては、主として基盤研究、あるいは萌芽研究・若手研究などが多いんです。昨年度は申請率だけは100%を越しておまして、確実に全員が申請する措置は取っています。しかし、採択率がまだ50%に達してなくて、50%に達することが当面の目的になっております。だんだん採択率は上がってきているのですけれども、まだ

50%に達していないという状況でございます。ですから、採択率を50%に上げることで、それから、来年度に向けては基盤研究Cだけではなくて、基盤研究AあるいはBを申請するというところで、徐々に大型化する措置をとっています。

また、グローバルCOEに関しましては、本年度かなり作業を進めましたが、最終的にやはりもう1年準備すべきであると判断し、来年度に向けて鋭意努力中でございます。来年度には「異文化コミュニケーションのトポロジー」というタイトルで申請する予定です。

司会 水谷先生、いかがでしょうか。評価全体、あるいは今は研究が話題になっているのですが、評価全体で先生のご所見をお伺いしたいのですが。

水谷委員 資料を拝見してですね、本当によくやっていたらいいなと思えました。というのは、なかなか冒険はできませんし、道を探すというのは容易なことではない。従来からのいろいろな硬い枠、体制があつてですね、その中で光るものを作ろうという、それには時間がかかるだろうと思うのですね。今の、採択率の50%を目指すというようなやり方は立派なものだと思います。

ただ欲があるものですから、名古屋大学の国際言語文化研究科がほかと同じようにということよりも、もっと日本の学会をリードしていただく。そういう組織になってくださったらありがたいなあ、嬉しいなあという、そういうものがあるものですから、そういう欲から、観点から見ますと、お願いしたいことが多少はあるのです。

例えば、今の科研費に関連してはですね、吉村先生もおっしゃったように、基盤研究、若手・萌芽的なレベルの研究にとどまっていると、これはやはり損をすると思うのですね。だから突破口を作るのに、先ほどのお話では上へ徐々に上がっていくようなお話でしたけど、思い切って特定領域研究とか枠のはっきりしている、キャンペーンの効く枠がありますね。

司会 はい。

水谷委員 だから、特定領域研究ぐらいの、昔の特別推進研究、今もまだ特別推進研究は残ってますね。ああいうレベルのところへ切り込んでいくような。と申しますのは、一人一人の先生方の責任で進めていくということから、チーム全体で何かをやろうという雰囲気を作ると、そうしますと、一つ一つのものが出やすくなります。だから、その意味では、ちょっとふろしきを大きく広げた計画を少し時間をかけながらバンと打ち出すような企画を立ててくださった方がいいのではないかなあ。

組織全体でお祭り騒ぎをやりながらです。いろいろな問題はあると思うのですよ。負担はもういやだとかいろいろな問題が出てきますけれども、それでもやはり、日本の中での言語を基盤にした文化対応の研究・教育に関するリーダーシップを取るという方向でやっていただけたらありがたいなあと思います。

その方法はいろいろあると思うのですね。問題はどうかしたら道が開けるかということについての情報集めはちゃんとする必要がありますし、

外部評価委員会報告

人材的な戦略も用意しなければいけない。資料を拝見して思ったことの一つは、全学教育という重い荷物を背負って立つ。これは非常に重い荷物だけど、逆手に取ってこれを使って研究科だけではなくて、ほかの学部の人たちも動員して大きいプロジェクトを立てる。

工学部や農学部の人たちにも言語の教育と文化の教育について関心を持つと。最終的には、各学部の人たちは学生に対して英語で論文を書かせる機会というのは多いわけですね、今は。だから、そういう人たちの指導はしていらっしゃるわけですから、言語文化のほうの役割は、目標に向かう基盤についての部分は我々が責任を背負うけれども、それを明確にこういふかたちで考えるというような言い方で、全学の人を引っ張っていくという企画で用意すれば、特定領域研究レベル、特別推進研究レベルの案を作ることはそんなに難しくないだろうと思うのですね。

だから、どうせやらなければならないから、評価を受けるときに追われながらやるのは損ですから、追われるだけではなく攻めていくやり方。上手に計画を立てて、桶狭間を確実にやっていくような企画があったらいいかなというのを、資料を拝見しながら思いました。

司会 ありがとうございます。

中日新聞の坂井様、それから東海テレビの山内様は、大学の評価委員会に参加されるのは初めてでございますか。おそらく、企業文化と大学文化というのは、なかなか相互に理解できないところがあるかと思うのですね。本日、中日新聞様と東海テレビ様から参加していただきましたが、私どもが期待するのは、金崎先生と水谷先生は同じ大学文化の中にいらっしゃるのですが、逆に言えば、そういった文化とは違う文化、つまり企業文化の中にいらっしゃる方からのご意見というのは我々の気が付かない、何を言っていたいでも、ああ、そうか、というようにある種驚きのようなものを感じるかなという気がするのでね。

ですから、特に東海テレビ様は民間放送事業論で1コマですが参加していただいておりますし、中日新聞社様からもご協力いただいておりますので、そういう点で関係がないわけではございませんので、ぜひこの際に、大学の外から見たときの大学、あるいは研究科の姿についてご意見をいただければと思うわけです。

今は研究というのが話題になっていますが、評価一般でも結構でございますので、例えば企業における評価と大学における評価、企業において自己点検評価などはどういふようなかたちでされているのか、私どもも興味がありますので、ぜひ、ざっくばらんなお話をお伺いできればと思います。

それでは、坂井様からお願いします。

坂井委員 研究の評価についてですが、はっきり言ってですね、よく分かりません。研究の中身が良いか悪いかということとは分かりません。専門でもありませんし分からないのですけれども、ここで教えたり研究をすることによって給料をいただいているわけですから、それが

全部趣味の世界に入っているのではない。研究をなさっているのなら、その研究が何らかの影響をもたらさなければ意味がないのではないかというふうに思いますね。

そういう意味で、ここに出版状況のデータがありました、それ自体にも意味があると思うのですね。出したことによって何らかの影響をだれかに与えただろうということにおいて、出版されたということは大変すばらしいことだと思います。

ただ、僕はよく分かりませんが、これは出したと言ったら出せるものなのか、出版社側とかどこか、例えば研究科の中でそういう機関があつてですね、これは本にしてもいいよとかいけないうとかの判断をするものなのか、本人が出したいと言ったら勝手に出せるものなのか、その辺の出版に至るまでのバリアというか、チェックポイントがあるのかどうかですね。それが高ければ高いほどやはりその出版物はいい出版物であるというような、そういう評価を得るのであろうと僕は思うのですね。

その辺りがよく分からないので、出版件数がイコール研究の成果と言っているのかどうかということについては、ちょっと分からないところがあります。

名古屋大学出版会というのは割と全国でも有名な出版会ですよ。そこから出しているというのは、ちょうど前野先生がいらっしゃいますけれども、前野先生が執筆された『恋愛結婚の成立』というのはいい本だと名古屋大学出版会が認めたということだとすればですね、それはそれなりの効果であろうと。あるいはミネルヴァ書房とか日本評論社とか我々の知っているような出版社から出したというものは、それは評価されたということになるので、そうであるならばそれはなかなか立派なことではないかと私は思います。

ただ、出したから評価されるかということ、それはよく分かりません。実際、当社も出版物というのがあります。それをつまらないというか売れそうもないけれども出す場合もあるし、これは売れるぞと言って出す場合もある。これは両方ともちゃんと評価をして出すわけで、出すか否かについては相当な議論をするのです。ですから、そういったことが行われているかどうかということを知りたいなというのが一つです。

それから、出した本が、例えば理系系、特に医学部なんかはそうですけども、いくつ、何回引用されたか、その本からですね。ほかの学者・研究者によってどれだけ引用されたかということが非常に大きな評価の基準になるのですけれども、そういうことがあるのかないのか。そういう引用されたものがあるとすればですね、そういったものは大変な評価になるのではないかと思います。

それから、外部でいろいろな賞がありますね。一番有名なものは文化勲章かもしれませんが、でも、当社の中日文化賞というのがありますし、東海テレビさんは東海テレビ文化賞がありますけれども、そういったところというのは研究者を対象としているわけですね。ですから、そう

外部評価委員会報告

いったところへ応募されるだけでもいいだろうという気がしますが、そういったところに応募されたことがあるかどうかということですね。

それから、先ほど申しましたような研究が何らかの影響を与えるという観点からするとですね、一番世の中の人に影響を与えやすいのは行政にも申すことですね。ですから、行政に対してそれが何かプラスに働いているのか、あるいは、行政とは何の関係もない研究だよと言われれば仕方がないですけれども、何らかの世の中に対する影響を行政なり政治なりに与えただろうかということも、もしあればそれはすばらしいと思います。

あとは、儲からないけれども、世の中には今、NPO がいっぱいありますよね。NPO なんかと協力して、例えば面白いなあと思った例として、久場嬉子さんの『介護・家事労働者の国際移動 エスニシティ・ジェンダー・ケア労働の交差』があります。こういったものをただ本に書くだけではなくて、実際に行動されているのかどうかですね、そういうこと等々を考えながらお聞きしました。

司会 ありがとうございます。

出版物は、これは出版社によって変わると思うのですが、私が知っているかぎりは、最近の出版事情の厳しさから考えますと安易に出版はされません。そのバリアたるや、おそらく1冊の本が出版社の命運をかけるぐらいの意気込みで、どの出版会あるいは出版社も出版にかかわっている。これは本当に生き残りの戦略といえますかね、そういう非常に厳しいスクリーニングが行われていると私は思っております。

ですから、出版にまでこぎ着けているということは、相当なバリアをクリアしているというふうには思うのです。しかし、これまで、先ほど申しましたが、法人評価等ではですね、これは必ず客観的な評価基準がなければ評価されない。つまり、10年以上にわたる研究成果をまとめて一つの本として著書として出す場合がありますが、そういった客観的な資料がないものは評価はされない、そういう状況でございます。

それはある種、先ほどの引用数の問題もございしますが、理系のいわゆる評価基準というものが中心を占めているということがあるかと思うのです。特に名古屋大学は理系が中心となっていて、例えば15件の世界水準の研究があるとしますと、そのうちの14件ほどが理系に属するということがあります。そのうちの1件が文系の研究です。ですから、世界水準という評価基準そのものが理系を基準とした評価基準でございまして、なかなか文系の研究成果というのは十分に評価されていないのではないかと、というのが私の個人的な見解でございます。

水谷委員 座談会的にということですから申し上げます。今の吉村先生のご指摘が、実は日本の科学研究の中ですごく問題になっているんですね。科学技術基本法というのがずいぶん前にできましてけど、その条文の冒頭のところにですね、「科学の研究を進めなければならない」という文言の中に、「ただし、純粋な人文研究を除く」というのが入っています。そのあ

と、いろいろ具体的な実行の段階では変わってきているのですが、その基本法自体はそのままなのですね。

だから、先ほどのどれだけの人が論文が引用されたかというような規則が通用する理系の基本法則がいまだに消えていないのです。ある意味では、人文系の研究というのは量の問題だけではなくて、質の問題を追及する。非常に特殊な規制の問題も負わざるを得ないということがあるわけです。

そうすると、そういった学術のレベルの中心にあって、固まっている部分のやり方だけでいけば、不利な条件ではないか。しかしそれでいくと、例えば今の安全・安心の問題を解決するためにも、実は人間の生命観とか社会意識といったようなものを問題にできない状況で進んでいると。それを解決しなければ、継続性のある人間の幸せというのは追求できない。そのためには、人文系の研究というのはすごく大事で、それを成果として認めさせるための方法を見つけなければいけないのです。それに新聞や放送のメディアが何かうまく結び付かないかなあと、思うのです。

例えば、ここでなさっているような研究の成果が個別にある程度積み重ねを作り上げていって、その結果としてある実績ができたというような方法が生まれてくれば、それは、たぶん科学技術基本法を変えさせる基にもなるのではないかなあと、思うのです。だから、その意味では、僕はせっかくこうして来てくださるのだから、新聞報道の場合もPR的な側面だけでなく、研究そのものともかかわると思うのですが、それについて力を貸していただける状況が生まれればいいなと思ってお話を伺ってました。

司会 ありがとうございます。

飯野委員 私たちの部局の出版物の中で、賞を取ったものとか大きな新聞の書評に載っているものとかがありますよね。

前野委員 ええ、あります。これは今年度は、大阪大学の金崎先生の先ほどおっしゃった研究の現況調査表のことだと思うのですが、独法化以来4年間の研究・教育についてどれだけ水準が上がってきたかというようなことを調査し、報告書のようなかたちで調査表というのを書く時期に当たっています。それが次期の中期計画、中期目標につながるかたちでその時期の大学の予算も決まってくるというようなシビアな資料になっていくわけです。

研究に関しましては、S、SSということで、うちの研究科からはSというように付けられるものを12点出すことになっています。それに関しては、一応、本部の評価委員会ではこれはこの基準でOKというような審査を受けた結果が12点になったということなのですが、そこで挙げられている著書、そして研究論文に関しては、書評が出ているもの、それから、賞を取っているものが3点です。それは研究というように申しましても、純粋に研究の評価と社会貢献という評価と二つの基準になっていまして、社会評価に属するものが3点、残り9点が研究なのですけれども、客観的な資料というふうに言われる

外部評価委員会報告

ものが付いて業績が優れているということが証明されているという、そういうものです。

ただ、今、吉村先生がおっしゃったように、こういう客観的な資料というのは人文系の研究者にとって果たしてそれが本当に客観的といえるのかどうかというようなことも少し疑問を持つようなものもあります。はっきりと学会賞を取っているとかそういうかたちで、これは明らかにすばらしい研究というようなものだけではなくて、そういうSやSSに入らなかったものでも、やはり人文系の研究として皆さんが力を注いでこられた成果が上がっているのではないかとというふうに評価担当としては、つまり、選に漏れたものでも近年、研究が活発になってきているなどという状況は、自画自賛ではなくて客観的に言えるのではないかと考えています。

それで、この成果に関しては、特に私たちの研究科とはかく文学研究科と競合するようなかたちのものだけでは生き残っていけないということで、先ほど吉村先生が触れましたけれども、グローバルCOEにも今年度から計画を進めました。本部からは、今年度出してもいいけれども、もう1年実力をもっと上乗せして充実したかたちで出してはどうかというコメントをいただいて、「異文化コミュニケーションのトポロジー」として来年度に出すことにしました。これは、水谷先生から先ほどいろいろ示唆していただいた中であつたようなかたちで、私たちの全学教育の語学を担当しているという面をかなり生かしながら、日本語研究・日本語教育で実績を上げてきているという、そこのところも生かしながら教育と研究の拠点として3本の柱を作りました。

一つは日本語教育・日本語研究を中心とする語学教育で、それからもう一つが、これは吉村先生がずっとこのところ専門でやっていらっしゃる翻訳に関するもので、翻訳を介した異文化コミュニケーションということで、これは文化翻訳というかたちで、単に私たちがいろいろな外国の本を翻訳するというだけではなくて、文化自体の翻訳というその層を、アスペクトを中心に一つの柱を立てました。

それから、もう一つがかなり身体文化的なものと言語とかかわりというような新しい側面に焦点を当てまして、その3本柱で学際的・領域横断的な研究に焦点を当てたものをこれから研究科としてもアピールしていこうということで、新しく私たちが方針として中期目標、中期計画にも書き込んでいるところを少し外見を良くして、COEにもチャレンジしてみようということをやっております。

司会 それでは、山内様、お願いいたします。

山内委員 いただいた資料だけでこの研究科全体の外部評価というのは、素人から見ると困難で、特に最初の項目の研究であるとか論文であるとかそういうところを評価する尺度というのが非常にはっきりしないとか、素人なのでどう評価していいかわからないというところがあります。

今、急に思ったのですけれども、やはり我々、メディアから見ると先生方がいかに社会に向けてアピールするかというときに、新聞も含めて

ですが何らかのインタビューにお答えいただいたことがあるかないか、というのは客観的に我々からするときの評価につながると思うのです。

名古屋大学でも社会的な事件の起きるたびに何人も先生方にインタビューしています。それが国際言語文化研究科では今まで実績がどれくらいあるのか。新聞で談話を発表するというところで、論文ではないですよ。談話を発表したのがどれくらいあるのかということをやまずもって知りたいという気がします。

そして、本題へ戻ります。

国際言語文化研究科という名前を聞いたときに、僕は実は一昨年、メディアプロフェッショナルコースの後期授業におじゃましたのですけれども、メディアと国際言語文化という名前がピシッと合わなかったのですね。

今回これを読ませていただいて一番に思いましたのは、要するに、この国際言語文化研究科というのは学術なり教授なり専門技術者らを主に養成するのが目的なのか、それ以外に、いわゆるメディアなんかはそうなのですけれども、専門知識を持ったプロフェッショナルを養成し、それを企業に送り出すのが目的なのかという点です。まずタイトルから入りますが、国際言語文化研究科という名称をお伺いしたときに全く分からなかった。設置後10年ということなのでなかなか変えることは難しいでしょうけども、ちょっと研究科のタイトルが古いのではないかと。

そう思っていましたら、今日、大阪大学言語文化研究科の先生がお見えになりましたが、大阪大学にも言語文化という同じような名前があるので、そういう意味では一朝一夕には大学院の名称を変えることは難しいんだなということも思いました。

それから、「未来へのプロフィール第4号」の最初のところに、前の研究科長さんが「国際言語文化研究科は生きる化石とならないように年々歳々脱皮を繰り返していかなければならない」と書いておられます。これは非常に正論であって、10年経っているなら10年経っているでいいのですけれども、研究者だけを育てるのではないならば、この研究科のタイトルを変える時期に、脱皮をする時期に来ているのではないかなあということ全体的に、内容はともかくとして感じました。

それから、論文の内容は全く分からないですけど、今、タイトルを読むと割と興味のあるタイトルのものがちらほらとあるのです。全体的には研究なので、ああ、これは僕には無理だな、というのがほとんどなのですが、ちらほらあるということは、僕が読んでもいいということは、出版社のほうもある程度の部数を計算しているのか、そういうことはチェックしていないのか、売れるから出版しているのか、それは全く度外視しているのか、その辺もちょっとお伺いしたいなあと思います。

司会 非常に面白いお話を伺いました。

最初の特にインタビューを受けているかどうかということですが、私なりに解釈しますと、インタビューを受けているかどうかということ

外部評価委員会報告

はその分野での社会的認知を受けているかどうかということですね。例えば政治学であればこの先生という、そういう社会的認知を我々のうちだれが受けているのかというご指摘だと思います。私どもの研究科のいったいだれがその専門領域で、新聞社、あるいは、放送からインタビューを受けているかという指摘は、非常に鋭いご指摘だったと思うのです。

それから、2番目のメディアと研究ですが、これは実に悩ましい問題でして、これはあとでまた議論させていただきます。

それから、最後の出版の問題に関しては、これは学術書というのはまず売れないことを前提としておりまして、ひと昔前は2,000部でした。2,000部が大体基準であると言われておりまして、再版というのはめったにない。初版2,000部が売れますと、もうその後は絶版というのがふつうでございます。でもそれは一昔前で、最近では500部から1,000部ぐらいがいいところかなあというような状況でございます。

一通り委員の先生方にお話を伺いまして、本当に貴重なご意見を4人の先生からいただきました。またあとで研究に戻るといたしまして、次は教育です。ただ、このかたちでやっておりますと4時間、5時間かかってしまいますが、ちょうど今、3時になるところですが、一息入れますか。

2

司会 準備をされている間に教育のところは少し入りたいと思いますが、これは、私どもが今年度（平成19年度）に、長い時間をかけまして取り組んだ課題です。平成19年4月に大学院新設置基準が施行されまして、新しいかたちの大学院の在り方が求められるようになりました。その中心的な問題は「教育の実質化」です。先ほどの法人評価でも客観的指標とかそういうものが話題になりましたが、教育についてもきちっとプロセス管理をしてくださいということです。新しい設置基準の施行を受けて、この研究科で10年間やってきました教育方針も重要な変革を求められました。

それは何かと申しますと、博士前期課程の場合には修士論文、あるいはコンテンツ制作というかたちもあるのですが、修士論文を書いて修了するわけですね。30単位プラス12単位、修士論文は12単位分と換算されまして、合計42単位で前期課程を修了するのですが、私どもの研究科では10年前から30単位プラス修士論文に代えて、指導教員が指定する授業を12単位取得することによって修了を認めてきました。12単位をもって修士論文に代えるという10年間の私どもの方針を変更しまして、修士論文を必ず学生に書かせる（あるいは、メディアの場合にはコンテンツ制作を認める）ことを決めたわけなんです。

それに伴いまして、私どもの指導要綱の全面的な整備をしたわけですね。その具体的な内容としては、複数指導教員制をきちっと明文化したということです。主指導教員と副指導教員が学生一人ひとりに対して定期的に指導を行うと

いうことですね。例えば、前期課程ですと2年間にわたり年10回指導を受けるとすれば、2年間で20回、その研究指導の結果が修士論文であり、後期課程ですと3年間で30回の研究指導の結果が、これが博士論文であるというようなかたちで、研究指導のプロセスを管理して、その都度教員のほうからも報告を受けることにしています。

それから、研究発表につきましても構想発表および中間発表、あるいは後期課程ですと、レフェリー付きの学術誌に論文が2本以上掲載されなければいけないことであるとか、あるいは予備審査等の細かい規定を決めまして指導に当たっています。

また、学生アンケートですが、これは平成17年度から実施してまして今年度は3年目でございます。毎年このアンケートをやっておりますが、ご覧いただきますと、「シラバスは履修計画を立てる上で役立ちましたか」、「授業が専門性を培う上で役立ちますか」、「研究指導を定期的に受けていますか」などの問いに対して、「そう思う」、「ややそう思う」というのが圧倒的な回答を示しています。また、「そうした研究指導に満足していますか」という問いに対しまして、相当なパーセンテージで満足しているという回答を得ているわけでございます。

ただ、「研究設備（図書室を含む）や、学生控室は充実していますか」と、こういう問い掛けには「やや不満足」というそういう回答がかなり増えてきております。奨学金、授業料免除等の問題に関してはネガティブな回答が増えております。現在の日本学生支援機構奨学金ですが、そこからの支援だけではなくて外部奨学金もたくさんございますが、なかなか学生全体に及ぶところにはまではいっていない。満足度が必ずしもあるわけではないということですね。

そして、「学生アンケートに関する所見」というのがございまして、「総括」というところをご覧いただきますと、教育環境と経済支援の不十分さが問題になっています。また、「セメスター制導入の希望が少なからずある」とありますが、来年度（平成20年度）からセメスター制を導入するということを決めております。

重要な問題提起として「ほとんどの不満は院生室に関するものが群を抜いており、特に、個人専用のスペース、机の要望は悲鳴に近いものがある」という点があります。この点は来年度早々に学生の意見を念頭において適切な措置をとるつもりでございます。

平成19年度の課程博士号の授与者数は14名であり、3年前に入学した学生数を分母にして課程博士授与者数を割った数値が50%以上になることが名古屋大学の基準となっています。国際言語文化研究科では平成18年度によくこの数値をクリアしたという経緯があり、具体的な博士学位論文の要旨も「プロフィール2007」に掲載されています。平成19年度も課程博士授与者数は14名ということで、実数は昨年度と変わらないのですが、3年前に入学した学生が若干多かったために50%を割っています。

外部評価委員会報告

それでは、教育ということについて、ご意見をいただきたいと思います。

金崎委員長 研究指導体制に関してですが、実によくやっています。特にこの指導要領、こういう形でやればいい。つまり、指導する側にも指導される側にも分かりやすい形です。たぶん、これは学生さんには別のかたちで要領が配られたと思いますけれども。

司会 学生用のバージョンもごさいます。

金崎委員長 これは教員用ということですね。

司会 はい、そうです。

金崎委員長 指導に関して今は月に一度というお話を伺いました。実際には非常にしんどいことです。やってみたら分かるのですけれども、言語学・言語教育系と文化系に分けると、文化系はどうしても、専門であればいいんですけどほとんど専門外、そうすると自分が勉強しないといけないので、その間本を読んで勉強しないといけないということで先生方も苦労されておりますけれども、その努力に感心しております。

それから、メディアプロフェッショナルコースに関しては、僕は全く分かりません。

司会 ありがとうございます。

学生指導、それにいかに時間を取り、かつ難しい仕事かということに関しましては全く先生からご指摘を受けました通りでございまして、特に言語学・言語教育系と文化系に分けることが適切かどうかは分かりませんが、入り口と出口がかなり安定している場合とそうでない場合、特に文化系の場合にはそういうことができます。文化系の場合には、例えばヨーロッパ研究といいますが、クロアチアから東ヨーロッパなどの研究をやりたいという学生が入ってくる場合もございまして、そういう場合に、ぴったり当てはまる研究者がいらないわけですね。それにもかかわらず、そういった学生の指導をせざるを得ないという状況もございまして。

特に文化系というのは細かく研究対象が分かれてきますので、例えば、5つの別々の研究課題を持つ5人の学生を1人の教員が指導に当たるといのは、本当に難しい局面に立つこととなります。今後これは大きな課題になっていくと思います。

それでは、水谷先生、よろしくお願ひします。



水谷委員 アンケートのことですが、学生からアンケートを取ることはすごく難しいことで、正直にちゃんと書いてくれるわけではない。だけど、今は評価制度の中で、いやでも何かこういう手続きを取らないとあれこれ言われますのでやらざるを得ないと思うんです。けれど、何か少し違ったかたちで学生の意見・考えを集める方法というのができないかなあと思うんですね。

こちらが何か用意しようと思っていることについてのヒントを出してもらおうということが少ないので、むしろ実は1年に1回ぐらいやるものではなくて、日常的な学生とのコミュニケーションの中で希望を吸い上げていく。しかも、長い時間を取ってはだめですから、1週間に1回、15分使って集めていくような方法をやったほうがいいのでは。そのことは大学自体が主張していくようにならないと、追われるだけかなわらない、工夫する必要があるだろうと、これは自分自身もそう思っています。

それから、国立大学で今、一番つらいところは、お金と設備の問題だと思うんですね。これを何とかして少しずつでも良くしないと、やはり今は幸い名古屋大学はいいと思うんですね。でも、やがてすぐ古くなりますから、10年先、15年先に壊れてくることを考えて、すぐに対策を用意する必要があると思うんですね。

特に最近の学生は豊かな生活に慣れていきますので、よほど悟って勉強に集中して、蛍の光と窓の雪で勉強するんだというような姿勢を求めることはできないと思うんですね。最低限、きれいなトイレと清潔感のある教室環境というのは、何とかして大学の執行部が頑張るといいますか、これは政治家の問題かもしれませんが、そういうことをやるためには、それこそ新聞や放送のようなメディアにしっかり応援してもらってやらないと、たぶんうまくいかないだろうと思います。

私立の場合は割合それにお金をかけていますから、環境に関する格差が開き始めています。だから、ある程度つましいということはむしろ必要なことだと僕は思うんですけど、限界を超えると学生がついてこれないと困りますので、ここは何らかの方法で声を大きくして、外に對

して主張してくださるとありがたい。それは筋を通して学内からだけでなく、社会の応援者を求めて何かやっていけたらいいなあと思っています。

司会 応援者といいますと。

水谷委員 新聞もそうだと思うのですが、そこから出発しないと世論になっていきませんから。例えば、新聞やテレビの方に学内を見学に来てもらってですね、記事にするのではなくて、こういうトイレの状況ですということを。それから、どこの私立でもいいですが、きれいだと言われている学校のトイレはどうだというのを先生方ご自身もちょっとご覧になったほうがいいと思うんですね。食堂環境もそうです。僕は汚

外部評価委員会報告

い貧しいところで育ちましたから、ピカピカするところは嫌ですけど、今の子どもたちはそうではありませんね。

だから、それでくじけるような学習意欲では困るんですけど、教えるのに邪魔になるのは困りますからね、その辺はちゃんと見ていくほうがいいかなという点です。国の金でやる場合には、増やせと言ってもだめだと言われたら文句を言えなくなるというのがありますけれどね。

それから、ちょっと気になったのですが、外国語能力基準について、TOEICが730、TOEFLが213と、これはどういう根拠なのですか。

長畑委員 これはTOEFLとTOEICが相関関係というのがあります、TOEICのほうには何点以上ですとかこう、こういう意味合いがあるということが書かれておりますので、それを判断しました。それから、全学教育のほうで検定試験による単位認定制度というのを英語でやっております、そこでの基準というものも参考にしている点数にしました。全く意味がないというわけではありませんけれども。

TOEFLは今、Internet-Basedというのに変わって、点数が全体的に低い数値で出ます。TOEFLの場合は大体550、昔のペーパーTOEFLだと550です。それが今は、換算表がありますのでその換算表に基づくと、大体このぐらいになるということです。

水谷委員 なるほど。分かりました。

長畑委員 昔ですと550だったものが今は、昔はリスニングとリーディングとストラクチャーしかなかったんですけど、今はライティングもありますしスピーキングもありますので、数値の出方が変わっているのです。

水谷委員 今はこういう表示の仕方が普通になっているのですか。

長畑委員 そうです。私立の大学の場合、多くは一斉受験をしていると思うのですけれども、大学で一斉受験をする場合には、カレッジTOEFL、ちょっと名称は忘れちゃったけど古い問題でやるのです。古い問題を使って、つまりリーディングとリスニングとストラクチャーだけの昔のペーパーTOEFLの問題を使ってやるものですから、点数も数値が昔のままのものになっているわけです。

ですから、我々もTOEFL600点だ、550点だ、500点だというような数値で育ってますので、なじみが深いですけども、この数値は今の学部生には感覚として分からないのではないかなと思います。Internet-BasedのTOEFLでやると200何点、190何点とか、そういう数値が一般的な数値になっていると。ただし、大学で一斉に受験をするものは、昔の数値基準を使ってやりますので、550点とかそういう数値になっているということです。

水谷委員 それから、指導の方法でさっき話題がちょっと出ましたけれども、指導者のほうに問題が、人がいないということがありましたね、専門領域の。こちらは大学院レベルであれば当たり前のことだと思うのですが、昔、僕はちょっと飯島学長にこうしたらどうと言ったことがあるのです。今やっているダブルディグリーと同じようなやり方を、オックスフォード大

学、ケンブリッジ大学か、あるいはハーバード大学でもいいけれど、そういう大学と提携して、あるいは日本国内のほかの大学で、ここにはない専門領域、かなり欠けているところがありますよね、文系の場合にはかなり多い。未熟児時代で大学になってしまっているので学科や何かが少し足りないから、そこを補うために提携大学を用意して、そこへ半年勉強に行くとか1年行くとか、そういうやり方でもいいから、あるいは2年、3年でもいいけど、やって指導してもらおうというのを広げておかないと、どうしても間口が狭くなってしまいます。

飯島さんは賛成だとおっしゃったのです。周りの方はみんな反対だとおっしゃって返事ができなかったんですけど、でも、今はダブルディグリーの中でそういう方向へ動き始めていますよね。だから、学部レベルでない、大学院レベルでのそういうシステムというの、やはり考えるべきだと。どこかでやってもいいのではないかなあと密かに思っているのですが。

司会 その点についてですが、最近ではコンソーシアムというカタチで文科省も推進しており、名古屋大学も積極的に参加しようとしています。これもつい3月のはじめに北大でありましたが、5大学院独立研究科連絡会議で提案がございました。北大、東北大、名古屋大、大阪大、それから九州大、この5つの大学で教員の互換制度を作りませんかという提案です。

水谷委員 それはいいですね。

司会 5大学の教員は、いずれも先ほどご指摘があったように、全学教育という重荷を抱えているのです。これをどうするかというのは非常に大きな問題なわけで、お互いに言語文化教育に関わっておりますので、それを互いに相手先で引き受けるカタチで、互換制度を構築して教育研究の活性化につなげようという提案がございました。

水谷委員 いいですね。

大阪大学の言語文化研究科にはいろいろ助けていただいたのです。

金崎委員長 もちろん、多少お手伝いしましたけれどね。だから、大阪大学が東大と京大を抜いたというのは、知恵だと思えますけれど、やはり同じ問題を抱えているところが仲良くやっているというのはいいことですよ。

司会 それでは、坂井様、いかがでしょうか。

坂井委員 私は大学院へ行っていませんので大学院のことはよく分からないのですが、研究指導についてのアンケートの数字は、これは驚異的ですね。こんなにみんなが評価しているならば、これはもういいのではないですか。

僕は学部しか知りませんから、学部ときは僕自身もそんなに研究していたわけではありませんが、先生方から指導を受けたということはほとんどないですね。講義は受けましたよ。基本的な講義は受けましたが、卒論を書くときにきちんと指導を受けたという記憶はゼロですね。出来上がったものについては評価されてというか、よろしい、不合格ではありません、という程度のものですけれども、それはありましたが、やっている途中で研究指導はありませんでした。だから、この数字はすごいなあと。よ

外部評価委員会報告

ほど研究科の先生方が、ひょっとしたら自分の研究を犠牲にしていらっしゃるのだなあという事で、ちょっと尊敬の気持ちになりました。

このアンケートについて日本人学生と留学生を分けてはないと思うのですけれども、その辺りの差があるのかなのかというのがちょっと知りたいところです。皆さん同じ数字で満足度があるのかどうかちょっと分かりませんので、その辺を教えてくださいませんか。

それから、中国から来ている留学生の人たち、この人たちはいったいここで勉強して、たぶん国へ帰る人も多いと思うのですけれど、どんなことを目指しているのか。何を将来の目標として持っていて、今、勉強しているのか、それに対してそういう目的をしっかりと先生方がつかんでそれに対応するような指導をなさっているのかどうかということも分かりませんので、その辺も教えてくださいませんか。

それから、水谷先生からご指摘がありました。床ですね。トイレはきれいにしたほうがいいと思います、絶対に。これは100%きれいにしたほうがいいです、トイレは。汚いトイレはつい汚しますが、きれいなトイレは汚しませんから、きれいにしたほうがいいです。汚しておくのと、パイプが詰まるのです。これを修理するのが大変なんです。べらぼうな金がかかるのです。私は今、会社でそういうことを担当していますので、これはちゃんときれいに使ってもらわないといけないですね。そのためには、きれいなトイレが必要なんです。汚くしてしまったらだめですね。

これは大学と関係ないのですけれども、例えばデパートとか駅ですね、これは大変周囲の人が常にきれいにしておかないとお客さんも来ない。非常にイメージが悪くなってしまいます。別に、大学でトイレがきれいだから来るという人はいないかもしれませんが、維持管理のそういった費用の上からしてもですね、これもきれいにしておいたほうがいいと思います。

ただし、机が足りないというのは、僕はちょっと贅沢かなあという気がしますね。東海テレビさんは広大なスペースを持っているからちゃんと机があるかもしれませんけど、うちは、例えばこういう机でもいいですし丸い机でもいいのですけれども、これを置いて戻ってきた人はそのどこかに座るのです。どこでもいいのです。どこかに座って、パソコンを出してやるのです。個人的な所有物は全部ロッカーの中へ入れる。作業をするのは机の一部分を使ってやるわけですね。

みんなそれぞれ自分の机がほしいのかと思ったら、それはあったほうがいいですよ。あったほうがいいけれども、最大の、例えば学生が10人いるとすると、その10人がいつもいるわけではないですね。それにもかかわらず最大の10人分の机を用意しなければいけないかという、それはしないです。食堂でもそうですよね。昼飯時にはです。わっと来ます。来ますけれども、例えば100人昼飯を食べる人がいるとすると、100テーブルがいるかといったらいらないですね。60とか50でいいですよ。

そういうことを考えると、あまり潤沢にそういったものを用意しなくても、それは家庭でも、自分の家でもできるし図書館でもできるし、例えばこういった部屋が空いていればこういう部屋を開放してもらおうとかですね、最大数の数を常に用意しておく必要はないと思います。

仮にどこかへ就職したとしても、ありませんよ、そんなものは、そんな贅沢なオフィスは。我々は民間企業ですから、基本的に費用対効果を常に考えるわけですね。ですから、これだけの投資をして最大の効果があるようにと考えますから、学生全員分の机を用意しなければならないとは我々は思わないですね。それでもポリシーの時代ですから、そのほうが学生がたくさんおいでになってですね、大学がよりいい研究をしていけるというならばそれはそれでいいのですが、ちょっとそれはどうかなという感じはしますね。

司会 ご指摘いただいたことは、すべて本当にその通りだなと思う以外ないですね。特に最初の、昔は指導なんてなかったんだというご指摘に私もうなずけるところがありまして、昔は本当に放っておかれておまして、学生は。昔は本当におおらかな大学の雰囲気というのがあったと思うのです。学生は自分自身でテーマをつかんで、自分で研究を進めていったというのがほとんどだったというふうにも思います。

飯野委員 アンケート結果について、日本人と留学生に差があるかどうかというご質問へのお答えは。

前野委員 留学生と日本人の間で、違うアンケートの項目を設けているわけではありません。国際言語文化研究科は約半数が留学生に占められておりますが、回答内容について留学生と日本人で差が出てきているようには見受けられませんでした。

それで、アンケートで指導とか授業内容に満足している学生が約80%に達しているというのは驚異的な数字だというふうに言うていただきましたけれども、この数値に関しましても、例えば大学の本部のほうで修了生アンケートというのを平成18年度の終わりに実施しましたけれども、そこでもやはり研究指導に関して非常に研究科の教育が良かったというような数値が、大体この学生アンケートと同じような数値が裏付けられるようなものが出てきております。

これは修了できたから嬉しいということで少し在学中の印象に上乗せされているのかなというふうな気もしましたが、実際に在学している学生もこの水準で回答していますので、私たちとしても学生の研究を支援する態勢が大体取れてきたかなというふうにも思います。

それで、アンケートを平成19年度実施するに当たって、実は今までアンケートの回収率が平成17年度、18年度は20%ぐらいでした。今年度はもう少し回収率を上げて、回答率を上げて実質的な中身が20%ではちょっと心もとない気がしましたので、アンケートにいろいろ記載していただいたことについてはこちらとしても真摯に対応したいので、ぜひ協力をお願いしたいという文を付けてアンケートをいたしました。

外部評価委員会報告

そして、回収率が2倍、40%にまでこぎ着けました。実質的な問題というのはやはり環境面での問題だと思います。それでこの場合、先ほどご指摘いただきましたように、机の問題というのは、ほかの研究科などと比較して同じ授業料なのだというようなコメントがかなり見られますので、その辺りのところは今の坂井様の中日新聞での基本的な考え方というのを聞かせていただいて、机が無理ならばロッカーを大きくするというで解消できるかなというようなヒントを得た気がしています。博士の後期になりますと毎日非常にたくさんの本を抱えて歩かなければいけない。ロッカーに入らないものが多いので、どこかずっと置いておいても安全なところ、自分の場所がほしいというようなことでしたので、ロッカーを大きくすれば、差し当たって机がすぐに確保できなくても不満が少しは解消できるのではないかと考えています。

飯野委員 あと、留学生の目的については。

前野委員 留学生の目的は、大体が学位論文、特に博士の学位論文を目指す人は、留学生は帰って教員になりたい、大学の教員になりたいという場合が圧倒的に多いです。差し当たって、今、うちの留学生の場合には、特に中国、台湾からの留学生がパーセンテージとして圧倒的に多くて、そのほかに韓国、非漢字圏というような順序になっていますけれども、中国とか台湾の場合ですと、帰国してまだ大学に勤められる状況です、まだギリギリぐらいですね。そろそろ学位取得者が増えていますので、これから2～3年するとちょっと危ないのですけれども、まだそういう状況ですので、帰って教員になるケースがかなり多いです。

それに対して修士の学位取得者の場合は、日本で就職したいというように希望している学生がかなり見受けられます。

水谷委員 すみません。質問です。回答者の数が出ていますけど、依頼した数は何人ですか。

前野委員 日言も多元も、基本的には回答数が46と45でした。

水谷委員 全員回答ということですか。

司会 対象者は全学生です。

水谷委員 236というのもありますね。この数字が依頼した数ですね。

司会 はい、そうです。

それでは、山内様、お願いします。

山内委員 この施設に僕は初めて入ったのですけれども、初めて入って外の環境を見たら、見事な景観というか緑が多くて、非常にいいですよ。

話は戻りまして、トイレはきれいですが食堂はおいしい、これはやはり鉄則なので最初に思ったのは、ここの建物の中に食堂がどこにあるのか。食堂はこういう位置が一番外が見えて癒やされて、授業中に見ているわけにいきませんから、こういう上のほうに食堂があればいいなということも思ったのです。そういう意味ではやはりそういう環境を作ってあげることが学校へ行きたいとかいい気分になって非常にいいのではないかと、学習効果も上がるのではないかなということも思います。

それから、アンケートでありこれは具体的な設問をしてなくてあれなんですけれども、企業で言うと提案制度というのを今、どこの企業でもやっております、うちもやっておりますが、活用率は低いのですけれども。いわゆる偽装発型の提案を含めて出てくるのは、大体提案制度で出てくるので、大学院でそういう提案制度があるのかなのか。

それともう一つ思いますのは、アンケートよりも、やはり、さっき水谷先生が言われたコミュニケーションで言うならば、こういうところでお茶を1杯、コーヒー1杯でいいんですけど、飲みながら、今の施設なり今の内容なりそういうことを授業とは関係なく、月に1回なのか何回かは別にしまして、懇談会を先生と学生がやられると。その場合に、先生のほうから何かを言うのではなくて、全部学生に具体的に言ってもらえるような制度があればいいのですけれども。なければ作って吸い上げるという努力を学校側もしたほうがいいのではないかなという気がします。

それから留学生のお話はまた後ほど言いますが、僕も、僕の専門から言いますと、留学生の書いた修士論文「日本のテレビニュース番組と情報番組の相違および変遷」はすごく具体的に読みたい内容だなと思います。いわゆるニュース番組と情報番組の違いを含めて、どう差別化していくかというのは非常に大きな問題で、それを中国の方がやっているの、読みたい内容で具体的にだということを感じました。

司会 本当によいご提案をいただきました。提案制度といいますが、学生を集めて堅苦しい会合ではなく、懇談会のようなかたちで学生から意見を受けて改善に役立てるというようなお話だったと思いますが、ご提案ありがとうございます。

それから、食堂の件ですが、それはここにはございません。

山内委員 ないですか。

司会 はい。ここは教員と学生のいわゆる研究教育の場です、何分にも名古屋大学は1学年だけで、学部生は2,200人、大学院生は1,800人ほどから成る大学です。ですから、学部・研究科ごとにレストランとか食堂を持っているわけではなくて、学生食堂がこちらにいくつかありまして、そこへ学生が行くという、そういう状況です。

山内委員 それは、眺望は全然よくないですね。

司会 いわゆる最上階のレストランという、普通の商業施設ですと、一番眺めのよいところにそういった施設がございますが、大学は残念ながらなかなかそういう施設を作っても需要に応えられないと、そういう事情があるわけですから、だいぶん時間が押してきましたので、3番目の社会連携の議題に入ります。

③

冒頭に申し上げましたように、2000年(平成12年)の外部評価で外部評価の委員の先生から、どこも同じようなメニューではなくて、研究科

外部評価委員会報告

の売りとなるようなものをぜひ考えるべきであるというご指摘を受けております。日本語教育と外国語教育が私どもの出自であり、前身なのですが、ちょうどそのころに私どもの研究科の売りになるものとして、メディア教育、メディアプロフェSSIONALというものを導入しました。

このメディアプロフェSSIONALコースというのは、平成15年に国際多元文化専攻の連携講座で出発いたしました。その後、基幹講座化し、現在に至るまで何人もの学生を受け入れ、かつ修了させてきております。

しかし、先ほど坂井様からご指摘がありましたように、研究者養成なのかプロフェSSIONAL養成なのかという問題がありまして、現時点では、両者を養成するという方向でここ2年ばかりきていたのですが、やはりいろいろな運営上の問題に突き当たっておりまして、現時点では、プロフェSSIONALの養成という当初の目的に戻るべきであるという意見が強く出ておりまして、研究科を二分するぐらいの議論の対立になってきています。

それで5年を迎えまして、今後どうするかたちで運営していくかということに関しては、研究科の売りとしてのメディア教育、これを堅持していくということは当然でございますが、一方において研究者養成も、これはメディア研究という分野もやはり重要であるということは認識しているのです。この難しい問題をなんとか打開して、さらに飛躍していかなくてはならないということを思っています。

それでは、山内様からお願いします。

山内委員 今、お話がありましたように、全体的に見ますと非常に幅広いので、即戦力の養成となると、例えば民間放送事業論を取りましても、一昨年に僕がお邪魔して90分ぐらいお話ししたんですけども、用意した分量のおよそ半分ぐらいしかお話ができなくて終わっちゃったんです。それで、あとから非常に興味のある人は聞きに来るんです。だんだん夜も遅いので、こっちは帰らなきゃいけないので、失礼したんですけども、興味は皆さん非常にあるんですけども、講義をするほうから見ると、1つの分野だけでも相当多岐にわたるといえます。

民間放送といえども、NHKさんと違って営業を回ってみたり、これもものすごく多岐に渡っております。例えば視聴率1つを取りましても、今、情報源は非常に多いので、視聴率だけで先日も本が一冊出ていましたけれども、論文が書けるんじゃないかというぐらい詳しい研究分析ができます。そういう意味で言いますと非常に幅が広くて、幅広く研究者のための基礎としてはいいのでしょうかけれども、我々の側に即戦力として受けるとするならば、この2年間いろんな講義をした者に話を聞いても、どこまで深く教えられたか、どこまでしゃべれたかというのは非常に疑問がある。

メディアプロフェSSIONALコースの授業科目を全部、あるいはそれを選択するんでしょうけれども、ちょっと即戦力としてはいかがかなという感じがします。

それから、講義をしているときに半分ぐらいの人は留学生の、中国の方が多かったのですけれども、日本と中国のいわゆるテレビ局の違いでありますとか、伝え方でありますとか、そういうこと非常に興味を持たれて、それはそれなりにいいのですけれども、その方たちが、さっき坂井さんからも出ましたけれども、将来、大学院を出てどうするのか、日本で就職するのか、中国へ帰られて中国で就職するのか、その辺が非常に不明瞭というか、分かりにくかったなという感じがしております。

司会 留学生については、先ほど前野先生から話がありましたように、前期課程修了生は、やはり日本で就職したいという声が圧倒的ですね。本国に帰って就職するというのは少数派です。圧倒的に留学生は日本に留まって、修了後に就職する、こういう希望を持っておりまね。

それで、確かに授業の展開の仕方というのは、先ほど申しましたように、今ひとつの転換期にございまして、もう先生方のお知恵を拝借して新しい展開を目指す、そういう段階にあります。このメディア教育に関しては、今新しいあり方の検討中でして、早急にこれは結論を出さなくてはいけないと思っております。

それでは、坂井様、お願いします。

坂井委員 はい、そもそも違和感があるんです。国際言語文化研究科には、日本語の研究をする、あるいは、外国語を研究する先生がいらっしゃるんですね。それはメディア、新聞、報道がほかの言語を使うことは間違いなくて、言語を使用して商売しているというのは間違いのない。それと、この研究科が持っている性質とはちょっと違うかなという気が率直に言っていました。

それはそれとして、現状は認めるとして、国際多元文化専攻のメディアプロフェSSIONALコースの内容が書いてあります。この文章からすると、9対1ぐらいで研究とプロを作るみたいに読める。しかし本当はどうなんだろうということをお我々は知りたいです。例えば、本当にマスコミに行きたい、メディア関係に行きたいと言っていた10人のうち、研究者になるのはたぶん1人、2人くらいですね。あとはほかの会社に就職するような人が多いんじゃないかと思うんです。そのときには、このメディアプロフェSSIONALコースというのが一体どういう人を育てるのだろうか。このところがちょっと見えて来ない、それが今の現状ではあるような気がします。

それから、先ほどもし言いましたように、中国や台湾の人にこういった主に日本のマスコミの像ですね、中日新聞とか東海テレビ、あるいはNHKなどの報道を講義することによって何かいいことがあるのでしょうか。僕は中国にこの前行ってきたばかりなのですが、労働環境が違って、すべてのことが自由に発信できるわけではないですね。

司会 本当に率直にお話しいただきましてありがとうございます。ただ、学生で留学生が多いということは実際に先生方からもご指摘を受けておりまして、平成20年度から文系大学院開放科目というかたちにしておりまして、メ

外部評価委員会報告

ディアプロフェッショナルコースの非常勤講師の先生方のすべての授業科目を、国際言語文化研究科だけではなくて、文学研究科、教育発達科学研究科、法学研究科、経済学研究科、国際開発研究科の文系大学院全体に開放するという措置を取りました。

ですから、ほかの研究科、あるいは学部生も席が空いていれば、単位は取れないけれども学部生の聴講を認めると、そういう措置を取っております、一体、これ何人の学生が受講してくるかは蓋を開けてみないと分からないですが、そういう措置は取っております。

それでは水谷先生、お願いいたします。

水谷委員 あの、何て言うんですか、メディアプロフェッショナルコースの資料を今日拝見したときに、最初に感じたことは、これすごく大事にさせていただきたいなと思ったんです。その理由は何かということ、こういうメディアのことについて開講するときというのは、大体具体的に1つか2つの授業科目をくっつけるみたいで、まあまあやるぐらいですね。それから戦力の問題も関係する。

でもここで実際に開講しているのは研究科の長期計画に絶対に繋がると思ったんです。私たちが今、言語にかかわる人間が過去の財産に支配されていて、それに拘束されている面がありますよね。教養部改革のときにすでに問題があったわけけれども、受け継がなければならない過去の研究の中身、領域の問題がありますけどね。しかし、それはそれこそ世間がいろんなことを要求するときに、そのままでは説明できない。何か世の中に貢献できるということに移し変えるナイフとフォークを用意しないと説明ができない。

それで、そのときのいろんな工夫をすると思うんです。例えば教員の専門領域を持ってきて、いろいろやってみたりする訳ですけども、それでは限界がある。それに比べると、このメディアというのは、現代の人間のコミュニケーションのシステムを捉える言語ですから、こういう発想で横に切るとすれば、そして過去からの各言語別の文学作品みたいなどころまでを含めての縦の遺産をぶった切って行く横のナイフ、縦のフォークに対して横のナイフを見つけて出していく貴重な台帳になるんじゃないかと。

だから、これ自体の検討をみんなで議論しながら国際言語文化研究科がこれから新しいものを開拓するのに、これをどう活かせるか。そして、これに拘束されて授業をやらなきゃとかということよりは、もう少し抽象度の高い研究のあり方と現実社会に間接的に貢献できる原動力となる研究領域を模索する台帳だというふうに僕は思います。

だから、これは大事にして、ぜひこれを守って広めて、未来を見据えた地球社会、国際化社会の中でのコミュニケーションにかかわる、あるいは言葉にかかわる、言語別のそういったものを捉える研究の対象に引っ張っていくものの代表にしていただけたということのパットと最初は思いました。

司会 ありがとうございます。そうですね、本当にその通りであると私も思いますが、私のほうから質問させていただいてよろしいでしょうか。

私どもの研究科で、これは現時点で直面している大きな問題なんです。このメディアプロフェッショナルコースをどういうふう運営していくかですね。

これは、例えば研究者養成の視点と、メディアプロフェッショナルすなわち職業人養成の視点、この2つの視点である種、意見の対立も含まれている状況なんですね、正直なところ申し上げまして。それで現実にその研究者養成と、それからメディアプロ養成という路線問題になってきますと、なかなか難しい問題になると思うんですが、その点いかがでしょうか。

水谷委員 あの、さっきも言いましたようにこれは台帳ですから、ここのところは、むしろもっと細かくいろいろやっていったいいと思うんですね。

今、心配してらっしゃることは、現実論としての人間をどういうふう世に送り出すか、そのままにプロフェッショナルと書いてあるものだから、そっちに引きずられる可能性がありますけれど、人間育成としては、それはその中から選ばれ厳選しなければいけない。現場の仕事に直結する、というのは何もかもできる必要はないと思うのです。だから、今、新聞社あるいは報道で一番求めている、なおかつ大学で訓練をしてくれたら、あとは見れるよという可能性がある領域はなんだろうということですが、インターンシップから始めて、現場で役に立つ、そういうものを作っていますよということ、研究領域を作り上げていくということは僕は矛盾しないと思います。全部そこに入れ込んでしまうことは無理なわけですから。

だから、現実の2年間あるいは3年間の育成過程でどういう領域のところだったらいけるというようなのを、具体的なまさに得られた人材とも関係がありますからね、学生で出来の良い悪いで違いもあるし、適性もあるでしょう。それに合わせて、とにかくススッと変えていったいいと思うのですが、そういうやり方で現実に社会へ出て活躍できる人をひとまず増やすこと。それ



外部評価委員会報告

から全体で広くグローバル化する社会の中で、人々に貢献できる研究、言語文化と結びついた深い研究というのをこの台帳をもとにしてやるということは僕は矛盾しないと思います。

それはむしろ、はっきり分けてやるんだよとおっしゃったほうがいいんだと思う。これは区別しないと、どっちもひとつだというふうにしてしまうと喧嘩になると僕は思います。

司会 ありがとうございます。

山内委員 あの留学生の方が日本で就職するのが非常に難しいというか、特にメディアでは難しいというふうに申し上げましたけれども、1つ良い例を、最近あったものですから、ご紹介したいと思いますけれども。

中国の留学生の方が、日本の福井テレビというところに就職をされまして、今年度のフジテレビ系の優秀なドキュメンタリーの中のドキュメンタリー大賞というのを、彼女はディレクターですが貰ったのです。彼女は、福井の大学から神戸の大学の大学院へ行っており、福井テレビに就職されたんです。扱った作品は中国から研修生で福井の山の中に小さな縫製工場がありまして、そこで3人の中国女性が本国から家族と離れて、中年の方なのですが3人が働いているのです。

その取材にするにあたって、彼女は1か月間その工場に泊まり込んで、そこで説得をして、言葉は通じる人、同じ国の人なので、それで番組を作ってそれが大賞を貰ったんです。

彼女は一昨年も、中国残留孤児で日本に帰って来て子どもを作って非常に苦労された親子がいるんですが、これのドキュメンタリーを作ってこれも優秀賞を貰っているんです。そういうかたちで言葉がしゃべれる、それから中国の方ということで、我々ではなかなか入っていけないところへ入って行って、独特の、やはり日本と中国に横たわる大きな問題がいっぱいあるんですけれども、それをえぐり出すという分野では、相当今、評価をされております。

そういう人が、たくさんは要らないんですけれども、ひとりぐらいそういうディレクターがいるとうちなんかも助かるなどということはずいぶん感じます。だから、留学生のそういうかたちでの即戦力は、必要ないわけではないということを最近感じております。

司会 ありがとうございます。

それでは金崎先生、お願いします。

金崎委員長 先ほどから即戦力という話が出ましたが、本当に学位を取った人が、つまり3月に修了して、4月末からすぐ仕事ができるかという、たぶん難しい。そういうことはあまり求められていないんじゃないかと思うんです。学部を出てから、そこから始めたほうが確かに鍛えがいがあるというか、即戦力になりやすいのではないかと。2年間コースをやって、やった価値はどこにあるかという、やはりマスコミ批判力とか、思考力などが求められているように思うのです。

理想論かもしれないけれども、そういった面でも現場の人の指導のようなということで、指導も必要でしょうけれども、やはり本来そういった思考力を備えた人、学部を出て現場に出て行った人とは違うようなかたちの人が、

やはり求められていると思いますので、あまりすぐに働けるということをお求めないほうがむしろいいのではないかと私は思うのです。

司会 その通りだと私も思います。単なるカメラの扱い方とか、そういうことではなくて、その背景でのメディア世界でどのような判断、価値判断ができるか、そのための思考力を養うということが大切であるという、そういうご意見だったと思います。ありがとうございました。

この社会連携、具体的にはメディア教育なのですが、これは本当にもう尽きない話題なのです。また、解答がなかなか難しい、また、現時点で私たちも直面している難題でございまして、先生方のご意見を踏まえて、さらに私ども検討を進めていきたいと思っております。

次は留学生に関してですが、留学生は先ほど言いましたように、現在のデータでは、231名の在学生のうち、109名が留学生です。さらにこのほかに、研究生が30名ぐらい毎年おまして、国費留学生を含めると、140名前後の留学生は常にこの研究科に在籍しているということになります。毎年この数字はほとんど動いておりません。

先ほど留学生を教育することの意味についてご指摘を受けたのですが、「留学生30万人計画」などもあり、留学生は日本の大学では今後、脇役ではなく主役の一部になりつつあると思われれます。それで、この点では私はアメリカの大学事情はよく知りませんが、アメリカ型になりつつあるのではないかなと思うのですが。

金崎先生、大阪大学では留学生はどういう状況にございますか。

金崎委員長 留学生の比率は20パーセントくらいですね。多いときで30パーセントくらいです。留学生は言語を書くという段になると、ちょっと日本語の書き方というところで問題が出てくる学生が多いようになっています。

司会 水谷先生、いかかでしょうか。

水谷委員 留学生は、無理をしてまで受け入れるとか、うちは少ないから恥ずかしいとか、そういうことは大丈夫です。むしろ留学生に何を伝えるのか、そのためにどういう体制で臨むかということを決めていけばいいと思うのですかね。

30万という数を決めたこと自体が、実にいい加減だなとは思いますが、よほど前の10万人構想で痛い目にあつたらしくて、それで数値目標をやめてしまったんですよね。ところが、あの中教審の報告書の中では、フランスやドイツやアメリカの数がデータとして出ていた。どうしてこういうやり方で出すのか。それを見れば、ほかの国はずいぶん伸びているのに、日本は10万では困るだろうというのは疑問が出たはずなんですね。やはり案の定こういふかたちで出てきて、ついに30万と言いつつ出していたわけです。ある人は100万と言いつつ出している人ですが、100万はこれは無理ですよ、大体必要ないんです。

だから30万であれば、結構妥当な線かなとは思いますが、問題はやはり質の問題だと思います。たぶん、名古屋大学の場合は非常にいい学生を大体受け入れ続けているので、だから

外部評価委員会報告

それを活かすいき方というのは考えていく必要があるのではないかな。しかも、さっき別の委員がおっしゃいましたけど、留学生を活かす方法というのは、平均化した力を求めることではないと思うんです。その学生に応じた能力の中の本人らしい力というのをどう見つめて、それをどう導いていくかという指導体制を用意する必要があります。放りっぱなしは、これは駄目だけれど、手間がかかりすぎるのもこれも困りますけれどもね。でも、今の時代ですから、無視をしたり、放りっぱなしにしたり、あるいは文句ばかり言っていると、絶対損をすると思うんです、結果としては。だから、その意味では大事にしていけないといけないうらうと思うんですね。

それともう一つ、留学生の受け入れで、日本語教師でも外国人の日本語教師、修了した学生が今、中国の中でどんなに活躍しているか、そういうことだって情報を集め直して少しPRをしてもいいと思うんです。逆にこちらから外へ送り出す学生の問題をやはりぼつぼつ考えないと、ちょっと責任を問われたりすることが起こるかもしれません。だから数が多ければいいというものでは決してありませんから、成果を上げる日本人学生の送り出しみたいなシステムをちょっと計画的に出したほうがいいかなと思います。

山内委員 最後におっしゃった日本人学生の場合、それが日本語教育・日本語研究者とは限らない。

水谷委員 限らない。例えば、フランス語があるでしょ。フランス語の学生で、それでもし本人がフランスとスペインと何か関心があって、バスク地域研究をやりたいというようなのがあったら、すぐにお尻ひっぱたいで向こうへ出して、将来そういう特殊なことをやっていけば、仕事も結構可能性がありますからね。ちょっと個別に申請します。ずっと毎日の面倒を見る必要はないと思うんですけれども、将来のビジョンを指導者のほうできちんと示してやって、この方向で走れってやる、やれる体制は欲しいですね。その情報の交流に対しての職員内でのネットワークみたいなものが上手に作っていただけると、僕は必要だろうと思いますね。無駄のないように。差し出がましいようですが。

司会 いえ、ありがとうございます。坂井様、いかがでしょうか。

坂井委員 先生がアメリカ型になっていくとおっしゃっていたんですけれど、アメリカは移民の国なんですよ。ですから、アメリカ人の5代遡ってなおアメリカ人という人はあまりいなくてですね、3代ぐらい前になるとドイツ系とかフランス系とかロシア系とか、大体何々系なんですよ。

それで、アメリカ人になりたくてアメリカに来る人が多いものですから、そこがちよっと違うのかなという気がしますがね。ただ僕はまったく賛成でして、留学生は事情が許す限りたくさん受け入れたほうがいいと思いますし、日本人も留学したり、外国へ行ったほうがいいのではないかな。

知っている、見るだけでもいいんですね。見るだけでいいんですけど、言葉ができればもっといいですね。それで友好関係ができるんですよ。相手の国の人と必ず仲良しになれるんですよ。そういったことが広がっていくことによって、誤解がだんだん解けるということがたくさんありますよね。国情が分からないとですね、思い込みとか誤解とか、少ない情報で敵意をもったりとか、そういうことがありますよね。お互いに分かっている人が一人でも増える。これはもう日本にとっても、留学生を受け入れることにしないとイケない。絶対プラスになると思いますね。不満になると葛藤がありますね。ちょっとこれは大変だなと思いますけれども、30万もとうてい無理ですけれども、事情が許す限り留学生というのは受け入れたほうがいいし、もっというならその学校を終えて、国に帰るとしても、また、単独でも来られるような友達を日本で作る。単なる研究ではなくてですね、そういった人間関係というふうなことで、より良くなるんじゃないかな。

司会 ありがとうございます。

坂井委員 みんなが研究できれば大変有益だろうと思っています。それよりも、やはり交流をするということ自体がね、もっともっと大きな価値を持っているんじゃないかな。

水谷委員 アメリカのお話が出たので、すごく今、心配していることがあります。今はブッシュ政権の終盤で、結構みんな親日的な雰囲気があるけれども、あと20年絶対もたないと思うんですよ。というのは、日本語を勉強している人の数はそんなに減ってはいないんですが、日本のことを研究するレベルの人たちが激減しているんですね。

現在コロンビア大学にいる昔の指導生の話ですと、日本研究の論文を出すのはゼロになってしまうと。だから、それをどうしたらいいかという問題がある。現在の政権の周辺にいるロビイストをはじめとして、日本に関する情報を出す人間がいっぱいいるのですが、それが支えている友好関係が20年経ったら消えてしまうんです。そうすると、すごく悪い状況になる可能性がある。外務省の方にそういう話をしたら、分かるのは分かるんですけど、それを引き受けるお仕事が日本の大学のどこかに本当はあるはずだと思うんですね。

中国に関しては関心も少し増えてきたから解決するかと思うけれども、でも対アメリカに関してちょっと楽観的過ぎる状況があるということをもうちよっと反省して、それを解決するための仕事を日本の大学のどこかでやってくださると大変ありがたい。この国際言語文化研究科かどうか分かりませんが、もしやってくれるということなら、日本の未来にすごく貢献するとは思いますが。

司会 ありがとうございます。

坂井委員 たぶん、これは視点、私の意見ですけれども、緊張関係があると研究するわけですね。だから昭和でいえば10年代、実際はもっと前でですけどね、日露戦争が終わったすぐ後からアメリカは日本とかチェックしていますから、それからずっと日本研究しているわけで

外部評価委員会報告

す。だから、日本語の達人がアメリカにいつばいいるわけですよ。それで勝ちましたよね、昭和20年。勝って、そのあとずっと日本との緊張関係がだんだん薄れるわけですね。そうすると、大したことないというので、今度は中国との関係の動きが出てくる。そして、ものすごく中国の研究者が出るわけですよ。だから、アメリカ人に日本語を教えようと思ったら、日本とアメリカが緊張関係にならないと。

今は、だからたぶん二国間の関係が割合と安定をしているものですから、だから日本はいいや、何かあってもきつということを知ると、というふうに思われているのではないかな。その点中国はそう簡単ということ聞かないから研究しましょうというって、やっているのではないかなという気がします。

水谷委員 今は第三世代のアメリカの親日、日本のことを分かん人たちは相当の数いるんですが、これがもう死に絶えていきます。それに対して中国は、ものすごい勢いでアメリカに働きかけている。大学への寄付なんかもすごい数です。

だから、そうするとアメリカも中国も今後は日本のことに関心が、何の利用価値もないというかたちで忘れていかれるかもしれません。むしろ、それは戦争に繋がらなくていいかもしれません。

司会 非常に面白いお話ありがとうございました。山内様はいかがでしょう。

山内委員 うちローカル局ですけれども、その北京局がありまして、元々はインドネシアだったんですが、おそらく中国が相当日本との間でいろいろ問題が起って、重要度が増すだろうということで、現在北京にいるんですけれども。我々から見ると、やっぱり中国が、オリンピックがある万博がある、すべてのことを含めてやはり一番テーマになりやすいというか、取り上げられやすい素材だと思うんですよ。

そういう意味では、中国の方が来て日本のことを勉強してもらって、日本の人も中国のことをもっと勉強して欲しいなということを思います。しかし、全体的に見るとこの研究科は留学生の比率はやはりちょっと高いという感じがしないでもないです。

司会 ありがとうございます。留学生の問題も国際交流と絡めて、やはり原点と言いますか、人的交流というのは国際交流の原点ですので、今後も大切に対応してまいりたいと思います。

先ほど研究生が30名から40名いると申し上げましたが、この学生たちは一応、日本語能力試験1級を取ってくるのが条件になっておりますので、日本語の能力に関してはある程度の素質は持っているんですけれども、いわゆる先ほどから少し話題になったかもしれませんが、日本文化に関する知識、あるいは論文作成のための基本的な知識が不足しているんですね。

ですから、この留学生、特に研究生を対象にして研究の基本的な基礎指導と、それから生活指導ですね。それからもう一つは授業を実際に担当しておりまして、修士課程に入ってくる前の予備教育を主として行っております。

4

司会 それでは、最後の議題、全学教育の問題に入りたいと思います。国際言語文化研究科の出自としては、いわゆる教養部の外国語系列の教員集団に始まる組織であるといえます。国際言語文化研究科と国際開発研究科第3専攻の教員が、数名の例外はございますが、ほぼ全員が名古屋大学の言語文化教育を担っているわけです。言語文化教育は、専門的学習のツールとしての外国語の能力を高め、異文化理解を深めて国際社会にふさわしい教養を育む科目と位置づけられています。

名古屋大学において開講されている全学基礎科目「言語文化」の総コマ数(平成19年度)は838コマ、そのうち言文I、II(必修)は778コマ、言文II(裁量)が56コマ、言文IIIが4コマです。担当者は英語と英語以外に分かれておりまして、英語と英語以外を合わせますと担当教員は合計57名です。担当合計が576コマとなり、不足分の262コマが非常勤講師の担当となります。

学部生を対象とする全学教育以外に、学部学生、大学院生、研究生、および本学職員を対象とする「全学向け授業」も開講しており、これも名古屋大学における言語文化教育の一つの特色になっています。

名古屋大学では長年にわたり「全学教育授業アンケート」を実施しています。いわゆる全学教育の言語文化に共通設問が19の設問からなっております。そのいくつかを紹介させていただきますと、「問12」は「教員の熱意は感じられましたか」という質問に対して肯定的意見が英語と英語以外の場合のいずれにおいても85%以上という回答でした。「問14」は「受講者の人数は適当でしたか」とありますが、これは平成14年～15年にかけてまして、それまで1クラス50～60人ぐらいの大人教クラスを解消いたしまして少人数クラスを実現しています。英語の場合には20名クラスと40名クラス、英語以外の場合には30名クラスの少人数化を実現(この数字ですら見方によっては大人教かもしれません)したわけなんです。これについては肯定的意見が90%を超えています。

そして、「問19」は「総合的にみて授業に満足しましたか」ですが、これに対してもすべての言語において満足度は80%を超えております。しかし、この満足しているという回答についてですが、この結果に対して学生が満足しているから言語文化教育が十分に行われている、教育が実質化されているというような評価は少なくとも大学本部はもっておりません。現在、言語文化教育すなわち外国語教育は新しいカリキュラムの策定に向けまして検討中でございます。

そのポイントは何かと申しますと、外国語の能力を実質的に担保する、そういうデータといえますか、客観的資料が必要であるということです。これは各大学でもすでに行われていることですが、いわゆる検定試験等で外国語能力について、この2年間にわたる教育課程の中でどれだけの進捗があったか、進歩があったか、成長したかというデータの客観的資料、指標を作

外部評価委員会報告

成する。それをもって、この授業に満足すると同時に具体的な成果があがっていることを示すというようなことを含めて、新しいカリキュラムを策定中という状況です。

それで金崎先生いかがでしょうか。もうほとんど5時になってしまっていますので、簡単で結構でございます。

金崎委員長 いくつかありますが、ひとつは、英語以外の外国語、いわゆる未習外国語の受講者ではドイツ語が多いんでしょうかね。

それからもうひとつは、外国語科目に対して、学生の満足度が非常に高いことに、ちょっとびっくりいたしました。そういった状況は絶対に信じられない。私たちの場合、こうした授業アンケートをするとほろくそにいられます。まだ外国語はマシンなんですけれども、一般科目では特にそうです。名古屋大学の場合、内部の先生たちは授業熱心なんですね。そのような気がいたします。

数字だけ見ますと、非常勤講師がやはり多いというのも少し気になります。

司会 ありがとうございます。最初の質問については小坂先生からお願いします。

小坂委員 中国語が全体の3分の1ぐらい、それからドイツ語が3分の1ぐらい、フランス語・スペイン語・朝鮮韓国語が3分の1ぐらい、大体そんな割合で学生が受講しています。

司会 最近の傾向として、中国語の受講者が非常に増えているということもありますね。

小坂委員 大体は安定しているような感じがいたします。このぐらいの数になって安定してきました。

金崎委員長 全国的にはちょっと減り気味ということは聞いているんですが。

小坂委員 ここではまだ、減るところまではいっていません。

司会 水谷先生、いかがでしょうか。

水谷委員 外国語としての中国語の授業に出てくる学生は増えてきており、まだ減ってはいないんですよ、全国的にも。ところが、中国語を専攻しようというのは、もう決定的に今はだめになっています。ですから、困ったもんだなと思って。

おしまいに申し上げたいことはこのことです。良い学生は、先生の良いところもよく分かるんだなっていうことです。先生も熱心やってい

るんでしょうけど、何よりも学生がよく見ていると思えました。大事にしてやってください。

司会 ありがとうございます。坂井様はいかがですか。

坂井委員 すごいサービスだなというのが率直な感想ですよね。我々が学生のときには、ドイツ語もたしかに触れはしましたよ。しかし、それを活かしたことはないし、使いこなすなんて、もう夢のまた夢ですよ。

だからそれに比べると、ここで見てみると、本当に大学の先生の過保護とは言わないけれども、随分面倒を見ていらっしゃるんだと思います。その面倒の見方が、満足度を増やしているんじゃないかな。

僕は28歳ぐらいのときにバクダッドに行っただのですね。そのときに我々が習ったりするのは、訓練であり、トレーニングです。それで英語を徹底的にトレーニングをする。反復練習とかですね、もう、そういうところばかりですよ。すると、うまくなるんですね。実践でうまくなるのですね。

ただ、全体としてはですね、もう少し常識を教えてやってほしいなと思います。もう言語には関係なくです。昔、倫理学とか論理学とかというのをやったんですね。それ、何の役にも立たないですね。そんなことよりも、まだ、いっぱいあると思うんですよ、常識というのが。いい始めればきりがありませんけれども。例えば、今の国際紛争が何で起きているのか、そういう歴史的な経緯は何かということですね。あるいは金融とか財政の仕組みや、基本的な法律についてはどうなっているのかとかですね。世の中に出たときに、その常識を知っていないとやっていけないようなことを全学教育で教えてほしいと思います。

司会 ありがとうございます。以上で今日、本日の議題はすべて終わりました。2時から始めまして3時間、内容と密度の濃い、素晴らしい委員会になったと思います。納得させられるお話が多かったと思います。また素晴らしい提言もいただきました。

あと10分ぐらい休憩しましたあと、ここで懇親会、ささやかな、何もございませんが、簡単なものをつまんでいただきたいと思っておりますので、どうぞ、そちらのほうもご参加いただきますようお願いいたします。

本当に本日はありがとうございます。



外部評価委員会報告

外部評価委員コメント

金崎春幸（大阪大学言語文化研究科科長）

1 研究活動

個々の教員の研究活動は活発であり、著書、論文とも十分な数に達していると判断できる。言語学や文学・文化学のみならず、ジェンダー論やメディア論など幅広い領域での研究も多く見られ、研究科全体としてはバランスのとれた構成となっている。

科学研究費補助金や総長裁量経費に関する状況もおおむね順調である。大型の外部資金の獲得による研究の一層の拡大が今後の課題であると思われる。

2 教育活動

大学院教育については、教員の努力の成果が如実にあらわれている。指導要綱の作成によって、教員にも学生にも論文作成にいたるまでの指導計画が明確になっている。また国際多元文化専攻における必読文献の指定や外国語能力の目標値設定は、学生のレベルを高い水準で維持するためにぜひ続けていただきたい。教員と院生による取組の結果、課程博士学位授与率が上昇しているのは喜ばしいことである。もちろん授与率100%が望ましい状況であり、それに向けた教育指導体制の一層の改善は必要だが、何よりもまず優れた学生を入学させることが第一であると思われる。入試説明会や広報活動等の一層の活性化を期待したい。

院生アンケートでは授業や指導体制の高い評価に対し、施設・設備面では問題があるようである。スペースについては一朝一夕に解決できることではないが、セキュリティ管理の行き届いたパソコンやプリンター、コピー機などの整備は他研究科でも常に求められており、間接経費など（あるいはそれができなければ教員の研究費を多少減らしてでも）予算措置が必要であろう。

全学教育、特に外国語教育科目に関しては名古屋大学の他研究科も担当しているので、単独評価はできないが、開講科目や学生アンケートを見る限りおおむね順調に実施されていると判断できる。

3 社会連携

平成18年度に設置されたメディアプロフェッショナルコースが、研究科の社会連携の大きな成果である。論文作成とコンテンツ制作のためのメディア実務指導を含む教育プログラムは斬新な試みであり、高く評価できる。ただ、今後の方向としてあまりに実務重視に傾くと、研究科で本来育成されるべき論理的かつ柔軟な思考力や研究能力が軽視されないかどうか、一抹の不安がないではない。大学で育った教員とマスメディア関連企業出身の教員とがうまく融合して、独自の教育研究を生み出すことを切に期待している。

一般社会人向けの公開講座については、地道に努力を重ねていると判断される。

4 国際交流

留学生数の多さが研究科としての強みであると同時に弱みともなっている。日本人学生と留学生が互いに刺激し合って伸びていくには、日本人学生と留学生の比率が、私見では2対1あるいは3対1くらいが好ましいと思われる。それには日本人の受験者の獲得が必要なのは言うまでもない。

坂井克彦（中日新聞社常務取締役）

1 研究について（研究状況、出版、論文数）

研究を本にして出版できるというだけで、ある程度の評価はできる。ただし、それが学会や社会一般にどのような影響を与えたかが重要。そうでないと、単なる趣味の世界にとどまってしまう。そのあたりのチェックを怠らないでほしい。

2 教育について（学生指導、博士学位論文）

日本語文化のカリキュラムについては目的意識が感じられる。国際多元文化では、多少、なじみにくい講座があるものの、教育指導に学生から高い評価を得ていると聞いた。教授陣のご努力を多としたい。

3 社会連携について（実務化教育、メディア教育）

メディアプロフェッショナルコースについては「批判的、創造的なメディア文化研究。学際的、比較論的、歴史的なアプローチによる文化研究」をする、とある。しかし、眼目は最後にある「情報発信の実践的スキルを養う」というところにあるのではないか。それを踏まえて考えるなら、このコースに限っては、研究よりは、社会に出た際の「即戦力」を身につけさせることが重要と思われる。他大学のマスコミ関係の講座では、現場を踏んだ職業人が大学に戻って学生を指導するケースも多い。将来、このコースの卒業生からもこうした人が出ることを期待しつつ、とりあえずはマスコミ（広くはメディア）職業人としての基礎能力が身につくカリキュラムの充実に努めて欲しい。メディア関係の企業現場にいる人が、講師として、あるいは聴講生として積極的にこのコースに参加するようになれば、国際言語文化研究科の「売り物」の一つに育っていく可能性がある。

しかし、それにしては留学生の数が多すぎはしないか。中国の人たちに日本、および世界のメディア事情を知ってもらうことは、もちろん意義はある。この人たちが中国に帰らず、日本のメディア企業で日本と中国の橋渡し役をしてくれることも大切なことだ。ではあるけれど、日本のメディア関係の企業が本音として望んで

外部評価委員会報告

いるのは、情報報道についての基礎知識を持つ日本人学生と思われる。「日本人を多くすることは国際言語文化研究科の趣旨に反する」というのであれば、このコースに限っては、他の研究科に移設することも視野に入れる必要がありはしないか。それとも、このコースで徹底的に外国語教育をして国際的に通用するマスコミ人を育てようと考えているのか。

4 国際交流について（留学生の受け入れ、教育、国際シンポ）

留学生の受け入れは国家的な重要テーマ。お互い、ここで一人でも多くの友人を作り、末長い友好関係が続けば、国家間にもプラスは大きい。

日本人に対する外国語教育研究、留学生に対する日本語教育研究は、これまで以上に力を入れて欲しい。

5 全学教育について（全学教育、外国語教育）

外国語を学ぶことは、これからの世界を生きていくために相当に重要なことであろうと思う。そのためにも、全学におおいに国際言語文化研究科の存在をアピールしてほしい。

これとは別の話として、今の学生は常識に乏しい。こ難しい学問よりも常識を学ぶ場を全学教育に取り入れてもらいたい。株式会社や金融の基本的な仕組み。基本的な法律。国際紛争の地域と原因、日本との関わりなどなど。社会に出るにあたって知っておいて欲しい「常識」は多い。

6 その他

独立行政法人になって、大学でもずいぶんと競争意識が激しくなったように感じる。目的意識もなく、勤務評定もなく、のんびりだりとしていたのに比べれば、切磋琢磨することによって、より向上し、成果を上げることがいいことには違いない。しかし、それによって目のあたらない学問、もうからない研究がないがしろにされると将来に禍根を残しかねない。声をあげにくい部署にもしっかりと目を配り、守っていく意識を大切にしてほしい。

山内公明（東海テレビ放送常務取締役）

頂いた資料だけで、本研究科について、外部評価を行うのは、極めて困難な作業だと思われまます。とくに、研究とか教育とかは、その成果が明確になるのに時間もかかり、尺度も素人からは、測りにくく評価しにくい内容です。おとし、メディアプロフェッショナルコースで、一回講義させて頂いた経験をもとに評価します。

1 「国際言語文化研究科」について

本研究科の目的に書かれているように、「国際言語文化学の学術研究者、高度の専門技術者及び教授者を育成」が、主な目的であるならば、この名称でよいが、メディアのプロフェッショナルを育てることも目的ならば、この名称は結びつかず、優秀な学生を集めるためにも、変える必要があると思います。「未来へのプロフィール第4号のはじめに」にあるように、「国際言語文化研究科は生ける化石とならないように、年々歳々、脱皮を繰り返していかなければならない」まさに正論です。かつて大学院といえば、

研究者の養成の場だったが、それからの脱皮をはかるためにも・・・。

2 「メディアプロフェッショナルコース」について

全体の講義内容を見ると、ジャーナリズム論からはじまり、新聞、放送、広告まで幅広い講義を行っており、メディア研究としては、たかいレベルにあると思います。しかし、メディア研究論が主目的かメディアで働く人を養成しているのかははっきりしません。全体的に間口を広げすぎたためと思われる。マスコミと一口にいても、新聞とテレビでは大きな違いがあります。テレビでも、公共放送と民間放送では、違いがあります。おとしの講義でも、予定していた内容の半分位で、時間が来てしまいました。それほど、もし本当に即戦力を養成しようとする、教えたことが多く、時間がかかります。視聴率一つをとっても、今は、情報量が多く、その調査、分析だけで、論文が書けるのではと思うほど、専門知識が必要です。しかし、新聞には、視聴率はありません。公共放送も、それを重視しません。このコースから民間放送を目指す人を育てるなら、この講義内容では、即戦力になりません。

3 就職について

学術研究者を育てる目的からみると、大学、研究機関への就職は、全国にひろがっており、十分といえるとおもいます。一方、メディアコースでは、マスコミ業界への就職は、予想以上に少ないと思います。通常、テレビ局では、大学院卒は、技術系がほとんどで、門戸は開いているものの採用実績が少ないこともあります。しかし、本当に即戦力に育っていれば、少数精鋭で、出来る限りいい人材がほしいこともあり、もっと増えると思います。私学のいわゆるマスコミ系学科では、相当数の学生がマスコミに就職している実績があり、それは当社にもあてはまります。もっと積極的にアプローチし、実績をあげれば、マスコミ志望の学生も集まり、活性化すると思います。

4 留学生について

おとしの講義でも、中国からの留学生が多いのに驚きました。しかもどちらかというと、留学生の方が熱心でした。国際化の時代に、広く門戸を開けるのは大変いい事で、日本への理解も深まるものと思います。しかし、それも限度があると思います。留学生の占める割合が大きすぎると、その支援体制に労力をとられ、教育環境としてマイナスになると思われます。とくに、メディアコースでは、例えば中国と日本のメディア事情を研究するには、いいのですが、日本での就職はハードルが高いと思われます。それでも、中国の留学生がテレビ局で活躍している例をあげます。フジテレビ系の優秀なドキュメンタリーを表彰するドキュメンタリー大賞で、今年度の大賞を受賞したのが、福井テレビの「互恵の糸」という作品です。この作品は、福井の山の中の小さな縫製工場で働く3人の中国人女性を密着取材し、なぜ中国人研修生として、家族と離れて日本で働くのかを描いたものです。取材ディレクターは、日本に留学し、福井テレビに就職した中国人女性です。この方は、以前にも、中国残留日本人妻を題材にしたドキュメンタリーを制作しており、日本と中国に横たわる大きな問題を鋭く追及しています。日本人のディレクターではとても出来そうもないテーマです。そういう点では、留学生の方もチャンスはありそうですが、人数は限られます。

外部評価委員会報告

5 対外活動について

公開講座・シンポジウム・講演会は、この学科を社会に広く認知してもらうのに、絶好の機会です。本学科でも、各種行われており、今後も継続されることを望みます。ただ、全体的な印象は、学生を主な対象にした内向きなものが多いようです。もっと一般市民を対象にしたメディア研究公開講座をやってほしいと思います。とくに、情報が大量に流されている時代に、メディアリテラシーの必要性が問われています。市民意識の向上のため、この学科が、積極的に活動してほしいと思います。対外的なことでは、広報活動も重要です。とくに、インターネットによる情報発信が、この学科の認知度を飛躍的に高めることとなります。この学科のホームページをみると、アピール度に乏しく、積極的に情報発信しているとはいえません。情報発信の実践的技能を養うことも、この学科の目的の一つであるならば、是非、トップページから刷新し、魅力的なホームページにしてほしいと思います。

最後に、大学院としては、研究環境がまだ不十分だと聞いています。メディアに関する資料も少ないということです。メディア研究では、全国一といわれ、注目される学科にしましょう。

多メディア時代といわれ、益々、情報発信するメディアも、複雑になり、多岐に渡ります。しかし、社会の公器として、ジャーナリズムという公共的使命をさらに高めることは、いつの時代も変わりません。時代に対応するため、常に脱皮を繰り返し、専門的知識をもった即戦力を育てる体制を作り、社会の要請にこたえて頂きたいと思います。



年間スケジュール

11

2008 年度国際言語文化研究科学年歴

| 行事 | 期日 |
|---------------------------------|-------------------------|
| 入学式 | 4月5日(土)午前 |
| 大学院新入生ガイダンス | 4月5日(土)午後 |
| 前期授業開始 | 4月14日(月) |
| 名古屋大学開学記念日 | 5月1日(木) |
| 名大祭(大学院は授業実施) | 6月5日(木)午後～8日(日) |
| 国内入試説明会 | 6月7日(土)東京 6月16日(月)京都 |
| オープンキャンパス | 6月28日(土) |
| 9月修了論文題目提出締切 | 7月2日(月) |
| 国外入試説明会 | 7月28日(月)上海 |
| 前期授業終了 | 7月22日(火) |
| 前期授業予備日 | 7月23日(水)～7月29日(火) |
| 夏季休業 | 8月8日(金)～9月30日(火) |
| 9月修了論文提出締切 | 8月18日(月) |
| 大学院入学試験(博士課程前期) | 9月17日(水)～18日(木) |
| 後期授業開始 | 10月1日(水) |
| 言語文化フォーラム(同窓会) | 10月18日(土) |
| 修士学位論文題目提出期限 | 11月28日(金) |
| 冬季休業 | 12月28日(日)～1月7日(水) |
| 修士学位論文提出期限 | 1月9日(金) |
| 後期授業終了 | 2月1日(月) |
| 後期定期試験期間 | 2月3日(火)～2月9日(月) |
| 大学院入学試験(博士課程後期)(国際多元文化専攻博士課程前期) | 2月12日(木) |
| 修了式(卒業式) | 3月25日(水) |



データで見る研究科

12

入学試験状況

| | | 分類 | 専攻 | 志願者数 | 受験者数 | 合格者数 |
|--------|------------|------------|--------|------|------|------|
| 博士前期課程 | 20年度 | 一般選抜 | 日本語文化 | 46 | 43 | 19 |
| | | | 国際多元文化 | 44 | 41 | 33 |
| | | 社会人特別選抜 | 日本語文化 | 2 | 2 | 1 |
| | | | 国際多元文化 | 2 | 2 | 4 |
| | | 高度専門職業人コース | 日本語文化 | 2 | 2 | 2 |
| | | | 国際多元文化 | 5 | 3 | 2 |
| | 19年度 | 一般選抜 | 日本語文化 | 55 | 54 | 22 |
| | | | 国際多元文化 | 33 | 33 | 21 |
| | | 社会人特別選抜 | 日本語文化 | 1 | 1 | 1 |
| | | | 国際多元文化 | 4 | 4 | 4 |
| | | 高度専門職業人コース | 日本語文化 | 0 | 0 | 0 |
| | | | 国際多元文化 | 8 | 8 | 5 |
| 18年度 | 一般選抜 | 日本語文化 | 31 | 31 | 17 | |
| | | 国際多元文化 | 40 | 39 | 26 | |
| | 社会人特別選抜 | 日本語文化 | 3 | 3 | 2 | |
| | | 国際多元文化 | 3 | 3 | 2 | |
| | 高度専門職業人コース | 日本語文化 | 1 | 1 | 1 | |
| | | 国際多元文化 | 5 | 5 | 4 | |
| 博士後期課程 | 20年度 | 一般選抜 | 日本語文化 | 19 | 19 | 14 |
| | | | 国際多元文化 | 9 | 9 | 9 |
| | | 社会人特別選抜 | 日本語文化 | 0 | 0 | 0 |
| | | | 国際多元文化 | 2 | 2 | 2 |
| | 19年度 | 一般選抜 | 日本語文化 | 25 | 25 | 13 |
| | | | 国際多元文化 | 16 | 16 | 10 |
| | | 社会人特別選抜 | 日本語文化 | 0 | 0 | 0 |
| | | | 国際多元文化 | 1 | 1 | 0 |
| | 18年度 | 一般選抜 | 日本語文化 | 23 | 23 | 15 |
| | | | 国際多元文化 | 22 | 19 | 12 |
| | | 社会人特別選抜 | 日本語文化 | 0 | 0 | 0 |
| | | | 国際多元文化 | 3 | 3 | 2 |

参考:学生数(2008年9月1日現在)

| 課程 | 専攻 | 在籍者 | 留学生 |
|--------|--------|-----|-----|
| 博士前期課程 | 日本語文化 | 42 | 25 |
| | 国際多元文化 | 70 | 23 |
| 博士後期課程 | 日本語文化 | 59 | 33 |
| | 国際多元文化 | 53 | 20 |

データで見る研究科

2007年度 学生アンケート

[アンケート内容]以下の8項目について選択肢による回答を求め、最後に自由記載欄を置いた。

問1. シラバスは履修計画を立てるうえで役立ちましたか。 問2. あなたが受講している授業はあなたの専門性を培ううえで役立ちますか？

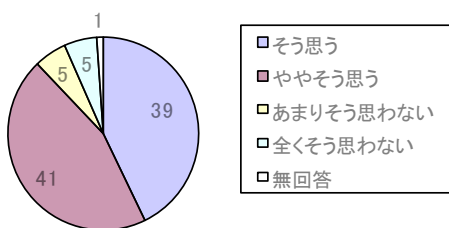
問3. 研究指導を定期的に受けていますか？ 問4. 研究指導に満足していますか？

問5. 研究設備(図書室を含む)や大学院学生控室は充実していますか？

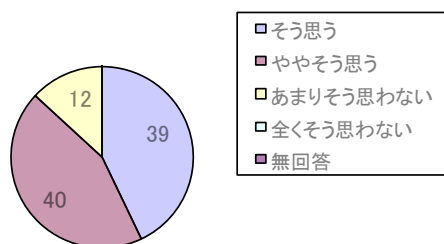
問6. 適切な経済支援(奨学金、授業料免除など)を受けていますか？

(注) 円グラフ中の数字は人数を示す。

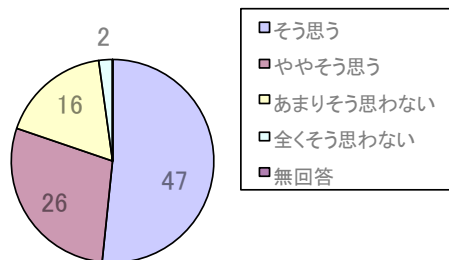
問1



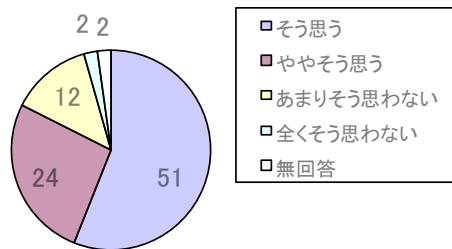
問2



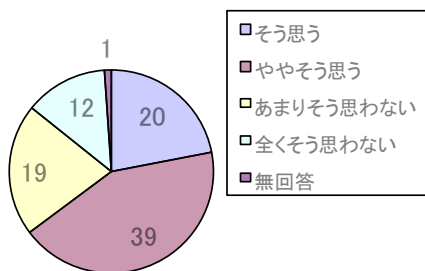
問3



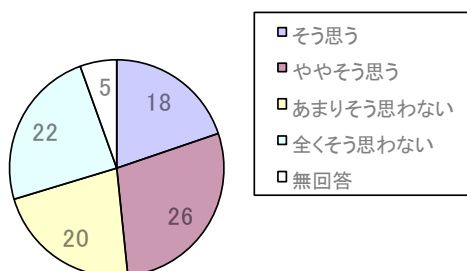
問4



問5



問6



データで見る研究科

2008年度 オープンキャンパスアンケート

[アンケート内容]以下の9項目について選択肢による回答を求め、最後に自由記載欄を置いた。

問1. 性別。 問2. 年齢。 問3. 職業 問4. 動機 問5. 情報はどこからえたか。

問6. 「10分間でわかる入試から修了までの仕組み」は志願への参考になったか。

問7. 「院生に尋ねる:国際言語文化研究科はどんなところ?」は志願への参考になったか。 問8. 「講座別オープンキャンパス」は志願への参考になったか。

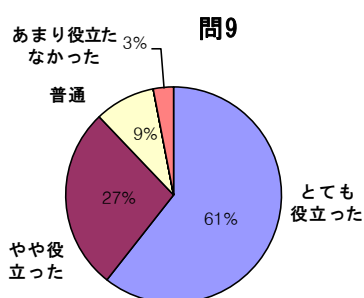
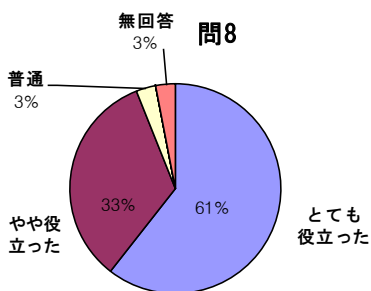
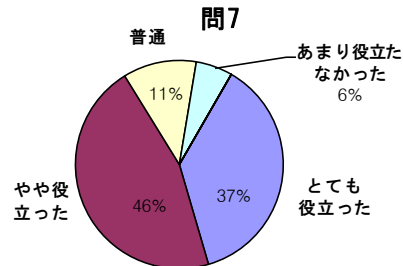
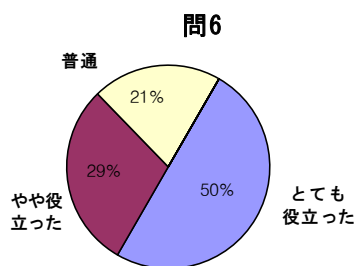
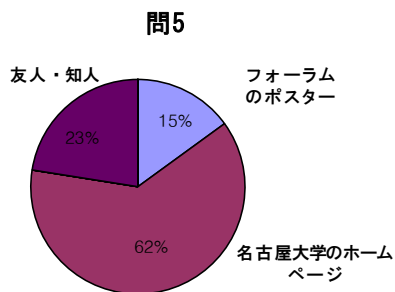
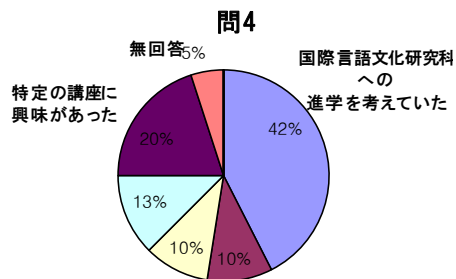
問9. 今回の企画は志願への参考になったか。

[アンケート内訳] (問1-3のグラフは省略した)

問1. 男性 15% 女性 85% 問2. 20-25歳 64%, 25-29歳 15%, 30歳代 8%, 40歳代 5%, 50歳代 5%, 無回答 3%

問3. 大学生 49%, 会社員 7%, 主婦 5%, 自営業 5%, 大学院生 3%, 専門学校生 3%, 公務員 3%, 教員 3%, その他 17%, 無回答 5%

問4. 名古屋大学内の大学院および他大学の大学院への進学を考えていた各 10% (薄紫、薄黄), 国際言語文化研究科の授業全般を知りたかった 13% (薄青)
(注) 参加者の居住県は愛知が 77%であった。



データで見る研究科

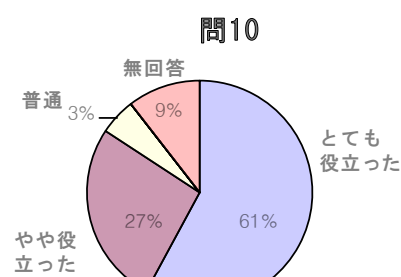
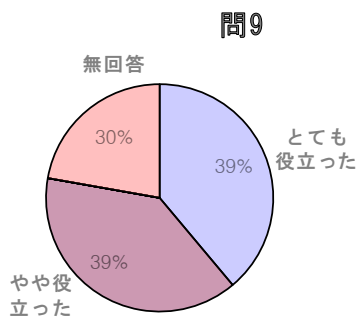
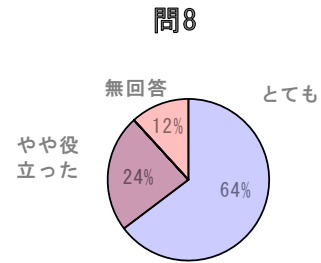
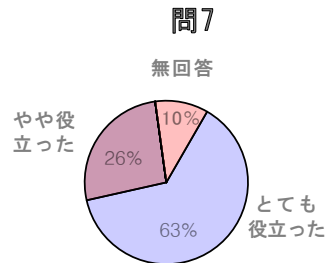
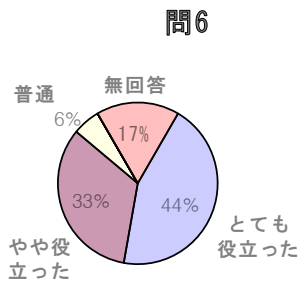
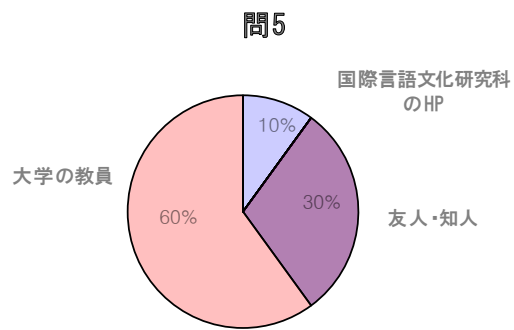
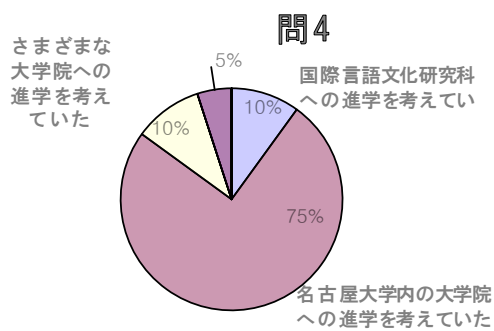
2008年度 上海入試説明会アンケート

[アンケート内容]以下の10項目について選択肢による回答を求め、最後に自由記載欄を置いた。

- 問1. 性別。 問2. 年齢。 問3. 職業 問4. 動機 問5. 情報はどこからえたか。
 問6. 「研究科の魅力」は志願への参考になったか。 問7. 「10分間でわかる入試・授業・修了・就職」は志願への参考になったか。
 問8. 「スカイプで結び、院生に尋ねる:国際言語文化研究科はどんなところ?」は志願への参考になったか。
 問9. 「個別相談」は志願への参考になったか。 問10. 入試説明会参加は志願への参考になったか。

[アンケート内訳](問1-3のグラフは省略した)

- 問1. 男性 35% 女性 65% 問2. 20-25歳 100% 問3. 大学生 100% (注) 参加者の現在の居住都市は上海が70%であった。
 問4. 国際言語文化研究科の授業全般を知りたかった 5%(濃紫)



データで見る研究科

■研究科長所見

学生アンケート

認証評価への対応で揺れ動いた 2007 年度において研究科が丸となって取り組んだ課題は、きめ細やかな研究指導を徹底して行うという点でした。アンケート問 3 と問 4 の結果では、「そう思う」と「ややそう思う」と回答したのは 73 名、75 名（回答者総数は 91 名であり、それぞれ 80%、82%となる）であり、多くの学生が個別研究指導を定期的に受けており、その内容にも満足していることを示しています。一方において研究設備、経済支援などの面では、まだ改善の余地が残されています。2008 年 4 月 30 日に開催した「研究科長と学生代表との対話集会」においても、教育環境の改善への要望がもっとも多く寄せられており、今後一層さまざまなかたちの学生支援に力を注いでいく必要があると思われます。

オープンキャンパスアンケート

2008 年度は研究科広報活動を活発に行うことを計画し、6 月 7 日には東京（八重洲ホール）、6 月 16 日には京都（メルパルク）において国際言語文化研究科入試説明会を開催しました。6 月 28 日のオープンキャンパスはそれを受けて研究科広報活動のメインプログラムとして実施されました。第 1 部は研究科紹介、院生とのクエスチョン・タイムを中心とする内容であり、第 2 部では 12 講座、2 コースの教授陣による模擬授業、ミニレクチャーなどが行われました。アンケート結果を見るかぎり、情報源としては圧倒的に研究科ホームページが多く、専攻HP、講座HPなどとともに、さらに充実させていく必要があります。

上海入試説明会アンケート

2008 年 7 月 28 日に国際言語文化研究科入試説明会を名古屋大学上海事務所において実施し、入学試験の概要説明と個別相談を行いました。夏休み中であるにもかかわらず午前午後合わせて 34 名が今回の説明会に参加しましたが、その多くは学部 3 年を終えて 9 月から 4 年になる学生たちでした。午前の部に参加した学生の中には、列車でわざわざ 9 時間もかけてこの説明会に出席した山東大学の 4 名の学生が含まれています。両親あるいは一方の親が同伴して説明会に来た学生も数名おり、教育熱心な中国の事情を垣間見る思いがしました。スカイプを利用したテレビ会議も事務所の通信能力の問題のため危ぶまれていましたが、研究科ラウンジに待機させていた 3 名の学生と、上海説明会に参加した学生との直接対話も予定通り実施することができました。アンケートを見るかぎり、多くの参加者はこの説明会が「とても役に立った」と答えており、成功裡に終わったことを示しています。



データで見る研究科

2007年度 就職・進学状況

■博士前期課程

| | 修了者 | 進学者 | 就職者 | | | | | | 未内 定者 | その他 |
|-------------------|-----|-----|----------|-----------|----------|--------------------------|-----|----------|----------|-----|
| | | | 教 員 | | | 教員以 外の専 門的技 術職業 | 官公庁 | 民間 企業 | | |
| | | | 大学 大学 | 大学 非常勤 | 大学 以外 | | | | | |
| 人数 | 49 | 14 | 0 | 0 | 3 | 1 | 0 | 10 | 6 | 15 |
| 修了者 に対する 割合 | | 29% | 0% | 0% | 6% | 2% | 0% | 20% | 12% | 31% |

- ✚ 韓国弘益大学, 愛知県・市立高校(4名), 佐賀県立高校
- ✚ 日本国際協力センター, アサヒビール, ダイハツ, ぴあ, 愛知電機, キャリアバンク, ユニエックス, ブロードメディア, 名古屋シュランク, アマダ 工業, NISグループ, レオパレス

■博士後期課程

| | 修了者及 び単位 認定の 退学者 | 就職者 | | | | | | | 未内 定者 | その他 |
|-----------------------|---------------------------|----------|-----------|----------|---------------|------------------|-----|----------|----------|-----|
| | | 教 員 | | | 特別研究員等 に採用 | 教員以外の専 門的技術職業 | 官公庁 | 民間 企業 | | |
| | | 大学 専任 | 大学 非常勤 | 大学 以外 | | | | | | |
| 人数 | 29 | 1 | 2 | 2 | 0 | 1 | 0 | 2 | 4 | 17 |
| 修了及び退 学者に対す る割合 | | 3% | 7% | 7% | 0% | 3% | 0% | 7% | 14% | 59% |

- ✚ 名古屋大学, 南山大学, 名古屋外国語大学, 日本福祉大学, 名古屋商科大学
- ✚ 愛知教育大学付属高校, 愛知県立高校, 岡山县立高校
- ✚ エイズ予防財団, アマダワシ

就職状況への 研究科長所見

研究科の教育研究プログラムを通して優れた人材を育成することが研究科のミッションであるとすれば、修了生の就職状況は研究科の社会貢献の度合いを測るバロメーター(指標)となります。この就職・進学状況を見るかぎり、研究科修了生は大学教員などの研究職につく例が多いのですが、今後は産業界(メディア業界を含む)にも多くの修了生が進出していくことが重要な課題となります。留学生 30万人計画では、留学生は修了後に帰国することなく日本社会に定着して活躍することが求められており、研究科としてもそのための組織的支援をしていく必要があります。

データで見る研究科

■就職先(2006年度以前)

■大学・研究機関(専任職)

【国内】東海圏

名古屋大学 愛知教育大学 南山大学 名古屋外国語大学 椋山女学園大学 名古屋女子大学 愛知淑徳大学
中部大学 星城大学 東邦学園大学 愛知学院大学 豊橋技術科学大学 岐阜大学 岐阜医療大学
静岡県立大学

【国内】東海圏外

北海道大学 東北大学 東京外国語大学 東京学芸大学 筑波大学 一橋大学 福井大学 富山大学 信州大学
大阪大学 大手前大学 同志社女子大学 立命館大学 甲南女子大学 広島経済大学 広島女学院大学
愛媛大学 福岡大学

【国外】

清華大学 北京第二外国語学院 上海海運学院 大連外国語学院 大連大学 南通大学 台湾大学 淡江大学
(台湾) 東呉大学(台湾) 銘伝大学(台湾) 江原大学校(韓国) 昌原大学校(韓国) University Tenaga
National(シンガポール) インドネシア教育大学

■民間企業(順不同)

中日新聞社 日本経済新聞社 電通 リクルート 三洋電機 富士通 富士通中部システムズ 日立製作所
三菱東京UFJ銀行 愛知国際放送 NTTコミュニケーションズ アイシン精機 人民日報社 図書刊行会 アニメイト
ROSECC 技研製作所 トラスコスモス アドヴィックス 卓亜JAPAN 小林記録紙 トランスアメリカインターナショナル
エヌ・アイ・エス CDS株式会社 ヒューマンリソシア クオニイジャパン サーチナ 東明エンジニアリング インタラック
多摩川精機 トスコ カズテクニカ 情報文化研究所 和之旅 クララオンライン 松尾製作所 NHK中部ブレンズ
ビートップスタッフ 豊田合成株式会社 トヨタツーリスト インターネットソリューションリミテッド香港
Technology Promotion Association、 Plan Do See 河村電器産業 インターフロンティア 情報ベンチャー協同組合
Active Filmmarks ブレーンセンター プロトコーポレーション ピープルスタッフ IR-ALT勤務 セントラル通商
小寺電子製作所 ヤマザキマザック 日本空調サービス システムリサーチ グリフィス・ラボラトリーズ ユニバーサル
日本メーブルリーフフーズ ポッシュオートモーティブシステム 豊田通商 高砂電気工業 熱金鋼業 日南商事
浜木綿 IVIS アドヴィックス 東海理化販売 日本ユニカシステム 服良

■財団(順不同)

(財)日本体育協会 (財)とやま国際センター (財)しまね国際センター研修館 (財)海外技術者研修協会

■その他(順不同)

大阪児童文学館 愛知県警察 豊田北高等学校 熱田高校 名古屋韓国学校 学校法人椋山女学園 中京学院
愛知県立尾北高等学校 愛知県立刈谷高等学校 名古屋大谷高等学校 愛知啓成高等学校 藤岡町立藤岡中学校
静岡細江町立細江中学 名古屋市立中学 TIC日本語学校 静岡日本語教育センター 普遍学国際研究所
インタースクール名古屋校 国際技術翻訳センター 岐阜県庁 国際交流基金海外派遣日本語教育専門家
国際協力事業団(青年協力隊) 愛知県豊田児童相談所

Graduate School of Languages and Cultures

13

General Information

The Graduate School of Languages and Cultures (GSLC) conducts research and offers opportunities for graduate study in a wide variety of languages and cultures, with an emphasis on critical and theoretical as well as practical approaches to the diverse issues of modern Japanese and international society.

Objectives

The main objectives of the GSLC are as follows:

✧ Research

To conduct fundamental, applied, and interdisciplinary research into a wide range of topics related to languages and cultures.

✧ Education

To equip students with the essential theoretical knowledge and practical skills necessary for them to contribute effectively to the development of international understanding and cooperation.

✧ Internationalization

To promote internationalization by actively undertaking the training of international students and overseas-educated Japanese students and fostering deeper international understanding of Japan, particularly by introducing Japanese language and culture to the world.

✧ Outreach

To develop evening courses to provide graduate level education in language and culture specially tailored to meet the needs of people who work at government offices, private enterprises, and educational institutions.

✧ Languages and Cultures

To improve the quality of language learning and to promote cultural education through Nagoya University.

Department of Japanese Language and Culture

The fundamental aim of the programs offered by this department is to enable the student to grasp the nature of Japanese language and culture from the perspective of modern theories of language, cultural relativity and comparative culture. A further aim is the development of Japanese language pedagogical approaches, drawing on pedagogical theory and an international perspective.

➤ Japanese Language and Cultural Studies

The aims of this program are to analyze, both from the diachronic and the synchronic perspective, issues pertaining to Japanese language and culture in terms of their relationship to intercultural relations; to develop a methodology for the treatment of these issues as they manifest themselves both as particulars and as universals; and to view, from both an academic and a pragmatic perspective, the development of Japanese language and culture.

➤ Teaching Japanese as a Foreign Language

From the perspective of the basic theory of Japanese language education, this program aims to investigate both the structures and functions of Japanese language; to develop theories of Japanese language pedagogy while examining their validity in terms of practical application; and to work toward the refinement of both Japanese language education pedagogy and Japanese language education programs.

Graduate School of Languages and Cultures

➤ Applied Linguistics

This program aims to build a scientifically-grounded, basic theory of language education and investigate practical theories on the acquisition and use of language from the perspectives of psycholinguistics, language education technology and theories of informatics.

➤ Comparative Culture

From the vantage point of Japanese culture as part of world culture, this program aims to carry out comparative studies of Japanese and non-Japanese cultures from the perspective of theories of comparative culture and of semiotics; to work toward a general theory of cultural phenomena; and to develop a cultural basis for teaching Japanese as a foreign language.

➤ Japanese Linguistics

Through lectures and seminars, this program aims to carry out a systematic study of the main fields of Japanese linguistic research including Japanese phonetics, grammar, semantics, and pragmatics and to develop students' understanding of the criteria for undertaking advanced, independent research in the field of Japanese linguistics.

➤ Educational Methodology of Japanese as a Foreign Language

Based on the three tenets of Japanese language education – grammar, discourse, and acquisition – this course focuses on the needs of Japanese-learners. In so doing it will concentrate on issues such as: the development of educational objectives, the design of appropriate contents and classroom activities and methods of evaluation. We also investigate the effects of utilizing computer technology as a teaching method and consider whether such technology heralds new possibilities for Japanese language education.

Department of Multicultural Studies

The programs offered by this department are designed to help students develop, principally from the perspective of linguistic and cultural studies, a theoretical and practical understanding of the nature of multiculturalism throughout the world and of the world's rapidly-evolving linguistic and cultural phenomena. A second aim is to work towards practical solutions to the various problems related to contemporary developments in language and culture. The Department of Multicultural Studies consists of six academic sections and two professional training courses. The graduate study programs offered by these sections and courses are as follows.

➤ Multicultural Studies

This program looks at the multicultural societies of the various regions of the world with a special emphasis on the problems of class, ethnicity, race, sexuality and prejudice; it aims to equip students with a theoretical basis for an understanding of the challenges of coexistence among cultures and, based on this understanding, to work towards finding practical solutions to these problems.

➤ Contemporary Arts and Cultural Studies

This program aims to provide students with an up-to-date understanding of the world situation in light of the various contemporary arts and cultures emerging throughout the world and to develop a cutting-edge theoretical understanding of the relationship between historical eras, geographical regions and cultural developments.

➤ Studies of the Americas

From the vantage point of the modern languages and cultures of North and South America, this program aims to give students a practical means for grasping the ethnic, racial, religious and environmental problems faced by the various regions and, based on this understanding, to work towards developing practical solutions to these problems.

➤ East Asian Studies

Focusing on the modern languages and cultures of East Asia, this program offers instruction in the structures of Chinese, Korean and Russian cultures as well as the issue of ethnic consciousness and helps students develop a practical grasp of the problems pertaining to these issues; based on this understanding, it works toward finding practical solutions for these problems.

➤ European Studies

From the perspective of the modern languages and cultures of Europe, this program is designed to help students gain an understanding of the cultural issues concerning the dissolution and reunification of European states and develop a grasp of the problems pertaining to these issues; based on this understanding, it seeks to work towards the development of practical solutions to these problems.

Graduate School of Languages and Cultures

➤ Gender Studies

The Gender Studies at Nagoya University (GENA) program conducts teaching and research into a wide range of issues relating to women, men, gender and sexuality. Along with exploring questions of gender difference and sexual identity in literature, philosophy, psychoanalysis, and economics, GENA seeks to establish an interdisciplinary conceptual framework that involves feminist, gay and lesbian, and queer studies.

➤ Media Professional Course

Through its distinctive combination of academic education and practical training (including internships and many courses taught by practicing media professionals), this course aims to develop students' potential to become highly-skilled and reflective media practitioners, scholars and teachers: professionals who can not only contribute effectively to the cutting-edge of today's media industries, scholarship and education but also lead the way towards the information society of tomorrow. A unique aspect of the Masters program offered by this course is that students may

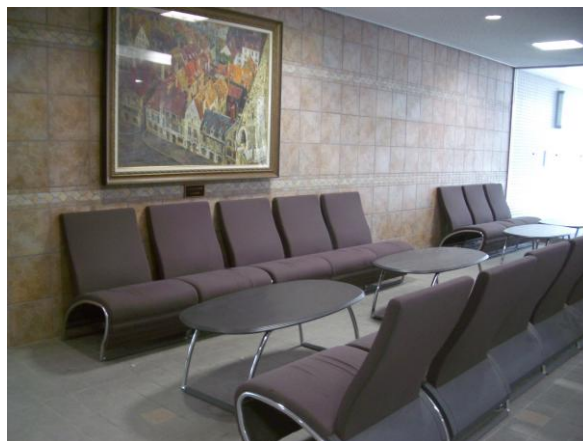
choose to graduate either by writing an MA thesis or by producing a piece of media work, such as a documentary film, radio program or series of newspaper feature articles.

➤ Professionals' Training Course

The program offered by this course aims to help students develop the knowledge and skills that they need for success in their careers as highly-specialized professionals. It is designed to help students achieve a sound knowledge of foreign languages and cultures so that they can contribute to regional development from an international point of view. In particular, the program places great emphasis on helping students to develop their ability to use English as a tool for international communication.

For further information about the Graduate School of Languages and Cultures, please contact the Educational Affairs Office:

The Educational Affairs Office
Graduate School of Languages and Cultures
Nagoya University
B-4 (700) Furo-cho Chikusa-ku Nagoya 464-8601, JAPAN
Tel: +81-52-789-4881
Fax: +81-52-789-4921
E-mail: gen-jim@post.jimu.nagoya-u.ac.jp



Subjects and Classes

Department of Japanese Language and Culture

| 科目名(単位数) | 担当教員 | 担当教員 | 英文名 |
|--|------|--------------------|---|
| 日本語文化学/Japanese Language and Cultural Studies | | | |
| 言語文化学原論 a (2) | 柴田庄一 | SHIBATA, Shoichi | Principles of Studies of Languages and Cultures a |
| 言語文化学原論 b (2) | 柴田庄一 | SHIBATA, Shoichi | Principles of Studies of Languages and Cultures b |
| 言語文化学方法論 a (2) | 福田真人 | FUKUDA, Mahito | Methodology of Literary and Cultural Studies a |
| 言語文化学方法論 b (2) | 福田真人 | FUKUDA, Mahito | Methodology of Literary and Cultural Studies b |
| 言語文化交流論 a (2) | 涌井 隆 | WAKUI, Takashi | Studies of Cross-cultural Relations a |
| 言語文化交流論 b (2) | 涌井 隆 | WAKUI, Takashi | Studies of Cross-cultural Relations b |
| 日本語教育学/Teaching Japanese as a Foreign Language | | | |
| 日本語教育学原論 a (2) | 小坂光一 | KOSAKA, Koichi | Principles of Teaching Japanese as a Foreign Language a |
| 日本語教育学原論 b (2) | 小坂光一 | KOSAKA, Koichi | Principles of Teaching Japanese as a Foreign Language b |
| 日本語教授法概論 a (2) | 鷺見幸美 | SUMI, Yukimi | Methods for Teaching Japanese as a Foreign Language a |
| 日本語教授法概論 b (2) | 鷺見幸美 | SUMI, Yukimi | Methods for Teaching Japanese as a Foreign Language b |
| 日本語教授法及び実習 (3) | 鷺見幸美 | SUMI, Yukimi | Methods for Teaching Japanese as a Foreign Language and Practicum |
| 対照表現論演習 I a (2) | 鷺見幸美 | SUMI, Yukimi | Contrastive Studies of Linguistic Expressions I (seminar) a |
| 対照表現論演習 I b (2) | 鷺見幸美 | SUMI, Yukimi | Contrastive Studies of Linguistic Expressions I (seminar) b |
| 対照表現論演習 II a (2) | 杉村 泰 | SUGIMURA, Yasushi | Contrastive Studies of Linguistic Expressions II (seminar) a |
| 対照表現論演習 II b (2) | 杉村 泰 | SUGIMURA, Yasushi | Contrastive Studies of Linguistic Expressions II (seminar) b |
| 第2言語習得研究概論 a (2) | 池田佳子 | IKEDA, Keiko | Issues in Second Language Acquisition Research a |
| 第2言語習得研究概論 b (2) | 池田佳子 | IKEDA, Keiko | Issues in Second Language Acquisition Research b |
| 辞書論 a (2) | 外池俊幸 | TONOIKE, Toshiyuki | Lexicography a |
| 辞書論 b (2) | 外池俊幸 | TONOIKE, Toshiyuki | Lexicography b |
| 応用言語学/Applied Linguistics | | | |
| 応用言語学概論 a (2) | 奥田智樹 | OKUDA, Tomoki | Introduction to Applied Linguistics a |
| 応用言語学概論 b (2) | 奥田智樹 | OKUDA, Tomoki | Introduction to Applied Linguistics b |

Subjects and Classes

| | | | |
|--|---------|-------------------|--|
| 言語習得論 a (2) | 井上 公 | INOUE, Isao | Language Acquisition a |
| 言語習得論 b (2) | 井上 公 | INOUE, Isao | Language Acquisition b |
| 応用言語学特殊研究(1) | (非)近藤健二 | KONDOH, Kenji | Special Lecture in Applied Linguistics |
| 比較日本文化学／Comparative Culture | | | |
| 比較社会制度論 a (2) | 胡 潔 | HU, Jie | Comparative Social Systems a |
| 比較社会制度論 b (2) | 胡 潔 | HU, Jie | Comparative Social Systems b |
| 比較文化学原論 a (2) | 前野みち子 | MAENO, Michiko | Principles of Comparative Studies of Cultures a |
| 比較文化学原論 b (2) | 前野みち子 | MAENO, Michiko | Principles of Comparative Studies of Cultures b |
| 比較芸術論 a (2) | 大庭正春 | OHBA, Masaharu | Studies of Comparative Aesthetics a |
| 比較芸術論 b (2) | 大庭正春 | OHBA, Masaharu | Studies of Comparative Aesthetics b |
| 比較文学論 a (2) | 渡邊美樹 | WATANABE, Miki | Studies of Comparative Literature a |
| 比較文学論 b (2) | 渡邊美樹 | WATANABE, Miki | Studies of Comparative Literature b |
| 日韓比較文化論 a (2) | 浮葉正親 | UKIBA, Masachika | Comparative Studies of Japanese and Korean Cultures a |
| 日韓比較文化論 b (2) | 浮葉正親 | UKIBA, Masachika | Comparative Studies of Japanese and Korean Cultures b |
| 比較日本文化学特論 a (2) | 伊藤信博 | ITOH, Nobuhiro | Special Seminar on Comparative Japanese Culture Studies a |
| 比較日本文化学特論 b (2) | 伊藤信博 | ITOH, Nobuhiro | Special Seminar on Comparative Japanese Culture Studies b |
| 現代日本語学／Japanese Linguistics | | | |
| 現代日本語学概論 a (2) | 初山洋介 | MOMIYAMA, Yousuke | Studies of Modern Japanese a |
| 現代日本語学概論 b (2) | 初山洋介 | MOMIYAMA, Yousuke | Studies of Modern Japanese b |
| 日本語音声学 a (2) | 鹿島 央 | KASHIMA, Tanomu | Japanese Phonetics a |
| 日本語音声学 b (2) | 鹿島 央 | KASHIMA, Tanomu | Japanese Phonetics b |
| 日本語文法論 a (2) | 李 澤熊 | LEE, Tack Ung | Syntax and Semantics of Japanese a |
| 日本語文法論 b (2) | 李 澤熊 | LEE, Tack Ung | Syntax and Semantics of Japanese b |
| 日本語教育方法論／Educational Methodology of Japanese as a Foreign Language | | | |
| 日本語教育評価論 a (2) | 村上京子 | MURAKAMI, Kyoko | Studies of Evaluation in Teaching Japanese as a Foreign Language a |
| 日本語教育評価論 b (2) | 村上京子 | MURAKAMI, Kyoko | Studies of Evaluation in Teaching Japanese as a Foreign Language b |
| コンピューター支援日本語教育方法論 a (2) | 石崎俊子 | ISHIZAKI, Toshiko | Methods in Computer Assisted Japanese Language Education a |

Subjects and Classes

| | | | |
|-------------------------|------|-------------------|--|
| コンピューター支援日本語教育方法論 b (2) | 石崎俊子 | ISHIZAKI, Toshiko | Methods in Computer Assisted Japanese Language Education b |
| 日本語教育方法論概説 a (2) | 衣川隆生 | KINUGAWA, Takao | Introduction to Japanese Language Education Methodology a |
| 日本語教育方法論概説 b (2) | 衣川隆生 | KINUGAWA, Takao | Introduction to Japanese Language Education Methodology b |
| 共通 | | | |
| 言語文化表現技術実習 (2) | | | Practical Techniques for Language and Culture Expression |

(客) : 客員教授 (非) : 非常勤講師

Department of Multicultural Studies

| 科目名 (単位数) | 担当教員 | 担当教員 | 英文名 |
|--|-------|-----------------------|---|
| 多元文化論/Multicultural Studies | | | |
| 多元比較表象論 a (2) | 鈴木繁夫 | SUZUKI, Shigeo | Studies of Representations in Interdisciplinary History a |
| 多元比較表象論 b (2) | 鈴木繁夫 | SUZUKI, Shigeo | Studies of Representations in Interdisciplinary History b |
| 異文化接触論演習 a (2) | 田所光男 | TADOKORO, Mitsuo | Studies of Cultural Frictions (seminar) a |
| 異文化接触論演習 b (2) | 田所光男 | TADOKORO, Mitsuo | Studies of Cultural Frictions (seminar) b |
| 主体形成論 a (2) | 松本伊瑳子 | MATSUMOTO, Isako | Studies of Ego-Formation a |
| 主体形成論 b (2) | 松本伊瑳子 | MATSUMOTO, Isako | Studies of Ego-Formation b |
| 現代文化思想分析論演習 a (2) | 飯野和夫 | IINO, Kazuo | Analysis of Modern Western Culture and Thought a |
| 現代文化思想分析論演習 b (2) | 飯野和夫 | IINO, Kazuo | Analysis of Modern Western Culture and Thought b |
| 国際文化学概論 a (2) | ポッター | POTTER, Simon Raymond | Intoroductory Studies of International Culture a |
| 国際文化学概論 b (2) | ポッター | POTTER, Simon Raymond | Intoroductory Studies of International Culture b |
| 先端文化論/Contemporary Arts and Cultural Studies | | | |
| 先端文化思想論 a (2) | 越智和弘 | OCHI, Kazuhiro | Studies of Contemporary Thought and Ideas a |
| 先端文化思想論 b (2) | 越智和弘 | OCHI, Kazuhiro | Studies of Contemporary Thought and Ideas b |
| 前衛芸術概論 a (2) | 藤井たぎる | FUJII, Tagiru | Introduction to Theories of Avant-garde Arts a |
| 前衛芸術概論 b (2) | 藤井たぎる | FUJII, Tagiru | Introduction to Theories of Avant-garde Arts b |
| 現代民主主義特論 a (2) | 布施 哲 | FUSE, Satoshi | Advanced Studies of Contemporary Democracy a |

Subjects and Classes

| | | | |
|------------------------------------|-------|-----------------------|---|
| 現代民主主義特論 b (2) | 布施 哲 | FUSE, Satoshi | Advanced Studies of Contemporary Democracy b |
| 現代先端文化分析演習 a (2) | 山口庸子 | YAMAGUCHI, Yoko | Analysis of Contemporary Western Performing Arts(seminar) a |
| 現代先端文化分析演習 b (2) | 山口庸子 | YAMAGUCHI, Yoko | Analysis of Contemporary Western Performing Arts(seminar) b |
| 南北アメリカ言語文化/Studies of the Americas | | | |
| 現代アメリカ文化論 a (2) | 長畑明利 | NAGAHATA, Akitoshi | Studies of Modern and Contemporary American Culture a |
| 現代アメリカ文化論 b (2) | 長畑明利 | NAGAHATA, Akitoshi | Studies of Modern and Contemporary American Culture b |
| 現代アメリカ社会史特論 a (2) | 水野由美子 | MIZUNO, Yumiko | Studies of American Social History a |
| 現代アメリカ社会史特論 b (2) | 水野由美子 | MIZUNO, Yumiko | Studies of American Social History b |
| 中南米言語表現論演習 a (2) | 水戸博之 | MITO, Hiroyuki | Analysis of Languages of Latin America(seminar) a |
| 中南米言語表現論演習 b (2) | 水戸博之 | MITO, Hiroyuki | Analysis of Languages of Latin America(seminar) b |
| 社会言語学入門 a (2) | モリタ | MORITA, Liang Chua | Introduction to Sociolinguistics a |
| 社会言語学入門 b (2) | モリタ | MORITA, Liang Chua | Introduction to Sociolinguistics b |
| 東アジア言語文化/East Asian Studies | | | |
| 漢民族文化論 a (2) | 楊 曉文 | YANG, Xiaowen | Studies of Chinese Culture a |
| 漢民族文化論 b (2) | 楊 曉文 | YANG, Xiaowen | Studies of Chinese Culture b |
| 現代中国語表現論演習 a (2) | 勝川裕子 | KATSUKAWA, Yuko | Studies of Modern Chinese Expressions(seminar) a |
| 現代中国語表現論演習 b (2) | 勝川裕子 | KATSUKAWA, Yuko | Studies of Modern Chinese Expressions(seminar) b |
| 東アジア言語論演習 a (2) | 柳沢民雄 | YANAGISAWA, Tamio | Studies of East Asian Languages(seminar) a |
| 東アジア言語論演習 b (2) | 柳沢民雄 | YANAGISAWA, Tamio | Studies of East Asian Languages(seminar) b |
| 韓国・朝鮮語表現論演習 a (2) | 飯田秀敏 | IIDA, Hidetoshi | Studies of Korean Expressions(seminar) a |
| 韓国・朝鮮語表現論演習 b (2) | 飯田秀敏 | IIDA, Hidetoshi | Studies of Korean Expressions(seminar) b |
| 現代中国語表現論 a (2) | 丸尾 誠 | MARUO, Makoto | Studies of Modern Chinese Usage a |
| 現代中国語表現論 b (2) | 丸尾 誠 | MARUO, Makoto | Studies of Modern Chinese Usage b |
| 日中対照表現演習 a (2) | 勝川裕子 | KATSUKAWA, Yuko | Contrastive Studies of Japanese and Chinese Expressions(seminar) a |
| 日中対照表現演習 b (2) | 勝川裕子 | KATSUKAWA, Yuko | Contrastive Studies of Japanese and Chinese Expressions(seminar) b |
| 現代中国語表現技術演習 a (2) | 丸尾 誠 | MARUO, Makoto | Expressional Technique of Modern Chinese(seminar) a |
| 現代中国語表現技術演習 b (2) | 丸尾 誠 | MARUO, Makoto | Expressional Technique of Modern Chinese(seminar) b |

Subjects and Classes

| ヨーロッパ言語文化/European Studies | | | |
|----------------------------|-------|------------------------|---|
| トランスレーション 言説分析論 a (2) | 吉村正和 | YOSHIMURA, Masakazu | Translation and Discourse Analysis a |
| トランスレーション 言説分析論 b (2) | 吉村正和 | YOSHIMURA, Masakazu | Translation and Discourse Analysis b |
| ヨーロッパ都市文化論 a (2) | 松岡光治 | MATSUOKA, Mitsuharu | Socio-Historic Analysis of European Urban Culture a |
| ヨーロッパ都市文化論 b (2) | 松岡光治 | MATSUOKA, Mitsuharu | Socio-Historic Analysis of European Urban Culture b |
| ヨーロッパ文化 分析批評論 a (2) | 上原早苗 | UEHARA, Sanae | Research Methodology for European Studies a |
| ヨーロッパ文化分析 批評論 b (2) | 上原早苗 | UEHARA, Sanae | Research Methodology for European Studies b |
| ヨーロッパ文化芸術論 a (2) | 西川智之 | NISHIKAWA, Tomoyuki | European Art and Culture a |
| ヨーロッパ文化芸術論 b (2) | 西川智之 | NISHIKAWA, Tomoyuki | European Art and Culture b |
| 国際社会学演習 a (2) | 鶴巻泉子 | TSURUMAKI, Motoko | International Sociology a |
| 国際社会学演習 b (2) | 鶴巻泉子 | TSURUMAKI, Motoko | International Sociology b |
| 現代ドイツ語 表現技術演習 a (2) | ペーターズ | PETERS, Joerg | Contemporary German Expressions(seminar) a |
| 現代ドイツ語 表現技術演習 b (2) | ペーターズ | PETERS, Joerg | Contemporary German Expressions(seminar) b |
| 現代フランス語 表現技術演習 a (2) | デュクロ | DUCROS, Garance | Contemporary French Expressions(seminar) a |
| ジェンダー論/Gender Studies | | | |
| ジェンダーと経済 a (2) | 新井美佐子 | ARAI, Misako | Gender and Economics a |
| ジェンダーと経済 b (2) | 新井美佐子 | ARAI, Misako | Gender and Economics b |
| ジェンダーと文学 a (2) | 星野幸代 | HOSHINO, Yukiyo | Gender and Literature a |
| ジェンダーと文学 b (2) | 星野幸代 | HOSHINO, Yukiyo | Gender and Literature b |
| ジェンダーとセクシュアリティ a (2) | 谷本千雅子 | TANIMOTO, Chikako | Gender and Sexuality a |
| ジェンダーとセクシュアリティ b (2) | 谷本千雅子 | TANIMOTO, Chikako | Gender and Sexuality b |
| 共通 | | | |
| 言語文化表現技術実習 (2) | | | Practical Techniques for Language and Culture Expression |

(客) : 客員教授 (非) : 非常勤講師

Subjects and Classes

Media Professional Course

| | 科目名 (単位数) | 担当教員 | 担当教員 | 英文名 |
|--------|--------------------------|-----------|---------------------|---|
| A 類 | 現代ジャーナリズム論 a (2) | 春名幹男 | HARUNA, Mikio | Studies on Modern Journalism a |
| | 現代ジャーナリズム論 b (2) | 春名幹男 | HARUNA, Mikio | Studies on Modern Journalism b |
| | 新聞現場論 a (2) | (客)田島暁 | TAJIMA, Satoru | Practical Newspaper Reporting a |
| | 新聞現場論 b (2) | (客)田島暁 | TAJIMA, Satoru | Practical Newspaper Reporting b |
| | メディアテクノロジー論 (2) | (客)川嶋典士 | KAWASHIMA, Norihito | Media Technology |
| | デジタルメディア論 (2) | (客)水野雅男 | MIZUNO, Masao | Digital Media |
| | 放送メディア史論 (2) | (客)長縄年延 | NAGANAWA, Toshinobu | Broadcasting and Media History |
| | テレビ報道論 (2) | (非)中森他 | NAKAMORI, Masayoshi | Television Broadcasting |
| | 報道社会論 I a (2) | 春名幹男 | HARUNA, Mikio | Social Studies on Journalism I a |
| | 報道社会論 I b (2) | 春名幹男 | HARUNA, Mikio | Social Studies on Journalism II b |
| | 報道社会論 II a (2) | 春名幹男 | HARUNA, Mikio | Social Studies on Journalism II a |
| | 報道社会論 II b (2) | 春名幹男 | HARUNA, Mikio | Social Studies on Journalism II b |
| | メディアコンテンツ制作論 a (2) | 後藤明史 | GOTO, Akifumi | Media Contents Production a |
| | メディアコンテンツ制作論 b (2) | 後藤明史 | GOTO, Akifumi | Media Contents Production b |
| | 広告戦略論 a (2) | (客)金川昇平 | KANAGAWA, Syohei | Advertising Strategies a |
| | 広告戦略論 b (2) | (客)金川昇平 | KANAGAWA, Syohei | Advertising Strategies b |
| | 民間放送事業論 (2) | (非)木村他 | KIMURA, Nobuyoshi | Studies of Commercial Broadcasting Business |
| | メディアプロフェッショナル技術実習 (2) | (客)田島暁 | TAJIMA, Satoru | Media Techniques Training |
| | メディアプロフェッショナル論特殊研究 I (1) | (非)木ノ下智恵子 | KINOSHITA, Chieko | Special Studies in Media I |
| B 類 | メディア・スタディーズ概論 a (2) | 八幡耕一 | YAWATA, Koichi | Introduction to Media Studies a |
| | メディア・スタディーズ概論 b (2) | 八幡耕一 | YAWATA, Koichi | Introduction to Media Studies b |
| | エコ・コミュニケーション論 a (2) | 加藤貞通 | KATO, Sadamichi | Eco-Communication Studies a |
| | エコ・コミュニケーション論 b (2) | 加藤貞通 | KATO, Sadamichi | Eco-Communication Studies b |
| | 身体文化論 a (2) | 村主幸一 | MURANUSHI, Koichi | Studies of Corporeality a |
| | 身体文化論 b (2) | 村主幸一 | MURANUSHI, Koichi | Studies of Corporeality b |

Subjects and Classes

| | | | | |
|--------|-------------------------|-----------|-------------------|---|
| B 類 | 広告文化論 a (2) | 古田香織 | FURUTA, Kaori | Cultural Studies of Advertisements a |
| | 広告文化論 b (2) | 古田香織 | FURUTA, Kaori | Cultural Studies of Advertisements b |
| | 社会情報学概論 a (2) | 金 相美 | KIM, Sangmi | Communication Technology and Culture a |
| | 社会情報学概論 b (2) | 金 相美 | KIM, Sangmi | Communication Technology and Culture b |
| | メディアディスコース分析論 a (2) | ヘイグ | HAIG, Edward | Media Discourse Analysis a |
| | メディアディスコース分析論 b (2) | ヘイグ | HAIG, Edward | Media Discourse Analysis b |
| | 映像メディア製作理論 a (2) | 池側隆之 | IKEGAWA, Takayuki | Film Production and Media Design Theory a |
| | 映像メディア製作理論 b (2) | 池側隆之 | IKEGAWA, Takayuki | Film Production and Media Design Theory b |
| | 異文化コミュニケーション論 a (2) | 田中京子 | TANAKA, Kyoko | Intercultural Communication a |
| | 異文化コミュニケーション論 b (2) | 田中京子 | TANAKA, Kyoko | Intercultural Communication b |
| | メディアプロフェッショナル論特殊研究Ⅱ (1) | (非) 有道 出人 | ARUDOH, Debito | Special Studies in Media Ⅱ |
| | メディアプロフェッショナル論特殊研究Ⅲ (1) | | | Special Studies in Media Ⅲ |

(客) : 客員教授 (非) : 非常勤講師

Professionals' Training Course

| | 科目名 (単位数) | 担当教員 | 担当教員 | 英文名 |
|--------|---------------------|------|---------------------|--|
| A 類 | 日本語文化特殊講義 I a (2) | 涌井 隆 | WAKUI, Takashi | Special Lectures on Japanese Language and Culture I a |
| | 日本語文化特殊講義 I b (2) | 涌井 隆 | WAKUI, Takashi | Special Lectures on Japanese Language and Culture I b |
| | 日本語文化特殊講義 II a (2) | 渡邊美樹 | WATANABE, Miki | Special Lectures on Japanese Language and Culture II a |
| | 日本語文化特殊講義 II b (2) | 渡邊美樹 | WATANABE, Miki | Special Lectures on Japanese Language and Culture II b |
| | 国際多元文化特殊講義 I a (2) | 吉村正和 | YOSHIMURA, Masakazu | Special Lectures on Multicultural Studies I a |
| | 国際多元文化特殊講義 I b (2) | 吉村正和 | YOSHIMURA, Masakazu | Special Lectures on Multicultural Studies I b |
| | 国際多元文化特殊講義 II a (2) | 上原早苗 | UEHARA, Sanae | Special Lectures on Multicultural Studies II a |
| | 国際多元文化特殊講義 II b (2) | 上原早苗 | UEHARA, Sanae | Special Lectures on Multicultural Studies II b |

Subjects and Classes

| | | | | |
|--------|-------------------|-----------------|--------------------------|-----------------------------------|
| B 類 | 英語表現演習 I a (2) | ポッター | POTTER, Simon Raymond | Practical English Usage I a |
| | 英語表現演習 I b (2) | ポッター | POTTER, Simon Raymond | Practical English Usage I b |
| | 英語表現演習 II a (2) | ヘイグ | HAIG, Edward | Practical English Usage II a |
| | 英語表現演習 II b (2) | ヘイグ | HAIG, Edward | Practical English Usage II b |
| | 英語表現演習 III a (2) | (非)アーム ストロング | ARMSTRONG, Christpher | Practical English Usage III a |
| | 英語表現演習 III b (2) | (非)アーム ストロング | ARMSTRONG, Christpher | Practical English Usage III b |
| | 英語表現演習 IV a (2) | モリタ | MORITA, Liang Chua | Practical English Usage IV a |
| | 英語表現演習 IV b (2) | モリタ | MORITA, Liang Chua | Practical English Usage IV b |
| | ドイツ語表現演習 a (2) | ペータース | PETERS, Joerg | Practical German Usage a |
| | ドイツ語表現演習 b (2) | ペータース | PETERS, Joerg | Practical German Usage b |
| | フランス語表現演習 a (2) | デュクロ | DUCROS, Garance | Practical French Usage a |
| C 類 | 翻訳技術演習 I a (2) | 松岡光治 | MATSUOKA, Mitsuharu | Pragmatics of Translation I a |
| | 翻訳技術演習 I b (2) | 松岡光治 | MATSUOKA, Mitsuharu | Pragmatics of Translation I b |
| | 翻訳技術演習 II a (2) | (非)中西 須美 | NAKANISHI, Sumi | Pragmatics of Translation II a |
| | 翻訳技術演習 II b (2) | (非)中西 須美 | NAKANISHI, Sumi | Pragmatics of Translation II b |
| | 言語表現技術演習 a (2) | 長畑明利 | NAGAHATA, Akitoshi | Pragmatics of Verbal Expression a |
| | 言語表現技術演習 b (2) | 長畑明利 | NAGAHATA, Akitoshi | Pragmatics of Verbal Expression b |
| | 通訳技術演習 a (2) | (非)中西 須美 | NAKANISHI, Sumi | Pragmatics of Interpretation a |
| | 通訳技術演習 b (2) | (非)中西 須美 | NAKANISHI, Sumi | Pragmatics of Interpretation b |
| D 類 | 情報システム基礎演習 a (2) | 小松雅宏 | KOMATSU, Masahiro | Fundamentals of Informatics a |
| | 情報システム基礎演習 b (2) | 小松雅宏 | KOMATSU, Masahiro | Fundamentals of Informatics b |
| | マルチメディア技術演習 a (2) | 後藤明史 | GOTO, Akifumi | Multimedia Technology a |
| | マルチメディア技術演習 b (2) | 後藤明史 | GOTO, Akifumi | Multimedia Technology b |
| | eラーニング技術演習 a (2) | (非)尾関 修治 | OZEKI, Syuji | E-Learning Teaching Techniques a |
| | eラーニング技術演習 b (2) | (非)尾関 修治 | OZEKI, Syuji | E-Learning Teaching Techniques b |

(客) : 客員教授 (非) : 非常勤講師

名古屋大学大学院
国際言語文化研究科
OPEN
CAMPUS
2008.6.28 [SAT]

文系総合館7階カンファレンスホール 名古屋大学大学院国際言語文化研究科

学びのガイダンス 14:10-14:30
「10分でわかる入試から修了までの仕組み」

院生とのクエスチョン・タイム 14:30-16:00
「院生に尋ねる：国際言語文化研究科はどんなところ？」

オープンキャンパス 15:00-17:00
12講座・2コースの教授陣による視察授業・レクチャー・
研究紹介・質疑応答・教員間ディスカッション

日本言語文化専攻 メディアプロフェッショナルコース
国際多元文化専攻 高度専門職業人コース

問い合わせ：名古屋大学文系総務課 TEL: 052-789-5312 E-mail: campus@lang.nagoya-u.ac.jp
http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/campus/

名古屋大学大学院
国際言語文化研究科
入試説明会

大学前生と教員が、皆さんの疑問を解決します。
どうぞお気軽にご相談下さい。

2008.6.7 [SAT] 10:00-12:00 / 14:00-16:00
東京八重洲ホール (JR 東京駅徒歩 3 分)
TEL: 03-5501-8581

2008.6.16 [MON] 10:00-12:00 / 14:00-16:00
メルパルク京都 (JR 京橋駅中央口徒歩 3 分)
TEL: 075-352-7444

お問い合わせ：名古屋大学文系総務課 TEL: 052-789-5312 E-mail: campus@lang.nagoya-u.ac.jp
http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/welcome/

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

旧交を温めよう 互いに刺激を受けよう

言語文化フォーラム2008

- 名誉修了生授賞式 9:45-9:55
- 名誉修了生発表会 10:00-10:55
日本言語文化専攻
山本幸一氏(愛知教育大学附属高校) 外二ミラーと成立条件
大津友美氏(東京外国語大学講師) 親しさと会話行動との関わりについて
多元文化専攻
山田創平氏(エイズ予防財団研究員) 東アジア地域におけるHIV感染対策の現状と課題
山辺浩太氏(広島経済大学准教授) 修士論文から現在の研究へ
- 同窓会発起会 11:00-11:10
研究科長挨拶・同窓会来賓挨拶
- 招待講演会 11:15-12:15
王 敏(法政大学教授) 環境と自然そして人——日中比較の角度から
- 懇親会 12:30-14:00

言語文化フォーラム 招待講演

王 敏 (法政大学教授)
環境と自然そして人
——日中比較の角度から



問い合わせ
052(789)5312
act@lang.nagoya-u.ac.jp

日中の相互理解は、両国が現象を共有することから生まれると説き、相互誤解克服の道をたえず追う知日家による講演。

- 紹介■
中国・河北省生。国費留学生として来日。
日本ベンクラブ国際委員等歴任。
著書：『宮沢賢治・中国に翔ける思い』（岩波書店）
『花が語る中国の心』（中公新書）
『日本と中国 相互誤解の構造』（中公新書）他多数

開催日：2008/10/18（土）
開催時間：11:15-12:15
開催場所：文系総合館7F
カンファレンスホール

主催：名古屋大学大学院国際言語文化研究科

問い合わせ
052(789)5312 act@lang.nagoya-u.ac.jp

大学院入試説明会
IN 上海

2008.7.28 [Mon] 10:00-12:00 / 14:00-16:00

名古屋大学上海事務所 名古屋大学大学院国際言語文化研究科

全体会 10:00-11:30 / 14:00-15:30

研究科概要ガイダンス 10:00-10:10 14:00-14:10
吉村正和研究科長「研究科の魅力とは？」

学びのガイダンス 10:10-10:20 14:10-14:20 PDF版
鈴木崇夫副研究科長「10分でわかる入試・授業・修了・就職」動画

大学院生とのクエスチョン・タイム 10:30-11:30 14:30-15:30
「院生に尋ねる：国際言語文化研究科はどんなところ？」
名古屋と上海との間をネットで交信

個別相談会 11:30-12:00 / 15:30-16:00
研究科長、副研究科長および協賛文芸教授

制作： 広報委員会
就職・同窓会委員会

2008年10月12日発行

名古屋市千種区不老町 B-4 (700) 名古屋大学大学院・国際言語文化研究科
〒464-8601 / Tel: 052-789-5312 (庶務) 4881 (教務)

/ Fax: 052-789-4873

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/index.html>